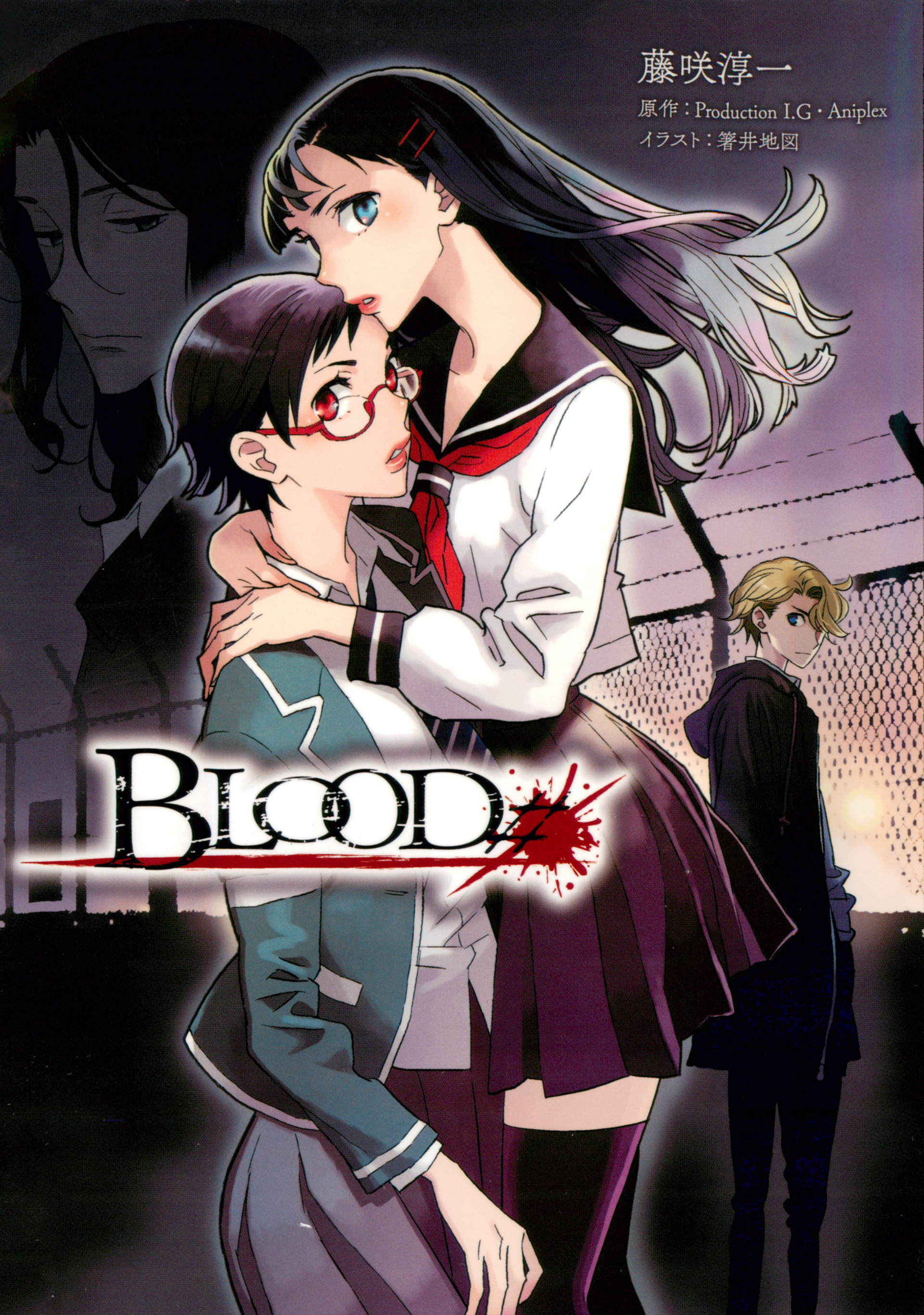
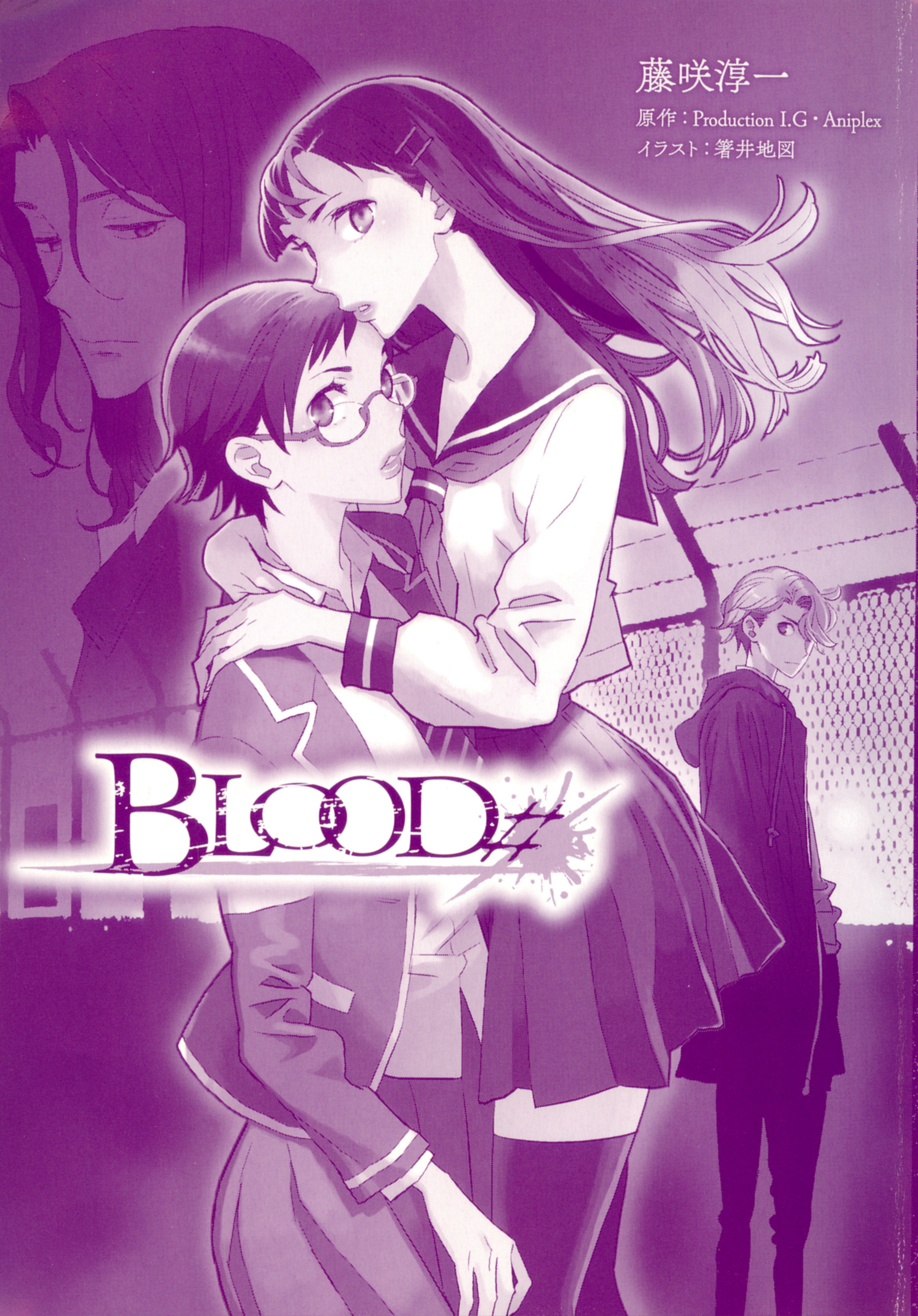

藤咲淳一
原作：Production I.G・Aniplex
イラスト：箸井地図
BLOOD



藤咲淳一

原作：Production I.G・Aniplex

イラスト：箸井地図

BLOOD

MAG Garden NOVELS

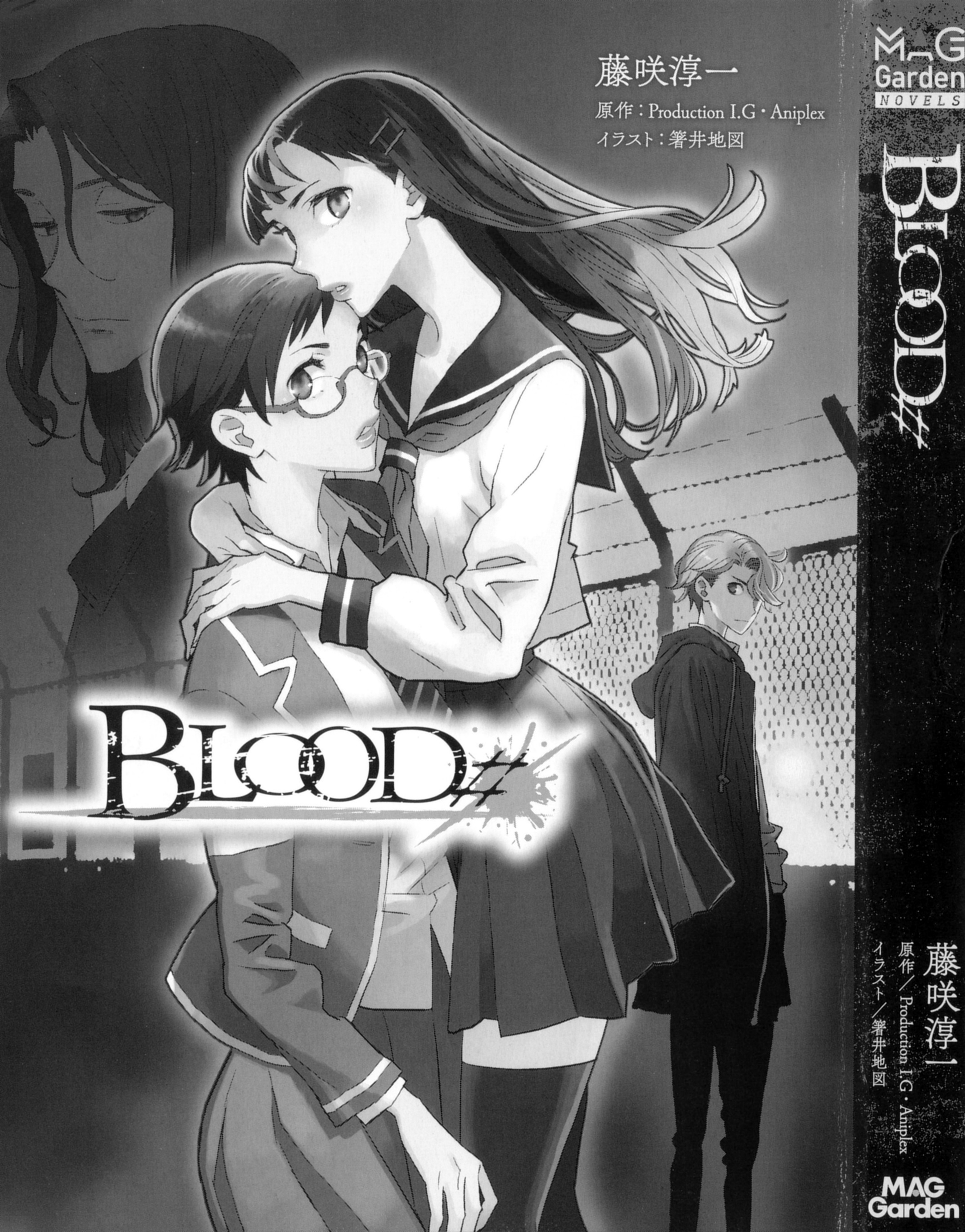
BLOOD

藤咲淳一

原作／Production I.G・Aniplex

イラスト／箸井地図

MAG Garden


藤咲淳一
原作：Production I.G・Aniplex
イラスト：箸井地図
BLOOD#
MAG Garden NOVELS
BLOOD#
藤咲淳一
原作／Production I.G・Aniplex
イラスト／箸井地図
MAG Garden

ディーヴァが産んだ姉妹――

音無響と奏は、引き取られた宮城カイのもとで大きく成長を遂げ、高校生となっていた。

現在は沖縄を離れ、東京にある米軍基地がほど近い町でカイとともに暮らすふたり。

将来の進路を悩むなど、普通の学生として平穏な日々を過ごしていた。

しかし、響のクラスに青い目を持つ転校生が編入してきたり、

奏はバンドを始めようと一念発起をしたりと、

ふたりの静かだった日常に変化が起きる……。

ISBN978-4-8000-0657-8
C0093

BLOOD#



藤咲淳一

原作：Production I.G・Aniplex

イラスト：箒井地図

目次

登場人物

●音無響（おとなしひびき）　都立高校の一年生。奏の双子の姉。伊達メガネをしている。

●音無奏（おとなしかなで）　私立高校に通う一年生。姉の響とは性格が似てないと言われる。

●宮城カイ（みやぐすくかい）　響と奏の養父。沖縄風居酒屋ＯＭＯＲＯの店主。

●ルイス　カイの旧友。正体不明のふとっちょの黒人。

●アダム　響と奏のひとつ年下の幼馴染。今はなにをしているかわからない。

序章　『母』

軽やかな歌声が夏の木漏れ日の中に響いていた。
その歌声を子守唄に双子の赤ん坊たちは寝息をたてていた。
ふたりに名前はまだなかった。
名前をつけることで、双子の母親はふたりが個々の存在として育っていくことを嫌っていたからだ。
永遠に離れることなく、ふたりはずっと一緒にいてほしい。
それがこの母親の願いだった。
自らが叶えられなかった、たったひとつの願いを代わりに遂げてもらいたい。
母親の手が優しく赤ん坊の髪の毛を撫でていく。
そしてその唇から流れる歌声で、赤ん坊の耳にその愛を届けるのだ。
「私の明日はあなたたち。ふたりで仲良く歌いなさい」

その夢は、いつもここで終わる。
なぜこんな夢を今も見るのだろう。
きっと叶わぬことだから。
今の私たちの現実とは、違いすぎるから――。

第一章・『響と奏』



HIBIKI

転校生

人は未知のものに憧れと畏れを抱く。
好奇心がそれを求め、自らが持つ常識という防衛本能がそれを遠ざけようとする。
金網の向こう側にあるよその国のこともそうだ。第二次世界大戦の頃は、敵として畏れられ、そしてやがては未知の世界への憧れの対象となり、都合よく脅威の対象として利用したり、されたりしている。
「こっちがニッポン。あっちがアメリカ」
その声が、真冬の早朝の空気を震わせる爆音にかき消されてしまう。
音無響（おとなしひびき）の目にメガネ越しに映る輸送機のシルエットはＣ１３０ハーキュリーズだろう。
この時間帯での離着陸はあまり例のないものだったが、こうした光景は日常茶飯事の範疇と言えなくもない。
これが二番ゲートの交差点で信号待ちをしている音無響が見ている日常だった。
国道一六号線を隔てたフェンスの向こう側にある横田基地はもうアメリカの管理下にある場所だ。
そのためか、このあたりの通りもどこかアメリカの香りが漂っている。
五番ゲートから二番ゲートまでの道に沿って植えられたヤシの街路樹がアメリカの空気を演出しているからかもしれない。また並んでいるのも、どこかアメリカの家具や雑貨を扱った店だったり、アメリカンフードを売りにしている店もあるためかもしれない。敷地が広大で複数の自治体にまたがっているため交差点を越えるとまた別の景色になったりもする。

そんなところが沖縄のコザを思わせる香りがあった。

響が幼い頃、暮らしていた場所だ。

よく一緒に遊んでいたひとつ年下の男の子がいたはずだった。癖のある金髪に、青い目がきれいだったあの子――。

「アダム……っていったっけ」

ふとその名を口にしても、髪と目の印象以外、輪郭が曖昧となっていた。無理もない。もう一〇年以上も昔の話だ。

五歳になる頃、沖縄を出たときに別れたきりになっていた。両親も外国人だったはずだ。おそらくは米軍関係の家族だったのかもしれない。そうした日米の文化が入り交じった独特の空気が全ての垣根を取り払っていたのだ。

今となってはいい思い出だ。

だからかもしれない。

この町は響にとって居心地のいい場所でもあった。

ひとりでいられるときは――。

信号が青へと変わり、自転車のペダルを漕ぎ始める。

やがてヤシの木の街路樹がなくなり、国道一六号の両側に金網のフェンスが現れる。ここはもう国道以外は両側が米国空軍の管理下の土地だ。広大な駐車場の中に戦場で見かけるような軍用車の姿が見られ、そこに迷彩の戦闘服を着込んだ兵士たちが集まりなにかをしていた。これからどこか訓練に出かけるのかもしれない。

でもどこかのんびりした空気が漂っている。

それはここが戦場ではないからなのだろう。

金網のフェンスの向こうに先程着陸したＣ１３０ハーキュリーズの姿が見てとれた。あれはどこか戦場に行くのだろうか。確か遠い国では民族間の紛争といったものが起きているそうだ。それを煽るテロリストが作った国もあるとニュースで言っていた。

でも、ここは平和だ。

なにも起こらない日常が繰り返されている。

だから平凡に生きていこうと、響は思っていた。

今は高校を卒業して、大学に行こうと考えていた。でも奨学金が取れなければ進学は厳しいかもしれない。そこまで響の家は裕福ではなかったからだ。駅から近い立地だというのに客の来ない沖縄の家庭料理をウリにしている居酒屋をやっていた。あれで響と、妹の奏（かなで）のふたりを男手ひとりで養っている養父のことを考えるとあまり無理は言えないかもしれない。

そんなことを考えているうちに、国道一六号は基地に沿って大きく右に曲がり、新青梅街道の交差点へとぶつかった。この信号を渡ってしばらく行けば、自宅から五キロほどの高校に着く。電車では三駅の場所にあった。駅からは歩いて約一〇分の距離のため電車通学の生徒も多い。けれど響は人の多い場所が苦手で、電車を使うことなどまったく考えていない。電車では、この時間に家を出てこんな早い時間に学校に着くことなどできないだろう。

まだ閉まったままの校門が見えてきた。その脇の石柱に校名のレリーフがある。

都立瑞穂東高校。ここが響の通う高校だった。

進学クラスはあるけれど、これといって特徴のない普通の高校だった。二年前に青森からこの土地に越してきて、

進学のときに家から近く、中学の教師が薦める偏差値高めの都立高校ということで決めただけだ。だからといって悪い印象はない。金銭的な問題で進学クラスへの入学はできなかったものの、普通クラスの中にいながら響の成績はかなり優秀で、進学クラスの生徒たちをおさえて学年トップになることもあった。進学クラスの中にやたらと響をライバル視しているエリート意識の高い勉強のできる男子生徒がいるくらいで、相手にしなければ害はなかった。

まだ扉が閉ざされたままの正門の脇にある通用口を自転車を押してくぐり、自転車置き場に自転車を置くと、体育館脇にある運動部部室棟へと向かう。そして誰もいない部室の鍵を開け、度の入ってない伊達メガネを外してジャージに着替え、中距離走用のシューズに履き替えて、ストレッチをしながらグラウンドへと入り、トラックに立つ。

上半身の筋肉、太もも、スネ、アキレス腱をストレッチで入念に伸ばしていく。身体が温まってきたところでゆっくりと走り出し、そして左腕のスポーツウォッチのタイマーを押す。走行距離は一〇キロ。時間にして――。いや、記録に意味はない。他の生徒が来るまで走り続けられればそれでいい。

誰もいない、響だけの空間がそこにはあった。

これが響のいつもの朝だった。

このルーティンを経たのち、学校が始まると、響はこの学校の生徒のひとりとして埋もれるのだ。

目立つことなく、静かに過ごすために。

だからこそこの時間が大切だった。

「うん、いつもどおり」

響の身体が朝の冷気を切ってグラウンドの上を進む。

黙々と、ペースを変えることなく同じリズムを刻みながら。

響は走りながらこう思うこともある。
——もっと速く走れるかもしれない。だったら走ってみたらどうなのだろう——。
けれど熱い塊を身体の中から解放しようとすると、ふと冷たい声が囁くのだ。
——お前は普通の人間だ——。
そう。
私はこの場所に溶け込んで生きていくのだ。
人とは違う。
そんなこと、思われたくはない。

——お前は人とは違う。

いやだ。もうあんな目で見られたくはない。
自らを律するかのように一周二〇〇メートルのトラックをそのペースを維持したまま響が走り続ける。
走り続け、周回を重ねるうちに、ふとなにかに気づく。
人だ。
グラウンドの外周に植えられたシイノキの傍に人影があった。
いつからそこにいたのだろう。
その人影はじっと響のことを見つめていた。

この学校の制服を着た男子生徒。見たことのない顔だった。上級生なのかもしれない。どこか日本人離れした顔立ちをしている。基地が近いため、国際色豊かな人間が多く、生徒の中にもハーフの子が何人かはいた。けれど彼らはそれなりに目立つため、今、こちらを見ている男子生徒がいたとするなら響は覚えていただろう。もしかすると上級生なのかもしれない。

その男子生徒と目が合った気がした。

「青い、目……？」

五〇メートル以上は離れているのに、なぜかそう感じたのだ。

その青い目がまるで観察するかのような視線を響に向けていた。

走る響の視界からその男子生徒が後ろへと流れていく。

次の周回でまた元の場所に差しかかったとき、その男子生徒の姿はなかった。

あれは、いったい誰だったのだろう――。

＊＊＊

朝練を終えた響が教室の席に着くなり、隣の席の同級生、五嶋(ごしま)ミノリが泣きついてきた。

「音無委員長様、数学のノート見せてくださいませ。昨日の宿題のやつ！　私、ぜったい今日、当てられるし」

「学級委員として忠告するけど、自分の力で解いたほうがためになると思う」

「だめ。数字アレルギーだから、公式に五分も向き合えないもの。それにこの前の期末テスト、学年第二位の音無な

ら絶対安心だもの」
仕方ない――、と響は机の中からノートを一冊取り出すと、それをミノリに手渡す。
「授業までには返してね」
「大丈夫。今写しちゃうし」
ミノリは受け取ったノートの上の几帳面にまっすぐに書かれた小さな文字を自分のノートに写しながらボヤく。
「響ってさー、こんなに勉強できるのに、なんで進学コースに行かなかったの？」
「うちって貧乏だから」
「拝島（はいじま）のところの居酒屋さんだっけ？　おもしろ？」
「ＯＭＯＲＯだよ。お客さんの来ない沖縄風居酒屋。最近になって武蔵野うどんも始めたみたいだけど」
「なんか微妙。でも進学コースってそんなお金かかるの？　うち都立なのに」
「いろんなところの模試とか夏季合宿参加とかあるみたい。そういうお金って別じゃない？」
「それでも響、こないだの冬の期末、学年二位じゃん」
「順位なんてどうだっていいよ。大学の推薦もらえるなら、それで」
あまり目立ちたくはないが大学には行きたかった。家庭の経済状況を考えるなら、成績はいいほうがいい。考えた結果の選択だった。順位には興味はないが、将来のためだとそこだけは割り切っていた。
「でもさ、一学期の期末で響が学年トップになったとき、コマツがすんごい目で見てたじゃん」
「コマツくん……か」
進学コースの成績優秀者の男子生徒だ。東大とか京大とかに進学志望の、コマツジロウという名前だったはずだ。

彼の歯をむき出しにして響を銀縁メガネの分厚いレンズ奥から睨んでくる視線を響きは覚えていた。憎しみ。妬み――、そんな感情が乗った視線だった。
更に順位表の前で「負けないからな」と裏返ったヒステリックな声で言われたことも記憶に残っている。
「そのコマツがさ、なんかクスリやってるって知ってる？」
「知らない」
「キメると頭がすーっとする、シャープってやつ。尖るからシャープね。なんか流行ってんだって」
「それって――」
「あ。合法のやつだから。ちゃんとした海外の製薬メーカー製のサプリメントみたいな。アブナクないんだって。でも進学コースでコマツの成績が急に上がったから、流行りだしてるみたい。クラス全体で。頭がよくなるクスリって」
アブナイ薬の噂は響も耳にしていた。この学校ではあまりないが、他の学校などでは素行のよくない学生が手を出しているとかいないとかで問題になっているようだった。
「あーあ、私も欲しいなぁ、頭のよくなるクスリ」
「それより早くノート写さないと。先生来るよ」
響の言葉と同時に予鈴が鳴り、教室の前の入口から担任教師のコバヤシが顔を見せた。
「ほら」
先生来たよ――と響が言葉を続けようとして、その言葉を飲み込んだ。
コバヤシの後ろからついて入ってきた人物を見たからだ。
――あの人――。

今朝、グラウンドで見かけた男子生徒だった。
癖のある黒髪が額にかかっていた。その下の青い目が教室に入ってくるなり、まっすぐ響に向けられた。
「今日から一カ月だけだが、ご両親の都合で短期留学する——」
「デヴィッド。デヴィッド・ゴルトシュミットです。一カ月の間、よろしくお願いします」
静かだが力のある、心地よい声が耳に届く。
「日本語うまい」
「基地の子かな」
「かっこかわいくない？」
デヴィッドに対する賛辞がそこかしこから聞こえてくる。主に女子の声ばかりだったが。
「ヤバ。惚れるかも」
隣の席からぼそりとつぶやくミノリの声がクラスの女子のほとんどの気持ちを代弁していたかもしれない。
ただ響はひとり、そうした女子とは違った目でデヴィッドを見ていた。
確かに、癖のある黒髪に青い目、痩せ型で背丈は響よりも低いくらいかもしれない。にも拘らず、立ち姿は自然に胸を張るような姿勢となっている。おそらく体幹の筋肉がバランスよくついているからだろう。
デヴィッドはコバヤシに指示されて、廊下側の一番後ろに用意された席に座った。皆がデヴィッドの一挙手一投足に視線を投げていた。物珍しさもある。それ以上に人を惹きつける引力のようなものが彼にはあった。その席に着く前に、デヴィッドが響の方を一瞥する。本当に一瞬だった。その視線に気づいた生徒はいなかっただろう。けれど響にはわかった。その青い目が自分に向けられていることを。それは早朝のグラウンドで響を見ていたのと同じ視線—

——、それは響を観察しているかのような冷たい視線だった。
なぜ私をそんな目で見るのだろう——。
意識しすぎなのだろうか。
響はその視線から逃げるように目の前の教科書へと視線を落とした。
気にしなければいいだけの話だ。
そう思った響だったが、デヴィッドの存在はそれを許さないものだった。
「おお……」
そんな声が教室に溢れた。
英語の授業での一幕であった。デヴィッドが教科書にある物語の一説を英語で朗読してみせただけなのだが、教師が止めるのを忘れて聞き惚れるほどにそれは見事なもので、ただ文字を言葉に変換するだけではない、朗読として読解し成立した語りは一種のエンターテインメントだった。
そして万葉集を扱った古典の授業でも、日本人である学生たち以上にその造詣が深く、ひとつの和歌から連なる歴史模様含めての解説をしてみせたのである。
体育の授業でもその有能さを見せ、次の数学の授業においてはもう語る必要がないほどに皆がデヴィッドの存在が別次元のものであることを確信していたのである。
わずか四時間ほどの間に彼はクラスメート全てが無視できない存在となっていた。それどころか休み時間に噂を聞きつけた近くのクラスの生徒たちも、席に着いたまま文庫本に目を落とすデヴィッドを遠巻きに見つめている。
これだけ注目を集めれば、話しかけようとしたり、積極的な女子生徒がメアドの交換くらいには行きそうなものな

のだが、それすらなかった。
違いすぎるのだ。
そこにはまるで不可視のまばゆい壁があるかのようだった。
——それでも、私には関係ない。

＊　＊　＊

響が部活を終える頃にはあたりはすっかり暗くなっていた。
賑やかなアメリカの雰囲気のある街並みを通り過ぎ、鉄道の上をまたぐようにかかる陸橋を渡りきり、拝島駅へと分岐する交差点を横断すると地元の商店街の端っこにある謎のロータリー沿いに明るく照らされた看板の名前が浮かび上がる。
沖縄風居酒屋ＯＭＯＲＯ。
沖縄料理がメインとなった小さな居酒屋が響の家だった。
学校からペダルを漕いできた自転車を建物の脇へと停めると、店のガラス戸を開いて中へと入る。
「いらっしゃい」
威勢のいい声が響いた。見るとカウンターの中にふっくらと太った黒人男性が立っていた。口ひげをたくわえ、陽気そうなくりっとした目を向けて微笑む。大柄な男だがこの愛嬌ある表情のせいで誰もが気を許してしまうような男だった。

「なんだ、響ちゃんか。珍しく、お客さんが来たのかと思ったよ」
「ただいま、ルイスさん。……お義父さんは？」
「醤油が切れちまったんでな、カイならスーパーまで行ってるよ」
「お店をお客さんに頼んで？」
「なに。あいつとは昔からの仲だ。気にしない、気にしない。あー、あいつがよく言ってる……なんだったかな」
「ナンクルナイサ」
「それそれ」
ナンクルナイサは沖縄の方言だ。なんとかなるさ、という意味らしい。
養父の宮城(みやぐすく)カイが口癖のように使う言葉だった。
しかしここにこの店を構えてから二年になるが、賑わうほどの客を見たことがない現状は、響から見てもナンクルナイサではないことがわかる。それなのにどういうわけか貧しいとかそういう思いはしたことがなかった。なんでもカイの父親の保険金がかなりあるという話ではあったが、本当かどうかも怪しかった。
沖縄風居酒屋とはいえ、扱っている料理も研究を重ねているというカレーやら、東京に来てから覚えた武蔵野うどんやら、イギリスのキドニーパイなどもあったりする。カイが覚えてきた料理を片っ端から出しているからだ。
「帰ったぞ」
ガラス戸がガラリと開き、オレンジがかった色の長い髪を雑に後ろで束ねたカイが入ってきた。
「響も帰ってたのか。ちょうどいい。みんな揃ったし晩飯にすっか」
「みんな？」

「ただいまー♪」
カイの後ろからサラリとした長い髪が覗いた。いたずら好きな顔をした響とうりふたつの顔をした女子高生――、妹の音無奏だった。
通う高校もまったく別。都立高校に自転車で通い、成績優秀で陸上部の部活動にも熱心な響に対して、奏のほうは立川にある私立高校に通い、帰宅部で毎日いろいろな友達と遊んでばかりいるようだった。
「カイと駅前で一緒になっちゃってさー」
「カイじゃなくてお義父さんって呼べよ」
「だって他人じゃん」
奏ははっきりと物を言う。響が考えてから物を言うのとは対照的に。
「私と血の繋がりがあるのはお姉ちゃんだけだもん。ね？」
「……そうだけど、私たちを育ててくれてるし、やっぱりお義父さんだよ。戸籍上もちゃんとそうなってるし」
「でも私たちの苗字って、音無じゃん」
「それは――」
響と奏は赤ん坊の頃に、養父である宮城カイに引き取られ、男手ひとつで育てられてきたのだ。そんなカイは、響たちを引き取る前の話はあまりしなかった。母親は亡くなったとだけ聞かされているし、伯母の墓参りに行った記憶もあるため、血の繋がりのある身内は奏だけということになる。こうした経緯をカイと旧友のルイスに聞こうとしても、お茶を濁されてしまうのだ。
だから、いつしか昔の話を尋ねることはなくなった。

響も昔のことはあまり思い出したくはないと思っていた。
特にあの夏の記憶は――。
ふと響の視線が奏の腹部へと動く。
そんな響にカイが助け舟を出した。
「それはな、お前の伯母さんからの頼みだからだよ。……血は繋がっちゃいないが俺の大事な家族である義妹からのな。だから勘弁な」
「死んじゃった人のこと出されたらなにも言えないじゃん」
「血の繋がりはなくたって、家族やってけんだからいいだろ。ナンクルナイサ〜」
カイが奏の頭にぽんと大きな手のひらを載せ、そして続けて隣にいた響の頭にもそれを乗せた。
昔からこうだ。
この大きな手を載せられたら、響たちはなんとなくおとなしくなってしまう。
カイの手の大きさと、温かさがそう感じさせるからかもしれない。
「子供じゃないし」
奏が頬を膨らませて抗議するが、怒っているというより完全にポーズだ。
「たまには親の言うこと聞けって。それにこの前の検査だって行かなかったって先生から聞いたぞ」
「だって血抜かれるのやだし〜」
「薬だって飲んでないだろ。ゴミ箱にあんの見つけたぞ」
「お姉ちゃんのだよ」

「捨てられたのお前用のやつだった。それに響はちゃんと飲んでるし、検査も行ってる。な」
うん、と響は頷いた。
「お姉ちゃんは真面目だもん」
幼い頃から繰り返し行われてきたカイと響たちとの行事。
ふと響の脳裏に暗い記憶が蘇る。

地面に広がり始める血だまり。
その血は倒れている幼い奏から流れ出ていた。
呆然と立ち尽くす幼い響。
そして、その手から滴り落ちる血が作り出した、血だまりに浮かぶ薄氷のような結晶。

響がぎゅっと目を閉じ、その光景を意識の中から弾き飛ばすかのように頭を振った。
「お、なんか気に触ったか？　わりぃ」
カイが響の突然の行動にちょっと驚いたように謝った。
「ううん……。お義父さんのせいじゃない」
いつもどおりにしないと。
響はそう自分に言い聞かせ、平静を装った。
ルイスがいたためか、晩御飯はいつもより賑やかだった。

＊＊＊

晩御飯を済ませると「疲れてるから」と言って、響は二階にある部屋に戻ると、明かりもつけずにベッドに制服のまま仰向けに横たわる。

うっすらと聞こえてくる階下にあるＯＭＯＲＯの店内ＢＧＭとルイスの笑い声。

そこに混じるひときわ高い笑い声は奏のものだろう。

楽しそうだ。

そして更にこうも思った。

どうしてあんな風に楽しそうにしていられるのだろう――、と。

ひと眠りすればまたいつもの日常が戻ってくるのだろうか。

「奏。もうしまいにするから暖簾しまっといてくれ」
カイの言葉にスマホから目を離さずに奏が返事をする。
「やだ。外寒いし」
まったくと言いながら表に出たカイが店の暖簾を手に戻ってくる。
「青森よりはマシだろう？」
「沖縄帰ろうよ、沖縄」
「もう覚えてないだろ、沖縄のこと。お前たち、五歳だったし」
「覚えてるよ。おばちゃんのお墓参り行ったじゃん。お弁当持ってさ」
「まあ、そうだけどよ」
「沖縄出て横須賀、次が厚木で、その次が青森でしょ？　そして今は東京。いい加減落ち着きたいのに。友達だって離れ離れになっちゃうし」
「仕方ねえだろ。大人の事情ってやつがあるんだ」
「ふーん。借金とか？」
奏の指摘にカイが黙り込む。
「当たっちゃった？」

「ブー。ハズレ」
「でもさ、もしほんとにヤバイなら言いなよ。バイトでもなんでもするからさ」
「バカ。娘働かせてどうすんだ。それに高校生ができるバイトなんてたいした稼ぎにならねえだろ？」
「なるよ。ちょっとデートすればいい稼ぎになるってヨコチが言ってたし」
「そういうのは止めとけ。それにだな、そのヨコチって子もだな――」
「また、だな、が始まった」
言葉を「だな」で繋ぎだし始めるとカイの小言が始まることを奏は知っていた。
「わかりました～」と言って奏がカウンターの丸椅子から立ち上がり、店の奥へと入っていく。
背中からカイの声がかかるが、今は無視。この場は逃げるに限る。
そしてバタバタと階段を駆け上がり二階の自宅部分の短い廊下に沿って二つ並んだ奥の部屋へと入っていく。
そこが奏と響の部屋だった。
「あれ？」
奏が部屋に入ると既に天井につけられた蛍光灯は消されていた。
二段ベッドの下の段を見ると、制服を着たままで響が横になり、寝息を立てていた。
「お姉ちゃん、風邪ひくよ」
だが返ってくるのは規則正しい寝息だけだった。
「……返事がない。しかばねのようだ」
そんなゲームの中の台詞をつぶやきながら、奏が仕方ないなと足元に折りたたまれていた毛布を広げて響の上に掛

けてやる。

そしてカイがベッドに取りつけたカーテンをそっと閉めて、ふたつ並んだ学習机の右側のライトをつけた。

それが奏の机だ。

机の上には鏡やコミック、化粧道具が雑然と置かれている。

一方、左側の響の机の上はきれいに整頓されており、教科書などがきっちりとブックエンドの間に置かれていた。

奏の教科書は学校のロッカーの中に置いたままだった。持って帰ってくるのは試験前だけだ。

「お姉ちゃんと私。双子なのになんでこんなに違うんだろ?」

ぼそっとつぶやいた言葉に響の声にならない声が重なった。

寝言のようだった。

なにを言ったのかは聞き取れなかった。擬音にするなら「むにゃむにゃ」みたいな感じだ。

響は早朝から部活に行っているからかもしれない。

そういえば奏もなんだか抗えないような眠気がやってくることがある。響も同じなのかもしれない。

響とは双子なだけに、体調の波なども割と似ている。月に一度のアレなどもほぼ同じタイミングでやってくる。

子供の頃からそうだった。

同じおもちゃを取り合ったり、同じ食べ物が好きだったり、いつも似たような行動をとってしまう。

響のあとを追って走る奏は、いつも響と同じことをしていた記憶しかない。

そういえば金髪のあの男の子のことも、一緒に好きになったような気がしていた。

ふたりが五歳になる頃に沖縄から横須賀へと引っ越しをしたので金髪の男の子とは離れ離れになってしまった。沖

縄という土地柄、米軍関係の子だったのかもしれない。

「……名前、アダムっていったっけ。そういや上の名前知らないや」

奏たちはそうしたものを置き去りにしたまま、新しい土地へと移っていくのだ。

いつか奏自身もこの場所から——、響とカイの傍から離れていくようなことがあるのだろうか。

ぼんやりと先の見えない未来のことを考える。

「やっぱバンドかなあ」

奏は響のように将来を見据えて大学進学をするようなことは考えていなかった。響は高校を出たらこの家から出ていくのかもしれない。それがやりたいことだからだろう。

やりたいことを今やらないでどうするのか。

だから奏は今やりたいことをやる、つまりバンドを作ってデビューするという夢を持っていた。

自分の思いを言葉にするよりも、音楽に乗せて気持ちよく歌えれば、なにかが変わると信じているのだ。

「明日、ギターもらったらそれが記念すべき歌手、音無奏の第一歩ってことだよね」

友達のヨコチこと横井千帆は軽音部に入っていて、別の高校の知り合いのケンジという男の子が、使わなくなったギターを譲ってくれるとＬＩＮＥで連絡があったのだ。

明日の放課後は立川でカラオケ。

そんな感じで毎日の動きが決まっていく。先行きの見えない遠い未来のことなんてどうだっていい。

奏がやりたいことはバンドだ。シンガーソングライターでもいい。

自分の歌を、自分の声で思い切り歌いたい。

今日と、ほんの少し先の明日だけ。
「ナンクルナイサ」
カイが口癖のようによく言っている言葉だ。そんな生き方が奏には合っている気がしていた。
ふと、奏が部屋着の裾をまくり上げる。
左腹部に見える二〇センチほどの傷痕。
子供の頃に、響と遊んでいるときに大きな怪我をした。
奏自身は、怪我をしたときに気を失っていたためか、そのときのことをあまりよく覚えていない。
どこか高いところにいた記憶だけは残っている。
そこから落ちて血がたくさん流れて死にかけたと聞かされていた。
「起きちゃったことは仕方ないじゃん」
そんな感じだから奏自身はあまりこの傷痕のことを気にしたことはなかった。ただ響はこの傷痕から目を逸らそうとする。風呂上がり、下着姿で部屋に戻ると響は必ず嫌な顔をする。それが少し悲しかった。
響のせいじゃないのに――。
寝息を立てる双子の姉の顔を奏は見つめた。
メガネを外している響は、奏と同じ顔をしている。
向こうはショートで、奏はロング。髪形は違っても双子は双子だ。
私は響と一緒にいたいのに――。ずっと、ずっと――。
でも響は大学に進んだらこの家を出ていくのだろう。

ひとりで生きていこうとするだろう。
カイという養父はいても、血の繋がりがある本当の家族は響だけだ。
私は取り残されてしまうのだ。
ぽつんと、ひとりで――。
そうした今の思いを歌にして響に伝えたいのだ。
双子の姉妹なのに、いつの間にか見えない壁ができてしまった。
それを越えられるのは歌声なのだ。
そんな直感が奏を突き動かしていた。
「なんか、眠……」
そんなことを思いながら、奏は不意に襲ってきた眠気に抗うことなく、パジャマに着替えてベッドへと潜り込む。
明日はカラオケ。ギターもらってバンドやって、私の歌をうたうんだ――。
そんなことを思いながら、奏は深い眠りへと落ちていった。

「ヨコチ、LINE見てないのかな」
既読の文字がつかないLINEの画面を見ながらぼそりと奏がつぶやく。
その耳を覆うヘッドホンからは音が漏れていた。
割と人気の高いビジュアル系バンドの代表曲だ。スマホに入れている音楽データの中からシャッフルされて流れてきた曲だ。壮大な世界観と伸びる高音のボーカルの声がマッチしていて、奏のお気に入りの曲だった。
密閉された電車の中ならともかく、その音楽は立川駅のペデストリアンデッキの喧騒のひとつとして溶け込み、周りから浮いた様子はなかった。
ヘッドホンの主である奏の頭の中にはその曲だけが聞こえていた。
他の音は入ってこない。
音の壁を作り、あえて遮っているのだ。
遮らなければ様々な音の波に、立川駅を行き交う人々の声に翻弄されてしまうからだ。
まだ午後を少し回った時間になったばかりだというのに、立川駅北口のデッキの上には人が途切れることなく溢れていた。
ここは南北を結ぶモノレールや、中央線、青梅線といった鉄道の乗り入れるターミナル駅のある町として発展し、平日、休日の区別なく賑わう場所だから当然のことなのかもしれない。奏の目の前を通り過ぎる人々も、スーツ姿や

制服姿、私服に作業着、いろいろと交じり合っていた。
奏もその中のひとりだ。
学校を昼休みで抜け出し、ヨコチと待ち合わせをしていた。制服姿で座っていても、別に誰も声をかけてくるようなことはない。それだけいろんな人間がこの町にはいるのだ。
こうしてデッキの上の謎のモニュメントの縁石に腰を下ろし、スマホをいじるのは奏ひとりでけではない。似たような若者たちが本当に多い。
――私もこの町のノイズの一部なのだ。
そんなことを思っていると、その肩がトンと叩かれた。
見るとフライトジャケットのレプリカを着た若い男が口をぱくぱくさせている。
なにかを言っている。けれどそれはヘッドホンから流れるビジュアル系バンドのボーカルのハイトーンボイスにかき消されてしまう。
なんだか歌に口パクが合っていておかしさがこみ上げてくる。
「リョースケ、なにそれ？『愛すべきは世界の全て』って」
リョースケの口が動いていた。なにを言っているのか聞こえない。
「あ、ヘッドホンか」
奏が頭に載せられたヘッドホンを外すと、その耳に周囲のノイズが一気に流れ込んでくる。
声だ。
いろんな人間の声が大量に音の洪水となって奏の頭を揺らす。この瞬間はいつになっても慣れない。

人の声が聞こえすぎるのだ。
聞き分けられると言えばよいのか。
大量の情報がなだれ込んでくるために、その中から目の前の声を探すのに戸惑うのだ。
奏はその雑音の中からリョースケの声を見つける。ラジオの電波を合わせるような感覚にも似ている。一番、クリアに聞こえる部分を感じ取るのだ。
「わりぃ、遅くなった。バイトなかなか抜けらんなくてさ」
「リョースケ、ひとり？　ケンジは？」
「ケンジ？　先に店行って部屋取ってる」
「じゃあヨコチも一緒かなあ」
「あー、そうじゃね？　あいつら付き合ってるわけだし」
「そっかあ。ずっと既読にならないからさ」
「ふたりで先に盛り上がってんじゃね？」
そうなのかもしれない。
行こうぜ、と先を行くリョースケのあとを奏はついていく。
立川駅北口から家電量販店のある表通りを横へと入り、裏道を行くと雑居ビルの二階にカラオケ屋があった。最近できた持ち込み自由の店で、値段も安い。店員も知り合いで割と融通が利くために、ここをよく溜まり場にしていた。
「ウィッス、ボブ」
「ウィッス。いるよ」

リョースケがボブという名の店員に挨拶をして、中へと通っていく。ボブといっても純和風の顔立ちで、鈴木健夫（すずきたけお）という名前であることを奏は知っている。

「部屋わかってんの？」

「いつもんとこ」

そう言ってリョースケが店の奥にある部屋へと向かう。確かにいつもの溜まり場だ。

「あそこ広すぎない？」

「そこは常連の強み。ボブが気ぃ利かしてんだろ？」

リョースケがガラス戸を開いて中へと入る。奏が後ろから続いて入っていくと、中央に置かれたテーブルを囲むようにソファが「コ」の字に並ぶ広い部屋が現れる。壁につけられた一〇〇インチの大型モニターがウリの部屋だった。

「よー」

広すぎる奥のソファにヨコチの肩に、ケンジの腕が回され、ヨコチはその体にしなだれかかっていた。

心なしかヨコチの顔が赤くなって見えた。

「ヨコチ、お酒飲んでる？」

「のんでないー」

明らかに酔いの回った陽気な声でヨコチが手を振った。

「高校生なのに」

「いーんだよ、バレなきゃ」

リョースケがソファに座って奏に隣に座るように招く。

けれど奏は戸口に立ったままだった。
「なんかこういうのヤダ」
「別に誰だってやってんだろ？」
「奏もこっち来なってば。一緒に気持ちよくなろーよ」
「そうそう。ヤバイのキメようってわけじゃないんだし？　なあ、ケンジ」
「ああ」
「ヤバイって、なにそれ？」
「頭ん中が尖ったみたいになるヤツだよ。合法ドラッグ」
「そうそう。シャープってんだっけ？」
「それ。頭がよくなるサプリってことで出回ってるよな」
「シャープ。鋭いとか、疾（はや）いといった意味を持つ英単語～。ヨコチって頭いい？」
ヨコチがスマホを見ながら自慢げに笑った。
「よかねえしカンニングじゃねえか。でもよ、あれ飲んでると、すげえキレやすくなるって話知ってる？」
「知らねえ。あれなに？　ベースから？」
「それはねえんじゃね？　ボブも言ってたけど、そういうの厳しいらしいし。奏のほうが知ってんだろ？　ベースに知り合い多いし」
「知り合いっていっても、ルイスって変なオジサンがカイと仲いいだけだし。私、そういうのまったく興味ないし。それよりギターはどこ？」

「ギター？」
ヨコチがろれつの回らない声で返事をした。
「ヨコチに頼んだじゃん。ケンジが譲ってくれるって」
ヨコチとケンジが顔を合わせる。
そしてふたりで息を吹き出し、笑い声を上げた。
「ヨコチ、なに。奏にそんなこと言ったわけ？」
「あー、そういえばそうかも。ま、いいじゃん。はやく動画撮ろうよ、めざせ一〇〇万再生」
「そういうことだからさ――」
そういうことか。リョースケの声を背中に受けて、奏がすっと動いた。
リョースケの腕が空振りするのを感じ取りながら、その脇をすり抜けて部屋から廊下へと出ていく。
「帰る」
「待てって」
その声を聞いても奏は足を止めるつもりはなかった。
リョースケの声が背後から追ってくる。それを奏はヘッドホンを耳に被せて消してしまう。あのロックバンドの歌声がまた聞こえてきた。
受付の前を通り過ぎるときにボブがなにかを言ったようにも見えたが足を止めるつもりはなかった。
奏の腕がなにかに掴まれる。
見るとボブだった。

「離せ！」
振りほどこうとするがボブのほうが力がある。
リョースケがそこに加わって、奏を背後から羽交い締めするように腕を回してきた。
「離せってば！」
初めからこういうつもりだったのかもしれない。違法動画でもうけているグループがいるとは噂に聞いていた。ヨコチもそのひとりだったのだ。
自分に近づいてきた目的も、それだったのかもしれない。
力いっぱい振りほどこうとするが、リョースケの力も思いの外強かった。振りほどこうともがくうちにヘッドホンがずれて笑い声が耳に飛び込んできた。
ヨコチだった。赤ら顔でこっちを見て笑っていた。
「足だ、足」
そんな声と同時に脚が誰かに持たれた。ケンジだった。
浅はかだった。
声を上げてもカラオケ屋の店内に流れる有線放送の歌声にかき消されてしまうだろう。店側も示し合わせている以上、もしかすると奏たちが入ったタイミングで準備中などになっているのかもしれない。
そのときだ。
店の入口の扉が強引に開き、そこから入ってきた人影がケンジの肩に手を置いた。
「だめよ。その子は」

女口調ではあったが声は男のものだった。
ケンジがその人物を見ようとした瞬間、どこをどうしたのかわからないが、ケンジの体が糸の切れた操り人形のように床に崩れ落ちた。そしてそれと一緒に奏の身体も、支えていたリョースケも床に転がった。
「誰だ、あんた!?」
ボブの荒々しい声が店に響いた。
「通りすがりの、ただのオカマよ」
その声と当時にボブの体も床へと崩れていく。
「私はね、キャスト以外が舞台に上がるのが許せないだけ。邪魔者は舞台の上から消えなさい」
豪華そうな毛皮を羽織り、細く足にフィットしたパンツを穿いた金髪の男だった。大げさなサングラスをかけていてよくはわからないが、年は中年を少し過ぎたくらいのようにも若いようにも見える。年齢不詳だ。
そのオカマが倒れているリョースケの顎を掴んで顔を自分へと向けさせる。
「あなたはどうする?」
リョースケの返事を待つことなく、オカマの手が動いた。するとリョースケも前のふたりと同じように床に眠るように崩れ落ちてしまった。
なにをしたのかはわからない。
ただこのオカマがなにかをしたのだろう。
先程まで笑い声を上げていたヨコチも呆然とした顔でこちらを見ている。
まるで魔法でも使ったかのように、若い男性三人がオカマがしたなにかで倒れているのだ。

「悪いけど、私、女の子だからって手加減できないのよね。オカマだし」
そう言ってオカマがヨコチのほうへと歩いていく。
ヨコチがバタバタと店の奥へと逃げ出し、部屋の扉が閉まる音が聞こえた。元いた部屋に飛び込み鍵でもかけたのだろう。
オカマがなおもそちらに進もうとする。
「やめて」
奏がオカマの背中に声をかけるとその足が止まった。
「……そう？　あなたがそれでいいなら、私の出番はおしまい」
そう言ってオカマがくるりとターンする。まるでバレエダンサーがするかのような優美なターンだった。そしてオカマは入ってきた扉へと歩き、舞台から退場するかのように出ていってしまった。
「またね」
そんな声だけが扉の外から聞こえてきた。
奏がそっと顔を外へと出すと、もうそこには誰もいなかった。
——いったい誰なのだろう。
気にはなったが、これ以上ここにいることはできない。
ケンジもリョースケもボブも気を失っている。ヨコチもしばらく部屋から出てくることはないだろう。
奏はカラオケ屋を出ていった。
脇道から表通りに出て、立川の町を行き交う人の流れの中に奏は紛れ込む。

もうヨコチとは友達でもなんでもない。
考えてみたら最初から示し合わせていたのだろう。ギターの話も嘘だったのかもしれない。
明日、ヨコチはどんな顔で学校に来るだろう。
来ないかもしれない。来てもたぶん顔を合わせようとしないだろう。
「別にいいや。友達なんて、また作ればいーし」
友達なんて作ろうと思えばいくらでも作れるし、引っ越しをするたびに友達一〇〇人達成してきたのだ。
「友達だよね」の一言で、簡単に友達になれる。
ただその友達の顔とアダ名は知っていても本名もどこに住んでいるのかも知らないことも多かった。
あるのは繋がりだけだ。
リョースケだって、ケンジだって、ヨコチだって仲のいい友達の輪でできた繋がりというだけだ。
奏はそこから先の関係に踏み込みたいとは思っていない。さっきのように、おかしなことになるからだ。
親友とかってほんとに勘弁。
「私のことをわかるのは、私だけ」
ぽそりとつぶやく奏の声はホームに滑り込んできた電車の音にかき消された。

＊＊＊

拝島駅の駅前は立川駅と打って変わってノイズが少なくなっていた。

電車が到着した瞬間はそこそこの数の利用者を吐き出すものの、少し経てば閑散としてしまう。
それでも駅前の商店街の周囲にはまばらではあるが人影もあった。
奏はロータリーからスナックなどが軒を連ねる道へと入り、その脇から通り抜けられるコインパーキングへと向かった。そこを抜けると自宅の沖縄風居酒屋ＯＭＯＲＯまでは近道なのだ。
まだ一四時を少し回ったばかりだ。
国道一六号を行き交う車もかなり多い。
コインパーキングにもかなり車が残っていた。
その車が並ぶコインパーキングの中に長く伸びた影法師が立ち上がったかのような黒いシルエットがあった。
影――に見えたのは、黒くて長いフード付きのコートのようなものを身にまとった男だ。そしてそのフードもすっぽりと頭から被っているためか、顔などはまったく見えない。そのせいでもあった。男であると判断したのも、その背格好からそう思っただけだ。
それほど気配というものがなかった。
コインパーキングの利用客なのだろうか。
ふとそんなことも思ったが、どこか様子がおかしい。
利用客であれば普通、自分の車の脇に立つだろう。だがこの男はその場所に立ち、ただ一点を見つめているようだった。その見つめる先は、奏の自宅でもある居酒屋ＯＭＯＲＯの方だった。
――キモ！
変質者かもしれない。

奏はあまり注意を引かないように男を遠巻きにしてコインパーキングを通り抜けると、ＯＭＯＲＯ前のロータリーへと続くスロープを足早に下りていった。

「変質者がいる！」

店の中に入るなり、奏がカウンターでぼんやりテレビの旅情報番組を見ていたカイに言った。

他に客はいない。昼下がりのこの時間、ランチ営業で開けているとはいえ、この店に客がいることのほうが珍しく、今日もいつものようにカイがひとりでテレビを眺めているだけだった。

「どこに？」

「そこのコインパーキング！」

カイがカウンターからうどんを打つ長さ九〇センチの麺棒を手にとり、店の入口から顔を外に出す。

が、しばらくして、

「……いねえぞ」

「いたって」

「でもいなかった」

そう言いながらカイが暖簾を手に取りガラス戸を閉めた。

「それよりお前、今日ちゃんと学校行ったのか？」

「行ったよ」

嘘ではない。昼には抜け出していたが。

「連絡あったぞ」

「あー」
この時間に帰ってきてるのだからサボりがバレるのは当然のことだろう。
「別に学校サボったことを責めるつもりはねえけど、適当に理由つけて早退するとか、ちゃんと断ってから帰れよな。なんかあったら学校に迷惑かかんだろ」
「うん」
カイにはこういうところがあった。親としてはどうなのかと思うこともあるが、他人に迷惑さえかけなければ自分の責任であり、そうである限りどうしようが自由だという言い分らしかった。カイがまだ奏たちと同じ年の頃は、かなりヤンチャをしていたとルイスから聞いたことがあった。詳しいことはなにも言わなかったが例えるなら、世界を敵に回して戦っていたぐらいのワルだったそうだ。
そう言われても奏には想像がつかなかったが。
「不良娘のせいで、また学校に呼び出しとかされたらたまんねえからな」
「別にカイが怒られるわけじゃないのに」
「学校が好きじゃねえんだよ。あの先生ってやつらがどうも好きになれなくてなあ」
「どーかん」
こういうところも気が合う。
奏はこんなカイが好きだった。もちろん父親としてである。
血の繋がりのない奏と響を育ててきてくれた恩も感じている。いつかはそれをきちんと返してみたいとも。
でもそれはもっとずっとあとでいい。

今はまだ、カイの娘でいたいと思っていた。姉の響はどう思ってるかはわからないけれど——。
「でもさ、お姉ちゃんは真面目に学校行ってるよね」
「今頃はまだ授業受けてんだろうな。お前と違って」
「ごめんなさい」
「よし、学校サボった罰だ。晩飯作るの手伝え。あいつ昨日元気なかっただろ？　とっておきのチャンプル、作ってやる」
「とっておきのって、あのゆで卵がまるまる入ってるやつ？」
「おう。元気出んだろ？　お前ら、ゆで卵好きだし」
「そーだけど。ゆで卵はゆで卵だけで食べたほうがおいしーと思うし」

＊＊＊

血の繋がらない親子が笑い合う賑やかな店の外には、ＯＭＯＲＯを見つめる人影があった。
その人影が微笑む。
「やっと、見つけた」

異変

今日は身体が重い——。
いつものように誰もいない早朝のグラウンドを走りながら響はそれを実感していた。
昨日、帰ってきてそのまま寝てしまったからかもしれない。いつの間にか毛布がかけられていたので、身体が冷えすぎることはなかったけれど、それでも身体の奥底に鉛のようなしこりを抱えているような気分だった。
生理が近いのかもしれない。あまり規則正しいほうではない。でも不思議と奏とはその周期が合う。だからきっと奏も同じような体調になっているかもしれない。
この身体の重さと一緒に、抗いがたい眠気が襲ってくることがあった。
昨日の夜もそうだったのかもしれない。
それが顔にも出ていたのだろう。
放課後となるまであと一時間、授業が残っていた。
そんな響を隣の席からミノリが覗いていた。
「音無、熱とかない？」
「うん。ちょっとだるいだけ」
「早退したらいいのに」
「そこまでじゃないよ」

「真面目だからね、音無は。私なら休んじゃうけどなぁ。あ、でも今は休めないけど。ライバル多いし」

「ライバル？」

「あれ」

ミノリが顔を向けた方向には、デヴィッドがいた。

自分の席で文庫本のようなものに目を落としている。

一日経っても青い目の転校生はクラスの話題の中心となっているようだった。その証拠にそんなデヴィッドに視線を送っているのはミノリだけではなかった。クラスにいる女子の多くがデヴィッドを見ている。そうした意味で興味のない響は少数派になるのだろう。

ただ興味がないわけではない。

ミノリたちのように好き嫌いの対象ではなく、なぜ時折、響のことをあんな目で見るのか、その理由が知りたかった。

あの視線——。

響が視線を向けると、デヴィッドが顔を上げ、またあの人を観察するかのような青い目でこちらを見返してくる。

それから逃げるように響が思わず視線を逸らす。

「ねえ、見た！　今こっち見たし。これって脈あり!?」

ミノリは気づいてないように、デヴィッドがこちらを見たことをはしゃいでいる。

「そうだといいね」

徐々に身体全体を叩く波のようなものが大きくなる感じがしていた。それは周りの空気が響ごとぐにゃりと歪んだかのような感覚で、それに耐えきれず、ぐっと苦いものが胃の奥からこみ上げてくる。

「ごめん。ちょっとトイレ」
響が重そうに手をついて机から立ち上がる。
「一緒に行こうか？」
「大丈夫。先生来たら言っといて」
ミノリの同行を断って、廊下の方へと歩きだす。
廊下の出入口に近い席に座るデヴィッドの視線を感じたが、今はこの違和感のほうがつらかった。
——なんだろう、これ。
ふらつくような感覚があったが、気を集中してなんとか一歩一歩と足を進めて廊下を進んでいく。
隣の進学コースの教室の前を通りかかるときに、その違和感が強くなってきた。
そのときだ。
進学コースの教室の中から奇声が上がった。
「僕のぅメガネッ！」
感情高ぶるあまり裏返った声だ。その声とともに響を包む波のような違和感が一気に膨れ上がった。
その声は響も聞き覚えのあるものだった。
「やめろ、コマツ！」
別の声が奇声の主の名前を呼ぶと同時に悲鳴が上がった。
——そうだ、コマツジロウだ。
響がその名前を思い出したとき、机と椅子が床を動く音とともに、教室の中から外へと進学コースの生徒たちが飛

び出してきた。そのうちのひとりが廊下にいた響の脇に勢いよく転がってくる。その生徒は上腕を押さえて呻いていた。そしてその体の下から赤黒い液体が広がっていく。

血だ。

ぴちゃりとその血を踏みつけて教室の中から廊下に出てきた人影があった。

銀縁メガネがずれて落ちそうになったその生徒の口は真っ赤に濡れていた。

響がその生徒の名前をつぶやく。

「コマツ……」

血は口だけでなく、メガネのレンズにも飛び散った血しぶきが点となってついていた。そのメガネの下で血走っている目が響を捉えた。

「音無響ぃぃい！」

コマツは裏返った声を上げながら響に突進してくる。

響は咄嗟のことに身体が動かなかった。

なにが起きているのか。

それを判断するゆとりなどない。

目の前にコマツの血に濡れた口が見えた。その奥に白い歯が覗いている。心なしか、犬歯が大きく尖っているようにも感じられた。ゆっくりとそれが迫ってくる。

逃げよう――。

それでも身体は動かなかった。

あの波のようなものが響の身体を重くしているようだ。
全ての時間が緩慢に流れていた。
徐々にコマツの顔が迫る。そしてその口はまっすぐに響の白い喉笛あたりを狙っていた。
そのとき、響の目の前を黒い影が割り込み、血に濡れたコマツの口が消えた。
デヴィッドだ。
その脚がコマツの顎を下からまっすぐに蹴り上げていた。
顎を蹴り上げられたコマツの体が宙を舞ったあと、廊下に叩きつけられて滑り、廊下の端に置かれたロッカーにぶつかって停まった。見るとその体が小刻みに痙攣している。
「大丈夫か」
その声とともにデヴィッドの青い目が響の目を捉えていた。
呆然としている響の周りが騒然となる。倒れて痙攣を続けるコマツを皆が遠巻きに見ていた。誰も近づこうとしなかった。
そんな中、デヴィッドが警戒もすることなく自らが蹴り飛ばし、ノックアウトさせたコマツへと近づき、傍にひざまずいて顔を覗き込み、なにかをつぶやいたように見えた。
「……デルタか」
そんなデヴィッドの声が響の耳に届いた。
――なにかを知っているのだろうか。
それを尋ねようとすると、また悲鳴が上がった。

また別の生徒がコマツと同じように、他の生徒を襲い始めたのだ。赤く血走らせた目で肩に噛みついている。噛みつかれたほうの生徒の声が廊下中に響いた。
「なにをしてる！」
騒ぎを聞いた教師たちが駆けつけ、響のクラスの担任教師のコバヤシが襲っている生徒を力ずくで引き離そうとしていた。しかし今度はコバヤシがこの生徒の餌食となった。
コバヤシの口から悲鳴は出なかった。
出せなかったのだ。
生徒の歯はコバヤシの喉笛へと噛みつき、その首の肉を噛みちぎっていた。
コバヤシの首から勢いよく飛び出したどす黒い血が天井を濡らし、生臭い匂いが響の鼻腔を刺激した。
なにが起きているのか。
周りでこの光景を見ていた生徒や教師たちが一瞬、我が目を疑った。
わずかな静寂のあと、それを打ち破ったのは悲鳴だった。
その悲鳴が校内中に連鎖する。
逃げ惑い、そして激しくぶつかり合い、混乱が校内を駆け巡った。
響は足が動かなかった。
腰が抜けたのかもしれない。
膝から下に力が入らない。
後ろの方で悲鳴がした。

ミノリの声だった。
見ればミノリの上に別の生徒が馬乗りになり、その太ももに歯を立てていた。ミノリの太ももあたりから赤い血が流れ出している。
「ミノリ――」
ミノリの顔が涙に濡れ、そして恐怖に歪んでいた。ミノリと目が合った。響に向けて助けてくれというように唇が動いている気がした。だがそのミノリの視線が別の生徒の背中に遮られる。別の生徒がミノリの上から覆いかぶさり、そしてミノリから大きな悲鳴が――、体の奥底から絞り出されたような悲鳴が響の耳を打った。
ひどいことが起きている。ミノリが血を流している。そのことはわかっている。
けれど身体が動かなかった。
その身体がぐいと持ち上げられる。
デヴィッドが響の身体を引き上げていた。
「動けるか」
「だめ。なにが――」
「質問に答えている余裕はない」
そう言ったデヴィッドの体が動き、響の身体が振り回される。
デヴィッドの背後から襲おうとした生徒を躱し、そしてまたしてもその顎を蹴り上げたからだった。
「逃げるぞ」
その声と同時に響の身体の下にデヴィッドが潜り込むと肩に担がれる格好となった。ファイアーマンズキャリーと

いうものだ。
そのままデヴィッドが悲鳴が起こる廊下を進み始める。響を担いでいるというのにそれをまったく感じさせない速さだった。
校内のいたるところで、進学コースの生徒たちと同じように他の生徒たちを襲うものが現れていた。まるでゾンビ映画のワンシーンだ。
信じられないことが起きている。ついさっきまで普通に授業をしていたはずだ。ミノリだってほんの数分前に体調の悪い響のことを気遣ったり、今、響を担いで歩くデヴィッドのことを話していたばかりなのだ。急にミノリのことが心配になった。
「ミノリは――」
「無駄だ。もう助からない」
デヴィッドの冷たい声が傍で聞こえた。
「助からないってどういうこと？　下ろして！」
「ダメだ。一刻も早くこの場所を離脱する」
「でも」
デヴィッドが響を下ろしてその目を正面から覗き込む。
青い目が響の目を捉えた。
「俺を信じろ。もう歩けるな」
抗いがたい言葉とともに、デヴィッドが響の手を握る。

温かい手だった。
この言葉と手の感触――、昔、遠い昔にどこかで聞いた気もしていた。
カイが言っていたのかもしれない。それともあれは別の誰かだっただろうか。
思い出に浸るような状況ではなかったが、なぜか一瞬、そんなことが頭を過ったのだ。
手を引くデヴィッドの足が停まっていた。
その目が窓の外を見ていた。今、響たちがいるのは二階の廊下だった。その先は校門が見下ろせる形となっていた。
そしてその校門前にトラックのような車が何台も猛スピードで突入し、急停車したトラックからは野戦服を着た人間が一斉に降りてきていた。ちょうど、校舎から逃げ出し始めた生徒たちがその野戦服の人間に校門から外に出ないように押しとどめられているようだった。
まるで、この高校の敷地内に閉じ込めでもするかのように。
「盾の連中、手回しがいいな」
デヴィッドが苦々しい声を吐いた。
「盾?」
「説明はあとでしてやる。今は封鎖される前にここを突破する」
響の手を引いてデヴィッドが近くの教室へと入り、そのまま教室を横切ってベランダへと出ていく。
渡り廊下のようになっていて、隣の教室と繋がったベランダで、そこから見えるのは響が早朝に走っている校庭だ。
「俺の背中に乗れ」
「え?」

「いいから早く」
デヴィッドに急かされ、背負われる形になった。
「しっかり掴まってろ」
響が言われたとおりにデヴィッドの胸の前に回した自分の腕をしっかりと掴む。それを確かめるや、デヴィッドの手がベランダの手すりにかかった。
なにをするのか。
「舌を噛むなよ」
デヴィッドの声がした。その刹那、デヴィッドは響を背負ったままベランダの上へと駆け上り、そしてそのまま宙へと飛び出していた。
ふわりと空中を跳ぶ短い浮遊感の直後に、激しい衝撃が響の身体にやってきた。
跳んだ、といっても自分の意思ではない。背負われたまま二階から一階へと落ちた格好なのだ。けれどその割に衝撃は小さいような気もしていた。
デヴィッドの体が大きく沈み込み、そして響と一緒に転がったのだ。転がった衝撃はあったものの、落下そのものの衝撃はほぼ消えていた。
なにが起きているのか。
響は混乱していた。心臓が早鐘を鳴らすかのように激しく動いていた。
「もう歩けるな」
「え？」

「こっちだ」
響を背中から下ろしたデヴィッドが、響の手を掴むと、強引に早足で歩き始める。
歩きながら自分の足元が上履きであることに気づく。
「あ、上履き」
「気にするな。裸足じゃないだけマシだ」
そう言ってデヴィッドが響を連れて校庭の端まで行き、学校と脇道を隔てている壁の前に立って言った。
「行け」
「行けって、壁があるのに？」
「越えられるだろ」
「なんでそんなことを」
「お前が狙われてるからだ」
「狙われてるって、誰に？」
「盾——、赤い盾の連中にだ」
「そんなの知らない。狙われるとか意味がわからない！　それより警察は？　救急車は？」
デヴィッドが舌打ちする。
「おい、止まれ」
遠くから響たちに向けて声がかかる。見れば校門の方にいた野戦服の人間が二名、響たちの方へとやってくる。そしてその手には細長いものが握られていた。

銃――、しかも戦場で使われるような、ライフル型の突撃銃だ。
響はそれを横田基地の敷地の中で訓練をしている兵士たちが担いで歩いているのを遠目に見たことがあった。
「アメリカの――？」
「違う。赤い盾の連中はどこにも属しちゃいない。それどころか米軍だろうが、自衛隊だろうがやつらの手のひらの上だ。早く行け。捕まりたくはないだろ」
「だからなんで私が捕まるの？」
「お前が特別だからだ。裸にされて血を抜かれ、実験の材料にされたくなかったらその壁を乗り越えろ。今のお前にできるのは俺と逃げることだけだ。家族に、妹にもう一度会いたいのなら今は逃げることだけを考えろ！」
意味がわからない。
だがデヴィッドが言っていること――、妹という言葉に背中を押されたような気がした。
奏に会えなくなるのは嫌だった。
そして、
「俺を信じろ」
その言葉が響を突き動かした。
言葉に押されるかのように響の身体が学校の壁を乗り越える。
デヴィッドの言葉が本当か嘘かなどどうでもよかった。
今は奏に会いたい。ＯＭＯＲＯに戻ってカイに会いたかった。
そこから先のことは、それから考えよう。

壁を乗り越えた響の腕を、デヴィッドの手が掴んだ。
「こっちだ」
その手に引かれるままに、響は走り出した。
走り出すことしかできなかったからだ。

「なんでゴーヤ入れるわけ？」
奏がカイの手元を見て文句を言った。
まな板の上にワタを抜かれて切られたゴーヤが載せられていた。
それをカイがボウルの中に入れて塩でもみ始める。
「チャンプルにゴーヤが入ってなくてどうすんだよ」
「苦くなるじゃん」
「それがいいんだろ。それに響はゴーヤ好きだぞ」
「そんなことないって。私と一緒で苦いの好きじゃないもん。我慢してるだけだよ、お姉ちゃんは」
姉の響がゴーヤが苦手であることを奏は知っている。カイには言ってないだけだ。それは我慢強く、いつも優等生でいようとする響の性格がそうさせていることも。嫌なことがあっても我慢しようとしてしまう。そのために自分がうまく出せないことも。
状況に流されやすいことに本人はまったく気づいていないのだ。
もし昼間のヨコチたちの一件のような状況に響が陥ったら、逃げることなく混乱のままに最後までいってしまうのだろう。もっとも奏自身もあの謎のオカマが乱入してこなかったら危なかったことに変わりはないのだが。
カイが切った野菜を手際よく中華鍋で炒めていく。香ばしい匂いが店の中に広がった。

「この醤油瓶、ゴミ捨て場に置いてきてくれ」
空いた醤油の瓶を指してカイが言った。
「あとでいいじゃん。外寒いし」
「こういうのはこまめに捨ててかないと、溜まって大変なことになるんだぞ。夏休みの宿題の理論って知ってるか？」
「なにそれ。理論とかカイっぽくないって」
変に楯突いても仕方がない。
そう思った奏は、空になった醤油瓶を片手に店の出入口から外に出る。
冷たい空気が奏の頬を撫でていく。
「さむ！」
身体を縮ませて店の前のロータリーの向こう側にある共同のゴミ置き場に設置されたプラスティック・ケースの中に醤油瓶を寝かせて入れる。ケースには「おもろ」とひらがなで書かれていた。このあたりの小さな飲食店が共同でゴミをここに置いているのだ。その中にビールや泡盛の瓶も寝かせて置かれていた。
冷たい空気が徐々に体温を奪っていく。短い時間、二〇メートルもない場所だからといって横着して上着を着てこなかったことが悔やまれる。厚手のタイツは穿いているものの、下はショートパンツ、上はカットソー一枚きりだ。中に保温用の下着は着ていてもそれが追いつかず体温は逃げていく。
「凍え死んじゃう〜」
そんな愚痴をこぼしながら急いで店に戻ろうと振り返ったときだった。
次の瞬間、まばゆいオレンジ色の光が周囲を照らした。

その光はＯＭＯＲＯの方から発せられたものだった。そして同時に起きた大きな爆発音とともに、身体を震わせるほどの衝撃が奏を襲ってきた。その衝撃に思わず奏がよろめいて尻もちをついてしまう。タイツ越しに冷たいアスファルトの上に座っているはずなのになにも感じない。それ以上に目の前で起きている状況に頭がついてきていないからだ。

ＯＭＯＲＯが爆発した。

奏の目の前で。

カイはどうなったのだろう。

順を追って頭の中で、目の前の状況を理解しようと努める。それでも信じられないという感情がそのロジックを破壊する。

パラパラと奏の周囲にＯＭＯＲＯだった場所から飛び散った柱や窓ガラスといった破片がアスファルトで跳ねる音が聞こえる。

そして空気に少しだけガスの匂いが混じっている。

この爆発を聞きつけた付近の住民たちと、火災報知器の鳴り響く音があたりに響いた。

奏が呆然と立ち上がる。

「カイ」

そうだ。カイはどうなっただろう。

あの中にいたはずだった。さっきまでゴーヤを切って、ゆで卵のチャンプルーを作ろうとしていたのだ。

「カイ！」

黒煙を上げ炎が上がり始めたOMOROに向かって進み始めた奏の腕を誰かが掴んだ。
「危ないよ」
場に似合わない落ち着いた声だった。見覚えのない少年——、奏と同い年くらいの少年が奏の腕を掴んでいたのだ。
くるっと癖のある金髪に青い目をした彼は優しく微笑んでいた。そしてこの場に不似合いな上質なスーツの上下を身にまとっていた。首にはきっちりとネクタイまで締めている。それが年齢の割にしっくりと感じられる雰囲気をまとっていた。
不思議な少年だった。
パトカーのサイレンと消防車のサイレンがけたたましい音を立てて近づいてくる。
なにが起きたのかと遠巻きに集まる野次馬も増えていた。
けれどその中の誰もがまだ燃え盛る炎を見つめていて、ここに店の娘である奏がいることに気づいていない。
薄暗くなった空の下で、オレンジ色の炎が高く高く空を照らしていた。その先は黒い煙となって周囲に焦げ臭い匂いを撒き散らしている。
「死にたくなかったら、今はここから逃げるんだ」
「逃げるって、カイはどうなるの!?」
「詳しくはあとで話してあげるから、今は君自身の安全を考えたほうがいい」
「響は!? 響の晩御飯作ってたのに!?」
「彼女はもうレジスタンスの手に落ちた」
「……レジスタンス？」

「そう。僕たち、赤い盾の敵の手に落ちたんだ」
そのとき、大きな爆発がまた起きた。野次馬たちが慌てて逃げ始める。
「さあ、僕たちも行こう」
「行こうって――、あんた、誰?」
「覚えてないかな?」
癖のある金髪の下の青い目が悲しそうな光を覗かせた。
「アダム。君を助けに来たんだ」
その名前を聞いて奏は記憶の糸をたぐり寄せる。
もう何年もその名前を聞いていなかった。
沖縄で一緒に遊んでいたはずの幼馴染の、ひとつ下の男の子の名前のはずだ。
「……アダム、なの?」
「さあ、早く安全な場所まで一緒に行こう」
「でも」
「響のことは赤い盾が必ず救い出す。だから君は僕についてくるだけでいい」
アダムが改めて奏に手を差し伸べる。
「僕を信じて」
奏に選択の余地はなかった。
燃え盛るOMOROを背に奏はアダムに手を引かれて少し歩くと、そこに黒塗りの高級そうなセダンが待っていた。

奏を後部座席の奥へと乗せて、あとからアダムが乗り込む。程よいやわらかさのシートが奏の尻を包む。車内は暖かかった。

「戻ろう。僕たちの——、君が本当にいるべき場所に」

アダムのその声とともに車が静かに動き出す。

国道一六号の景色が流れ始めた。

奏の頭の中はまだ整理がついていない状態だった。目の前の現実の変化に頭が追いついていない。

「……今日は、ツイてない」

ぽつりと奏がつぶやいた。

そのつぶやきにアダムはなにも返さなかった。

ただ静けさと、程よい暖かさが奏を眠りの中へと導いていくのだった。

「それに着替えるといい」

そう言って革のジャケットに革のパンツを身に着けたデヴィッドが、どこからか調達してきたダウンジャケットなどの冬服を響に向かって放り投げた。丁寧に替えの下着まであった。そして靴もだ。上履きでここまで来たことを響が気にしていたからだろう。

午後五時。既に日は落ち、外は暗い冬の帳(とばり)に包まれている頃合いだ。冷え込みもきつくなり始める時間だろう。けれど響のいるこの場所は暑すぎるくらいに暖房が効いていた。

学校から五分ほどのところにあるマンションの一室だった。

しかし部屋にはなにもなかった。

ベッドすらもだ。

置いてあるのは部屋の片隅に丸められたシェラフとロールマット、大型のスーツケースがふたつだけ。

「ここは……」

「俺のねぐらだ。まだここは安全だ」

学校から抜け出し、デヴィッドに手を引かれたまま、どこをどうやって走ってきたのかはわからない。ただその手を信じて、ここまで来てしまったのだ。普通なら来るようなことはないだろう。ただ、それ以上に学校で起きたことのほうが常識の範疇を超えてしまっていたからだ。

「なにが起きたの？　あれはなんだったの？」
「デルタ〇六。人を化け物に――、ヨクシュに変えてしまう薬の新型だ。シャープという名前で流通してる」
薬と聞いて、ミノリが話していた頭のよくなるサプリメントのことが思い浮かんだ。そのミノリはもういない。そうデヴィッドから告げられていた。目の前でコマツが人を襲うのを見ていた。他の生徒もそうだった。響も襲われそうになったのだ。
あの目。あの歯。そしてなんともいえないあの波のようなもの。
あれは人間ではない、別のなにかだ。
それだけは混乱する状況の中でも理解できた。例えるなら陳腐な表現となるが、ゾンビ映画などでよく見ているアレと同じだと思うことで、なんとか整理できている状況でしかない。
だがあれはゾンビではないという。
ヨクシュ。そうデヴィッドは言った。
「漢字で書くなら、『翼に手』と書くらしい」
デヴィッドが懐から取り出したスマホに文字を映してみせた。
翼手。
聞きたいことはたくさんある。
だが今気がかりなのは、ＯＭＯＲＯのことだった。
学校でアレだけの騒ぎが起きたら、間違いなく自宅にも連絡が行くはずだ。きっとカイも奏も心配しているだろう。
響が制服のポケットを探る。携帯電話の固い感触が手に触れた。

なくしてなかった。
その携帯電話をかけようと取り出した瞬間、それをデヴィッドが取り上げる。
「やめておけ。すぐにやつらにバレる」
そう言って響の携帯電話の画面を見つめる。
「GPS付きか……。この場所もすぐに割れそうだな」
「でもお養父さんに連絡しないと」
「それなら見に行ったほうがマシだ。なにかあってもすぐ逃げられる。着替えろ。行くぞ」
「え……？」
「お前の心配事をひとつずつ潰していったほうが、説得するより話が早い。お前はそういうやつだからな」
——デヴィッドは私のことをどこまで知っているのだろう。まるで心の奥底まで見透かされているかのようだ。
そんなことを響は思いながら、服を着替える。
サイズは既製品ではあったが概ねピッタリ合っていた。防寒の上着は登山などで身に着けるようなしっかりとしたものだった。本当に響の全てを、あの観察するような青い目に見透かされているかのようだった。
着替えた響に向けてデヴィッドがなにかを放り投げてくる。
バイク用のフルフェイスのヘルメットだ。
その中に手袋も入れてある。
「着けろ。OMOROに行くぞ」
そう言われて断る理由はなかった。

ヘルメットを着けるのは初めてだった。思った以上に締めつけられる感じだった。上着のジッパーを首元まで上げて、デヴィッドのあとをついていく。
マンションの駐車場に向かうと大型のスクーターが置いてあった。まだ新車らしくピカピカだ。
デヴィッドがそれにまたがりエンジンをかける。
重いエンジン音が駐車場に轟いた。
「乗れ」
「乗ったことないけど……」
「そこに座ればいい」
デヴィッドの後ろと、荷物を入れるキャリアーとの間に人ひとりがまたがれるだけのスペースがあった。背もたれのようなものも付いていた。スクーターを両足で支えるデヴィッドの肩を借りてなんとかその場所に響が身体を収める。目の前にデヴィッドの背中があった。
「しっかり掴まってろ」
そう言われて響がデヴィッドの腰に手を回す。
グンという加速感が加わりスクーターが動き出す。
マンション前の市道から新青梅街道へと乗り入れ、そして横田基地の傍の国道一六号へとスクーターは走った。
響がいつも自転車で通っている通学路の逆側の車道だ。
時間帯のせいなのか道は渋滞していた。スクーターの強みを活かして、デヴィッドは車の間を前へと抜けていく。
道路上の電光掲示板を見ると、近隣で火事発生のため渋滞と出ていた。

一刻も早く行きたいときにこうしたことが起きてしまう。
響は気ばかりが焦っていた。
けれど今はデヴィッドに全てを任せるしかない。
なにが起きているのかを知っているのはこの目の前の背中だけなのだ。それに離されまいと、しっかりとデヴィッドの腰に回した自身の手を握り直す。
基地のフェンスを通り過ぎ、二番ゲートから五番ゲートへと至るアメリカ風の店が並ぶ通りに差し掛かると、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。
消防車が国道一六号と並走する駅側の裏道を走っていくのが見えた。
デヴィッドが交差点で右折し、消防車が通り過ぎた道へと進路を変更する。道一本外れると普通の東京西部の街並みとなり、道幅も普通の二車線となる。
消防車が露払いしたあとをデヴィッドはそれを追いかけるように走った。
だがその消防車が道を逸れていくことなくひたすら響たちの乗ったスクーターの前を走っている。進行方向が同じなのだろうか。
消防車は牛浜の駅を過ぎたあたりで右折をし、五日市線の線路沿いの道を拝島の方へと進んでいく。
嫌な予感が響を包み込む。
「ねえ」
不安になりデヴィッドに声をかけても、ヘルメットと走る音に邪魔され、その声は届いていないかのように、デヴィッドは前を見て走り続けるだけだ。

やがて前を行く消防車は拝島駅傍の国道一六号が上を通る陸橋をくぐり抜けて拝島駅前のほうへと進んでいった。
そのあとをついていくと、拝島駅前近くでパトライトの赤い光が明滅しているのが見て取れた。
コインパーキング傍の、ロータリーの近く――。
消防車が三台ほど停まり、救急車の姿もあった。そしてパトカーを停めて警察があたりの交通整理をしていた。
それを避けてデヴィッドが少し離れた通り沿いにスクーターを停める。
それにも気づかず響は言葉もなく呆然と目の前の現実を見つめていた。
OMOROがない。
いや、OMOROのあった場所が黒く焦げた瓦礫の山となっていた。そして周囲にはなにかが燃えたような匂いが広がっている。
「やられたな」
「どういうこと?」
「敵に先回りされたってことさ」
響がバイクを降りようとするのをデヴィッドが止めた。
「やめておけ。行ったところで誰もいない」
「でもカイや奏がどうなったか知りたいもの!」
「もういない。生きていればとっくに逃げ出してるはずだ。見ろ。救急車が来てるのに動こうとしないだろ。怪我人も死人も出ていないから動かないんだ」
デヴィッドの言うとおりかもしれない。

救急隊員たちは外に出していた空のストレッチャーを救急車の中へとしまっていた。
消防隊員たちは消火活動を終えているらしくホースを巻き取り始めている。デヴィッドたちが追ってきた消防車も万が一のために出動した遠方の応援なのかもしれない。
「だったらどこへ――」
「さあな。……期待させといて水を差すようで悪いが、あくまでも可能性の問題でしかない。それに俺が知らされているのは、お前のことだけだからな」
ふとデヴィッドがヘルメットのバイザーを下ろして緊迫した声で囁く。
「掴まれ。出すぞ」
「でも、ちゃんと店の様子を――」
「無駄だ。それに今は敵を振り切るのが先だ」
敵と言われて響があたりを見渡す。怪しそうな人影はない。いるのは野次馬や消防署、そして警察の人間だけだった。
「視線だけ向けろ。二台先のパトカー。こっちを見て無線で話してる警官。あいつだ」
それだけ言うとデヴィッドがスクーターをスタートさせた。
そのパトカーが追ってくる様子はない。
思い過ごしではないのか。
あのマンションに戻るのかと思われたが、デヴィッドは国道一六号を北上せずにスクーターをそのまま南のほうへと走らせる。
見上げると道路の案内標識に相模原と二〇キロと書かれた案内が出ていた。

信号待ちの交差点になって、響がデヴィッドに尋ねた。
「どこに行くの？」
「沖縄だ」
響の聞き間違えだろうか。
だが確かにデヴィッドは沖縄と言った。
——どうやって。
普通に考えれば飛行機に乗るのだろう。そうなれば羽田に向かうはずだ。
その考えをまたも見透かしたかのように、デヴィッドが言った。
「羽田には向かわない。空港なんて敵の網にかかりにいくようなものだ」
「なんで沖縄なの？」
「わからない。ただなにかあったら沖縄に来いとだけ言われてる。手段は問わないとも」
信号が青となりデヴィッドがスクーターを走らせる。国道一六号は昭島に入って大きく右へと曲がり、多摩川を渡る橋へと差し掛かる。
この先は八王子だ。
しばらく行くと大きな町が見えてくるはずだ。
こうして走っていると町はいつもと変わりない時間で動いているようだった。
あのスーパーから出てきた自転車には子供を後ろに乗せた母親が乗っていた。夕飯の買い出しに来たのだろうか。
あの車にはサラリーマンらしい男が肩をほぐしながら運転を続けている。仕事帰りなのだろう。

そしてあの交差点で信号を待つ制服姿の女の子たちは高校生だろう。スマホを覗き込んで笑い合っている。
そういえば学校はどうなっただろう。
ほんの数時間前にあれだけの騒ぎとなったのだ。
「学校、どうなったのかな」
「大騒ぎになってる」
「……やっぱり。あの、翼手が暴れたとかって――」
「テロだ。基地反対を叫ぶ過激派の武装行動。警察が介入して事態は鎮圧。死傷者の数はまだ公表されていない――、だそうだ。ネットじゃそういうニュースになってる」
「そんな――」
暴れたのは進学コースのコマツをはじめとした、あのシャープというサプリメント――、デルタ〇六を使っていた生徒たちだ。
それが凶暴化して暴れて、ミノリたちを獣のように噛み殺したのだ。
そんな事件がただのテロのわけがない。
あの学校にトラックで乗りつけた野戦服の男たちのことを「赤い盾」とデヴィッドは呼んでいた。
彼らは何者なのか。そしてなぜ響自身が狙われているのか、まったく思い当たることがない。それにOMOROもそうだ。もし響だけが狙われているのならば、カイや奏はどうなるというのだろう。
不安が身体の奥底からこみ上げ、震えとなって身体を襲った。
その振動が腰に回された響の手から伝わったのかデヴィッドが声をかけてくる。

「寒いのか」
「……ううん。違う」
怖いのだ。
ここまでに起きたことが事実と異なることにされてしまうという現実。そしてこれからなにが起こるのかわからないという不安。更には自分に思い当たることがなにもないこと含めて、全てが怖かったのだ。
その恐怖を加速するかのように、スクーターの背後からヘッドライトの灯りが迫っていた。
デヴィッドがそれに気づいて急に車線を変更する。
予告なしの車線変更に響が振り落とされそうになり、デヴィッドの背中に張りつくように身体を寄せる。
「なに？」
「追手だ。スクーター、二人乗り、ナンバー、ヘルメットの色、服装、いろいろと情報が行き渡ってる」
「そんなこと——」
「できるんだ。それだけの組織力がある」
脇を通り過ぎたのはＳＵＶだった。中には二人組の男が乗っていた。
確かデヴィッドがＯＭＯＲＯの近くで敵だと言っていたのは警察のはずだった。ならば中のふたりは警察関係者なのだろうか。
それならば警察、つまりは犯罪を取り締まる側が敵にあたる。そうなるとデヴィッドは犯罪者側だ。
「あなたは本当はなんなの？」
「警察が敵に回るってのは予測していた。ただこっちの予測した以上に早かっただけだ。やはりＯＭＯＲＯに顔を出

したのはまずかったか」
「あなたは犯罪者じゃないの？」
「法律に背くのが犯罪というなら、そうなるな。免許証だって持ってないしな」
無免許なのにこれだけ堂々と大きなスクーターを、しかも後ろに響を乗せているというのに手足のように操るというのはどこかで経験がないとできないことだろう。
デヴィッドこそ何者なのだろうか。
「俺が犯罪者だろうが、テロリストだろうがどっちだっていい。ただ俺はお前を守る。この生命に代えても。それだけは約束する。だから――」
そしてデヴィッドが静かに、けれど強い口調で言った。
「俺を信じろ」
頷くしか選択の余地はない。
理屈ではないなにかが響の首を縦に振らせていた。
スクーターの前で進路をブロックするように蛇行をするＳＵＶをデヴィッドは抜こうと巧みに体重移動を繰り返す。
そのうちバックミラーに白い光が当たるのを響は感じていた。
後ろを見ると、またヘッドライトの灯りが迫っている。
そのヘッドライトが迫ろうかとする寸前だった。
交差点が見えた。
「掴まれ！」

その声に響がデヴィッドに密着する。
対向車線からヘッドライトが迫っているというのに、スクーターはグンと右へと曲がり、迫る対向車のヘッドライトの前をかすめるようにして右折していく。
一瞬の出来事だった。
背後から急ブレーキの音が聞こえてくる。
だが数秒後にはそれもはるか遠くへと消えてしまう。
スクーターを挟み込もうとしていた二台のＳＵＶの前から突然、追っていたスクーターが消えたようにも見えただろう。
スクーターの速度を落とすことなくデヴィッドが言った。
「もうバイクはダメだ。手段を変える」
「手段って――」
「この国の交通網を最大限に使わせてもらう」
そう言ってデヴィッドがスクーターの進路を変えた。

それはやわらかい感触のソファだった。
肌ざわりのいいカバーが掛けられている。
部屋の暖房も十分に効いており、適度な湿度も保たれている。
つまりこの部屋の中は快適だということだ。
窓からは横浜港の夜景が一望できる、そんな場所にあるホテルのスイートルームの一室に奏はいた。
ＯＭＯＲＯが焼け、現れたアダムに連れられてやってきたのがこの場所だった。
時間にして二時間もかかっていないだろう。
部屋がノックされ、アダムが顔を覗かせた。
「気分はどう？」
「なんだかわけわかんない」
奏は正直な感想を言うしかなかった。
事実そうなのだ。
「カイは——、お姉ちゃんはどうなったの？」
「宮城カイは消息不明。病院に搬送されてるかもしれないから、全力で行方を追ってるよ。……敵に確保されてなければの話だけれどね。そして響は今、敵と一緒に行動してる。八王子の近辺までは行方を確認できたけど、またどこ

かに消えたみたいだ」
「大丈夫なの？」
「全力で取り戻す努力はするよ。ただ向こうも彼女に害を加えるようなことはしないと思う。レジスタンスにとっても大切な人のはずだから」
「そのレジスタンスってなんなの？」
「レジスタンスは面倒な連中だよ。僕たち、ディーヴァの血を守る赤い盾も苦労してる」
「……ディーヴァ？」
「覚えてないんだ」
「初めて聞いた」
「そうか」
アダムが寂しそうな顔を見せる。
「じゃあ、僕とのことも、なにも覚えていないんだね」
「少しだけなら。沖縄にいたときに、一緒に遊んだことぐらいしか覚えてない。なにして遊んだとか、全然」
「僕は全部覚えてるのに。君と、響のことなら、全部」
「ごめん」
「いいよ。思い出は過去の記録でしかない。未来はこれから築いていけばいい」
「それじゃその未来について聞きたいことあるんだ。私はこれからどうなるの？」
「まずは明日朝にこのホテルをチェックアウトする。そのあと、僕たちの船で身体検査を受けてもらう。これから向

かう僕たちの本部はそうしたことに厳しいから」
「本部とかあるんだ。まるで正義のヒーローみたい」
「うん。それはあながち間違ってはいない表現かもしれない」
「自分でそれ言う？」
「歴史の表舞台に出ることなく、この世界の秩序を守ろうとしているんだからそうだろう？　特にディーヴァの——、女王の血統を守る盾となるのが我々の役目だ。納得ができたかな」
「たぶん。今の私にできるのは待つことだけだってことがわかったくらい。遊びに行っちゃ駄目なんでしょう？」
アダムが肩をすくめる。
「せっかく窓から遊園地が見えるのに」
横浜のコスモワールドの夜景だった。イルミネーションの鮮やかな大観覧車コスモクロック21と、ダイビングコースターなど、休日であれば午後一〇時頃まで営業しており、すっかりデートスポットとして定着している。
「ルームサービスでもなんでも呼んでくれればいい。映画が見たければオンデマンドのテレビがある」
「私のスマホは？」
「残念だけど、預からせてもらったよ」
そう言ってアダムは部屋から出ていった。
肌身離さず持っていたスマホだった。OMOROから醤油の瓶を捨てに行ったときもそれだけはポケットの中に入っていたのだ。けれどこの場所に着いたとき、それを回収されてしまった。
そういう意味では奏は軟禁されている状態だと言えよう。

高級ホテルのスイートルーム。贅沢な牢獄だ。
こんなこと、ヨコチにLINEしたらどう思うだろう。
家が突然爆発して、お金持ちになった幼馴染が迎えにきて、私は正義のヒーローの仲間入りを果たす。
——あんたバカ？
そんな回答が返ってくるのだろう。おかしな話だがここに来て思うのは、自分にひどいことをしようとした元・友達のことだった。行方不明のカイのことや、悪者に連れ回されている響のことを考えても奏の想像の範囲を超えてしまってるからなにも思い浮かばないのだ。
「あ、でもスマホないじゃん！」
手持ち無沙汰の奏はとりあえずテレビのスイッチを入れることしかやることがなさそうだった。備え付けのデスクの中に入っている聖書を見るような性格でもないし、カタログなど見ても気が紛れるわけでもない。
テレビをつけると、ちょうどニュースがやっている時間だった。見ると、響の行っていた都立高校でテロ事件が起きたとニュースキャスターが深刻そうに話し、作家という肩書のオジサンが更に深刻そうに専門用語を使って米軍の悪口を並べていく。
「だと思います」「じゃないんでしょうか」「かもしれませんね」
推測と憶測のオンパレードだ。
「嘘っぽい」
響の学校で起きたことは、アダムからここに来るまでの間に車の中で聞かされていた。
敵がデルタ〇六という薬物を使って高校生を凶暴にして暴徒に仕立て上げ、事件を引き起こしたというのが真相

だった。ヨコチたちが言っていたあのシャープと呼ばれていた頭のよくなるサプリメントというのがそうなのだろう。響を都合よく連れ出すための敵の自作自演だとアダムは説明してくれた。そしてデルタ〇六はまだこの都内に潜在的に広められていることも。

赤い盾はそうした騒動が起こる前に敵を潰しておきたいそうなのだ。

どうするのかは知らない。

そしてよくわからないが、その渦中に奏と響、そしてカイも巻き込まれていることは紛れもない事実だった。報道がニセモノである実感はまだないが、小さな頃から、沖縄にいた頃から聞かされていた言葉だけは本物だろう。

「ナンクルナイサ」

カイの口癖だった言葉だ。なんとかなるさ。そんな意味が込められた沖縄の方言だ。

明日のために今日を生きろ。

そんな言葉が必ずセットになって聞かされたものだ。

カイもこの言葉はカイの養父から教わったのものだという。血の繋がらない家族が、言葉だけを語り継いでいく。

そんな家族なのだ。

今、この思いを歌にしたい。

自然と歌声が、奏の口から流れ出ていた。

——みんなが無事なら、きっとこの歌は届くと思う。

ちょうどその頃。

静かなホテルの廊下で、アダムがふと足を止めた。

そして静かに天井を見上げ、つぶやいた。

「歌声も似ている」

そして静かに微笑み、再び歩き始めた。

中央線

帰宅ラッシュの時間だというのに、八王子の駅から先の中央線大月行きの車両には座席に空きが覗くようになっている。

その長椅子のひとつに登山に行くような格好のカップルがいた。ニット帽を被り、男の前には大きなザックが置かれ、ストックも差し込まれていた。女のほうも男よりは小ぶりだがザックとストックを手にしている。

傍から見れば、明日の早朝からどこかを登る登山客にしか見えないだろう。早朝から登山を開始するのであれば夜間に移動することも特に不思議なことでもなく、周りの乗客たちもこのふたりに特別に気を配るようなことはなかった。

だがふたりの事情は違っていた。

「うまくいってる?」

女のほうが男に声をかける。響だった。

「今のところはな」

男が答える。デヴィッドだった。

ふたりは八王子近辺で赤い盾のSUVを撒くと、そのままスクーターをホームセンターの駐車場に乗り捨てて、八王子駅で食事を取り、今手にしている装備一式を買い込むと、中央線へと乗り込んだのだ。

都内潜伏は危険だというデヴィッドの判断だった。

ひとまず中央線で行けるところまで行くのだという。
時刻はもう午後八時を回っていた。
車内のドアの上に設置された液晶モニターにニュースが流れていた。音声のない文字放送だ。
横田基地周辺の高校でテロ事件発生。
そんな見出しの記事が流れていた。
響がじっとそれを見つめる。
「見ても仕方がないだろ」
デヴィッドがぼそりとつぶやく。
「うん。でも——」
事件の当事者だからこそ、あれが嘘の報道だということは知っていた。ただ報道されていない死傷者のことを思うと、ミノリが助かった可能性もあると思いたかった。デヴィッドはあの場でミノリは死んだと冷たく言っていた。そうでもしないと響がその場を動かなかったからかもしれない。
「あれ、なんだったの。デルタって——」
「その説明はあとでしてやる。今は、休めるうちに休んでおくんだ」
「……うん」
そう言われて背中を座席に預ける。
けれど休むことなどできなかった。
これからも休まることなどあるのだろうか——。

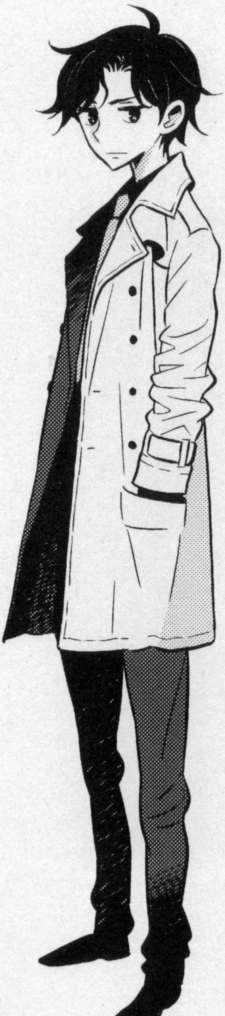
言いようのない不安が響を包んでいた。
ただ昼間感じていた、あの波のように身体を包んでいた違和感はもうない。
ふたりは高尾駅を過ぎても中央線を降りることはなかった。
そのまま大月まで向かい、そこでデヴィッドが電車の乗り換えを誘導するように響の手を掴んで引いた。
ずっとこうだった。
今日の昼間の学校からも、ＯＭＯＲＯの前から逃げるときも、八王子で乗り換えるときも、そして今も。
この手に響は導かれている。
俺を信じろ。
目の前の手がそう語りかけていた。
ここからの乗り継ぎは細かくなった。新宿からやってきたスーパーあずさに乗り換え甲府へと向かい、中央本線に乗り換えて小淵沢で始発電車に飛び込み、篠ノ井線で松本駅へとやってきていた。
松本駅に着いた頃にはもうすぐ日付が変わりそうな時間帯だった。人通りも少ない。しかしデヴィッドは周囲に鋭い視線を投げて追っ手がいないかを警戒していた。
「大丈夫みたいだな」
「ほんとに？」
「今のところはだ。今日はもうホテルを押さえてある。明日の朝、日が昇る前に出るぞ」
「……うん」
いつの間にそんな準備をしたのかわからないが、デヴィッドは常に響の先へ先へと回って動いているようだった。

そうでなければ謎の組織から逃げることなどできないのだろう。
ホテルはどこにでもあるようなビジネスホテルで、充てがわれた部屋へと入ると、大きなダブルベッドひとつが部屋のほとんどを占領するかのような状態で置かれており、窓際のカウンター状のテーブルにテレビなどが申し訳なさそうに置かれてあった。
「ここが私の部屋？」
「俺とお前の部屋だ」
「でも――」
ベッドがひとつしかないことに響は戸惑いを隠せなかった。
逃げ惑う一日の中で、ふと落ち着いた時間が生まれたせいなのかもしれない。
急にデヴィッドとひとつの部屋にいることが気恥ずかしくなってしまったのだ。
「俺は床で寝る。お前がベッドを使えばいい」
「そういうことじゃなくて」
「お前を目の届くところにおいておきたい。だからひとつの部屋にした。着替えなら後ろを向いてるから気を遣わなくていい。ただこの部屋からは出るな。それとシャワーを浴びるのは構わない。ただし出たら今の格好で寝るんだ。すぐに逃げられるようにな」
「う……うん」
言われたとおりにするしかなかった。
間接照明の部屋の中でじっと座っているのも間が持たない。

「じゃあ、シャワー、使うね」
響はそう言ってユニットバスの中へと入っていく。
ついでにトイレを使おうとしたが音は外まで聞こえてしまうのだろうか——。こんな状況でそんなどうでもいいことがつい頭に浮かんでしまった。そのとき、部屋の中からテレビの音が聞こえてくる。それなりの音量で。
デヴィッドなりの気遣いなのかもしれない。
本当になんでも見透かされている気がした。
全ての服を脱ぎ、熱いシャワーを浴びていく。お湯が響の白い裸身の上を流れていく。一六歳になって数カ月。まだ成熟してはいない、少女の面影の残る身体だ。ただ腹部には奏のような傷痕はない。鍛えられてよく締まった筋肉の段差がうっすらと見えていた。
全てが流れて消えてしまえばいい。
今自分が置かれている現実が、夢であればいいのに。
そう思うが、目の前にあるユニットバスの壁も、お湯を流すシャワーヘッドも、そして設置されているボディソープやシャンプー、リンスといったものも、全て慣れ親しんだＯＭＯＲＯのものとは別のものだった。
もうあそこはないのだ。
燃えてなくなってしまった。
ふと涙が溢れ出してくる。
とめどなく、どうしようもなく。
私はなにをしているのだろうと——。

声を上げて泣き出したかった。でも、それをデヴィッドに聞かれたくはなかった。
それでも、涙は止まらない。咽び出る声も、止めることができなかった。
流れ出るシャワーの音は三〇分ほど続いて、ようやく止まった。

第二章『シュヴァリエ』



DAVID

陰謀

白衣に身を包んだ男はデスクの上に置かれたグラスを手にすると、その中の琥珀色の液体を乱暴に喉へと流し込む。
焼けるような刺激と、どことなく甘みを含んだ香りが鼻腔へと抜けていくと、少しは気分が和らいでいく。
アラン島で蒸溜されているスリーピングウォーリアーがこの男の鎮静剤だった。
「リコリスの香りで癒やされますか？」
男が振り返ると、彼はそこにいた。
いつも彼は微笑んでいる。その微笑みの下に冷たい悪魔が潜んでいることも、男は知っていた。
だがこの悪魔と契約しなければ、男の望みは叶えられない。
それを知っていたからこそ、彼はこの悪魔の手足となってともに地獄を進むことにしたのだ。
「もう残り少ない」
瓶の中の液体はもう指三本分ほどとなっていた。
「やるかね？」
「僕はモルトは好きではありません。以前ならワインを――と思ったでしょうが、それに今は無理でしょう」
「ふむ、確かに。その体ではな。だが記憶は再構築できているということか」
「ある程度は。ただぽっかりと大きな穴が空いている、そんな実感が常にあります」
「母親を亡くしたからかね？」

「もう一五年ほどになりますね」
「君たちの生きてきた尺度からすれば、瞬きほどの時間ではないのかね？」
「さすがにそこまでは」
そう言って彼の目が細くなる。
そしてその笑みを湛えたまま、彼は言った。その声は冷たかった。
「ですが、僕にはもう時間がありません」
「サンプルが足りんのだ。確かに〇六は六七よりは進化している。しかしまだオリジナルに届くほどの完成度とは言えないだろう――」
男が壁の陳列棚に並ぶ試験管に収められた赤黒い液体を見つめた。
「――そう。『D』型のプラス因子ではなく、そのマイナス因子。それが欠けたピースのはずなのだ」
「マイナス因子……。『S』型ですね。それがあればD塩基のパズルが完成するというのであれば、ジュリア・シルヴァスタインが既に実験に成功してなくてはなりません。まだその報告は僕の耳にも届いていない」
「あの女は人類の叡智への探求を放棄しているのだ！　人道的見地だと？　それは科学への冒涜だ！」
「世に出ていれば人類史が変わるほどの発見を放棄してまで、彼女は隠遁の道を選んだのでしょう」
「だが『S』型はある。やつらがどこかに隠してはいるはずだ。手に入らんのかね？」
「努力してみます。マルティンの遺した『ボルマン文書』の証明こそが、僕の未来に繋がるものなのですから」
「わかっておる。理論はもうわかっている。あとは実証だけなのだ。少しでいい。『S』の構造のわかるサンプルさえあれば、全てを超えたデルタが完成する。そうすればお前の体も元通り――、いや、元を超えるだろう」

「期待してますよ、コリンズ博士」
「ふん。私はお前が嫌いだ。死の淵から蘇ったというのに笑っていられるお前の顔がな」
「全ての憎しみを受け入れる覚悟はありますよ。女王の歌声と青い薔薇で世界を満たすためなら、僕は悪魔にだってなってみせる」
そう言って、彼は微笑んだ。
その笑顔には、コリンズ・アイストンが飲み干したスリーピングウォーリアーの酔いなど一気に覚ますかのような冷たさが含まれていた。

海の上だというのに、それほどの揺れは感じられなかった。
横浜港を出て、三浦半島と房総半島の間を抜けて東京湾から太平洋に出たはずなのだが、今日の海況は悪くないらしい。

亡霊

いい船出だった。
今朝、奏はアダムのノックで目覚め、その一時間後には横浜港に停泊していたチャーター船に乗っていた。ちょっとした大きさの客船だ。結婚式などの洋上パーティができるレストランのホールなどもあった。けれどこの船に乗っているのは、奏とアダムと、アダムの指示で動く黒服の男たちだった。皆、口数少なくアダムの言葉を最短で行動に移す。奏から見ても無駄がない。
誰もいないレストランのテーブルに座り、天井を見上げると小ぶりなシャンデリアが揺れることなく光を灯していた。
普通に乗ってもそれなりの値段はするだろう。そんな船を自分とアダムと、その周りにいる人間合わせても一〇名はいないはずだ。それをどこかに連れていくためだけにこれだけの船をチャーターしているという。
昨晩泊まったホテルのスイートルームといい、この船といい、赤い盾という組織はかなりの財力を持った組織であることが窺えた。
なにが起きているのか。

ぼんやりと時を過ごせる今になってようやく頭の中で思い返す余裕が生まれていた。
「私は陰謀に巻き込まれているに違いない」
奏の頭の中では、昨日までの出来事はそんな空想めいた結論に達しているようだった。
その言葉に静かに答える声があった。
「それも世界中を巻き込むほどの大きな陰謀だ」
アダムだった。昨日と同じように、上下のスーツに身を固めている。
自分よりもひとつ年下で、背丈も低いはずなのに、なぜか大きく見えてしまう。
人間としての器のせいなのか、年齢に似合わないなにかが彼の中にあるのだろう。
「まだ痛む？」
「別に。でもさっきいっぱい血、抜かれたから少しくらくらする」
「全ては君の身体のことを知るためだ」
「どこも悪くないと思うけど」
「そうだといいね。お腹すいてない？　誰もいないとはいえ、僕たちが食べる分くらいの食料は積んであるよ。それにワインもある」
「いらない。それに私、未成年」
「そうだったね」
「そんなことより私、どうなるの？」
「僕の言うことさえ聞いていれば、どうにもならない」

「カイとお姉ちゃんは？」
「鋭意捜索中。ただ音無響が都内にいないことはわかったよ」
「どこに行ったの？」
「羽田空港、東京駅、新宿駅で姿が確認されてない。めぼしいバスターミナルやサービスエリアも見たけれどそれも空振りだった。可能性があるとするなら、ごく普通の電車を使って都内から出たのかもしれない。ただ、最終的な目的地ならなんとなくだけどわかる」
「どこに行くの？」
「沖縄だ」
奏と響が幼い頃を過ごした場所だった。
「どうしてそんなところに？」
「その理由を話せば長くなるけど――」
「聞かせて。どうせやることないし、沖縄まで船で行くつもりなんでしょう。だったら時間はたっぷりあるわ」
「よく知ってるね」
「前に沖縄から横須賀に引っ越すのに船で引っ越ししたんだもの。あれ二日くらいかかったんじゃない？」
幼い日のことはあまり覚えていなかった。けれど初めての船、そして引っ越しというイベントのことだけはよく覚えていた。
カイの運転するトラックで家財道具一式と家族全てで引っ越ししたのだ。
奏はなんだか旅行に行くような気分でワクワクしっぱなしだったことを覚えていた。響のほうはずっと塞ぎ込んで

窓の外ばかり見ていたことも。
「アダムと別れるのがつらかったんだろうね」
「僕と？」
「お姉ちゃんのほうがね」
「――ああ。そうなんだ」
「昔話は別にいいや。過去なんて意味ないし。さ、教えて、アダム先生」
アダムが奏の対面にある椅子を引き、そこに腰を下ろして奏をまっすぐに見つめる。
「残念だけど、これから話すのは昔話なんだ。けれどとても意味のある昔話になると思う」
そしてアダムは語り始めた。

狂った時代の、昔話を――。

吹雪

その日は朝から粉雪が舞っていた。
響の頬に当たる風も切れるような冷たさで、顔に当たる雪粒の感覚すら感じられなくなるほど冷え切っていた。ニットの帽子を目深に被り、風の当たる部分をなんとか減らす。それでも足元から来る冷気ばかりは防ぎようがない。気温は間違いなく氷点下、冷蔵庫のほうが幾分か暖かいかもしれない。
小刻みに動いて寒さに耐えている響に比べて、隣に立っているデヴィッドは顔色一つ変えず、背中も丸めることなく隙のない姿勢で歩いている。
松本駅の構内に入ると風が遮られる分、いくらかマシになった。
ここから移動するのだろう。
デヴィッドはホテルから出てもここからの行き先を言わず、響はただ黙ってついていくことしかできない。
最終的に沖縄が目的地になるとは聞いている。
普通に考えれば羽田から飛行機で向かうのが一番早いし確実だ。その次に候補を挙げるとするならば、新幹線で関西方面から飛行機か、そのまま九州に抜けて鹿児島からフェリーという選択肢もあった。
けれどデヴィッドはそれらを選ばなかった。監視の目があるからだとだけ言っていた。
まだ駅のほうが人が多い分、服装の特徴さえ知られなければ紛れるのが容易いらしい。それでもいつかは見つけられるだろう。

ふたりを追ってくる、赤い盾という組織はそれだけのものらしいのだ。

デヴィッドに言わせれば、それがOMOROを炎上させた主犯らしい。学校で進学コースのコマツたちが凶暴化した件にも絡んでいると言っていた。そしてそれを鎮圧させるために、まるで軍隊のように野戦服を着た大勢の人間を動かしている大規模な組織だ。

それなのに響とデヴィッドはたったふたりでそれらから逃げなくてはならない。

「逃げ切れるの？」

「俺を信じろ」

デヴィッドはそうとしか言わない。

他に選択肢はない。

響がデヴィッドの手から逃げるという選択肢もあるだろう。けれどそれをしたところでなにができるというのか。

帰る場所はもうない。

目の前の背中を失えば、ひとりで行かなくてはならないのだ。どこかへ。

券売機で切符を買い、デヴィッドが響を連れてきたのは大糸線のホームだった。

案内板の行き先を見ると、信濃、糸魚川と書かれている。確か日本海側の地名のはずだ。

「沖縄に向かうんじゃないの？」

「その予定だ。一度西側に抜けてからルートを考える。眠れたか」

「一応」

そう答えたもののあまり眠れはしなかった。

ダブルベッドを占有できたとはいえ、同じ部屋の中で同じ年頃の男子が寝ているのだ。こんな異常な状況でそんなことを考えるのはどうかとも思うが、やはり意識はしてしまう。そんな年頃なのだ。

「トイレは」

「大丈夫。ホテルで済ませたから」

「ここから先が長い。できることはここでしておいたほうがいい」

そう言って野沢菜とシールの貼られたおにぎりと温かいお茶を差し出す。

「おにぎりは昨日、買っておいたものだ。少し固いが食べられる」

「別に気にしないよ。それに今、お腹すいてないし」

「だったら持ってろ」

そう言って無理やり響の上着のポケットにそれをねじ込む。

列車に乗り込むと、乗客が何人かいた。スキーバッグを持っている乗客の姿もあった。白馬などのスキー場もこの沿線から行くことができるらしい。もちろん雪山に登る登山客の姿もあった。響たちも彼らと似たような重装備をしていた。

発車のベルの音が流れ、車両が動き出すまでデヴィッドは口を利かなかった。あたりに気を配り警戒していたからだ。その張り詰めた空気は隣にいる響にも伝わってきていた。

ドアが閉まり、ゆっくりと列車が動き出す。

そして駅の構内から雪の舞う中へと出た頃になって、デヴィッドが手袋を外す。それと一緒に張り詰めた空気が和らぐのが感じられた。

暖房の効いた車内では手袋をしていると暑いくらいだった。響もデヴィッドのように分厚い手袋を外すと解放された素手の感触が心地よい。

「しばらくは大丈夫だろう」

「どれぐらい？」

「目的地に着くまで、まずは一時間。そこから乗り換える予定だが……、着いてから考える」

本当に用心深い。

「……聞いてもいい」

「なにをだ」

「私のこと」

「お前のことならお前が一番知っているだろう」

「そうじゃなくて、なぜ私が追いかけられるの？」

「特別だからだ」

「どこが？　私は普通の女子高生で——」

デヴィッドが響を遮るように言った。

「お前は——、お前たち姉妹は、世界を変えることができる。だから狙われる」

——ありえない。

「まだ自覚はないだろう。だから今なんだ」
「なんなの、それ？」
「人より速く走れる。高く跳べる。それを感じたことはないか」
響は首を横に振った。
「傷の治りが人より早い。そう感じたことはないか」
それは覚えがあった。けれどそれが特別なこととは思えない。怪我をすれば血だって流れる。確かに小さな切り傷であれば、気がつけば治っているレベルの話だ。大きな怪我は——、そう。幼い頃、奏が負ったような大怪我をすれば生命だって落とすかもしれないのだ。そしてそのとき響自身はなんの役にも立たなかった——。
記憶の中で一番忘れたい出来事を連想してしまったことに、落胆してしまう。
「あのことはお前のせいじゃない」
——え？
響がデヴィッドの顔を見つめる。
なにを知っているというのだろう。
デヴィッドはそれ以上、なにも言わなかった。代わりに、
「お前たちの血は特別なんだ。赤い盾の連中は、それを狙ってる。世界を変えるほどの力を秘めた、ディーヴァの血を」
ディーヴァ。確かオペラの歌姫のことをそう呼ぶのではなかったか。そう響は思った。
どこか遠い昔に聞いたような気もしていた。
「ディーヴァって、なんなの」

「お前たちの母親がそう呼ばれていた」
「私と奏の、お母さん？」
双子の響と奏を産んだ母親はふたりが赤ん坊の頃に死んだと聞いている。
よくは覚えていない。
ただ、常に歌声が聞こえていた。その印象だけは響の記憶の奥深いところに残っている。そんな気がしていた。
「お母さんがなにを？」
「ディーヴァはなにもしていない。本能のままに生きようとしただけだ。ただディーヴァの周りにいた人間たちはそうじゃなかった」
デヴィッドが前を向いたまま口を開く。
「一五年前——、ニューヨークで事件があった。生物兵器を使ったテロだ。メディアの中継もあり、生物兵器に汚染された一般市民が暴徒化。結果、軍が出動し、テロ集団が占拠したオペラハウスを爆撃せざるを得なかった。オペラハウスには当時の国防長官もいたが死亡。オペラハウスがあったところには慰霊碑が置かれている」
「ニュースで見たことがあるわ。現代史の教科書にも載ってたし」
「だが、実態はこうだ。サンクフレシュ・ファルマシーが開発したデルタ六七をベースとした生物兵器を含んだ食品が福祉の名のもとに、世界中にばら撒かれ、ディーヴァというオペレッタの歌声によって共鳴、一斉に翼手化し人を襲い始めた。それは当時の米国の一部の組織が関与しており、それを隠蔽するために爆撃をした——というのが真相だ」
「そんな映画みたいなこと——」

デヴィッドが自分のスマホにある写真を表示する。
そこにはゴリラとコウモリを合わせたような奇妙な化け物の姿が映し出されていた。
「翼手だ」
「翼手……？」
「これがニューヨークで暴れたためにやつらは全てを隠そうとした。
歴史なんてものはいつだって上書きできる都合のいい『真実』ってやつなんだ。俺たちの知ってる歴史なんてものは、時の権力者と思想家が都合よく作り変えてる。他の国の事件だってそうさ。見方が変われば、正義はいつだって悪者になる」
確かにそうなのかもしれない。中学のときに習っていた歴史の内容が、高校の教科書ではなかったことになっていたり、別のなにかに変わっていたりすることもある。新しい事実が調査によってわかったということだってある。例えば化石から想像されているティラノサウルスという恐竜だって、その昔は獰猛で全身を恐竜らしい皮で覆われたトカゲの大ボスのような生物として描かれていた。それが今では鳥類の原点とも言える進化の枝の途上にある生物で羽毛に覆われていたという説もある。ハルキゲニアという古生代の生物も実は上下逆さまで発表されていたりと、そのときの状況や新しい発見が相互に絡み合って視点が変わっていく。
そしてそれらは人が語り継いでいく以上、意図的に変えることだってできるのだ。
響の住んでいた町でも、基地がある割には、基地の撤退を訴える地元住民たちがいた。けれど何十年もそこで生きてきた人間にとって、もはやそれは人生の一部であり、人間を作る環境の一部となっている。慣れ親しんだ一部に対して、違和感はなくなり、むしろそれがオリジナリティとなるのだ。

帰る場所のある人間たちが外からやってきてスピーカーのようにまくし立てる。それが彼らの正義であるかのように。
彼らは影でしかない。もし彼らの正義が叶ったときに、彼らは次の獲物を探すのだろう。正義を振りかざすことそのものが彼らの目的になっているのだから。
正義という行為の支配者側であること。
これが人間がもっとも人間らしく生きられるという世界なのかもしれない。
「ディーヴァの血は、そういう連中の正義のために使われようとしたんだ。もっとも果たされる前に、ディーヴァの死を以て、不完全なままに終わったけどな」
「お母さんは死ななくちゃならなかったの?」
「よくはわからない。ただ見ていた人間たちの話から読み取る限りは、戦っていた相手とともに死のうとしたらしい。彼女にはお前たちがいた。それで十分だったようにも見えたそうだ」
「だったら——」
遺された私たちはどうだってよかったということなのか。
母親の愛情を響は知らない。それは奏も一緒だ。
養父のカイがその分もあまりある愛情を注いでくれたと信じているし感謝もしている。
けれど、今聞かされたことが真実であるならば、人間の脅威となる血を宿して生きている以上、存在してもよいのかという気持ちにすらなってしまう。
——やっぱり私は、普通と違う。

「俺は絶対的な正義なんてものはないと思ってる」
デヴィッドが苦々しく言った。
「ただ、守るべきものを守る。俺が俺であることを証明するために——。そんな生き方をして、死ぬときに正義だったと俺自身が納得できればそれでいい」
「よくわからないわ。だって普通に生きてきただけなのに」
「お前の身体の中を流れる血は、歴史を作ることができる。それだけの力がある」
「でも、私はただの高校生で——」
「諦めろ。そう生まれてきた以上、それを受け入れて、前に進むしかない。それがお前の生き方になった。それだけだ」
「そんな……」
人間らしく生きたい。
ただ普通でいたい。
そんな小さな願いすらも奪われてしまったというのか。
世界を恐怖に陥れるような血を持った自分自身。
そんな人間が生きていく意味などあるのだろうか。
「ひとつだけ言えることがある」
不意にデヴィッドが言った。
「え?」
「このままおとなしくやつらに捕まれば、間違いなく連中の私欲のために利用されるだけの実験動物にされる」

「嘘……だよね？」

「やつらが学校でしたことを見ただろう」

そうだった。

響が通っていた高校にばら撒いたサプリメントで、人を凶暴化させて混乱を起こし、その鎮圧という目的で偽装して響の身柄を確保しようとしている連中だ。そして住んでいたＯＭＯＲＯも連中に燃やされ、カイも奏も行方知れずになっていた。

「お前の日常をなんとか守れるよう、今俺の仲間たちが全力で阻止しようと動いてる。だが正直な話、赤い盾に勝てる見込みは一割もない。いや、それ以下だろう」

それは響にとって絶望的な話だった。

こんな状況で言わないでほしかった。

それでもデヴィッドは淡々と話し続ける。

「俺は都合のいい嘘で人を安心させるなんてことはできない。だが、これだけは言っておく。お前の歴史はお前しか築けない。お前の明日を作るのはお前自身だ。特別な存在であろうが、お前が生きたいように生きればいい。ただ、自ら死を選ぶな」

デヴィッドの手が響の手に重ねられた。

「俺がお前を守る。そのために俺は生きている。俺の正義を信じろ」

温かい手だった。

やわらかいのではなく、手のひらはどこかゴツゴツとしている。なにかのスポーツなどで鍛えられた手だ。その手

の感触に、ふとカイの手を思い出した。どこか似ている。そんな気がしていた。
大糸線は南小谷駅が会社境界線となり架線のある普通の電車からディーゼル車への乗り換えとなる。
列車を降りると冷たい空気が温かさに慣れた頬を撫でていく。
鈍色（にびいろ）の雲が空を覆い、細かな雪が舞っていた。
ここで降りる乗客はほとんどなく、階段を上り反対側で出発を待つディーゼル車へと乗り込んでいく。響たちもそうした乗客たちに続いて階段を上っていく。大きなリュックを背負うデヴィッドの背中が響の前の前にあった。
ふと、階段を上りきったところでその背中が止まる。
デヴィッドがなにかを見ていた。
ホームを渡る階段の通路の窓から、これから乗り込もうとするディーゼル車の停まっているホームを見下ろしていた。
「なに？」
「予定変更だ。ここを出る」
「え？　糸魚川まで行くんじゃ――」
「赤い盾がいる」
響もホームを見下ろし、それらしい人影を探す。
「どこに――」
「中に乗ってる。行くぞ」
そう言ってデヴィッドは元来た階段を戻り、南小谷駅の改札を抜けて駅舎を出ていく。

駅を出ると、姫川の流れを横切る国道の橋があり、デヴィッドは迷うことなくそちらへと足を向けた。そしてそのまま響の手を引き、薄っすらと雪に覆われた道を歩いていく。

国道の上の案内標識を見ると糸魚川まで四一キロと表示があった。ほぼフルマラソンの距離だ。まさかこれを歩いて行くつもりなのだろうか。しかもこの雪の中を。

無言のまま歩き続けるデヴィッドの背中がそれを肯定しているかのようだった。

雪の上だというのに歩くペースは落ちない。

慣れない足元に響は遅れそうになりながらもなんとか前の背中についていこうとする。

距離が空きすぎるとデヴィッドが足を止め、響が追いつくのを待つ、その繰り返しを何度かしたところでデヴィッドがふと足を止めた。

国道から脇に入る上り坂があった。

その先はつづら折れになりながら奥の山へと続いているようだった。

「線路沿いを行けば、あれに乗らなかった俺たちに気づいて先の駅で連中が待ち伏せしているだろう」

「だから山の中を？」

「ああ」

「危なくないの？」

「このまま進むよりは安全だ」

ノーとは言えなかった。そして決まってデヴィッドはこう言うだろう。

「俺を――」

「信じろ、でしょう？」
響がデヴィッドの言葉を遮った。
「それでいい。行くぞ」
前を向いたデヴィッドの背中が動き始め、雪の積もった坂道へと進み始めた。
新たに積もった雪には足あとがなかった。
その上にはデヴィッドが作った足あとだけが続いていく。
まるで響を導くかのように。
響は歩き始めた。デヴィッドの作った道を辿って——。

「赤い盾がなぜ結成されたのか、それを知っておいたほうがいいだろうね」

奏とアダム、ふたりだけしかいない船内のレストランの中だというのに、アダムは声を潜めていた。

「まだネットも電話もない時代、世の中における情報の重要性に気づいて、それをいち早くビジネスに結びつけて成功し、莫大な資産を築いた一族がいたんだ。それが太陽ともいえるゴルトシュミット家。そしてその実質的な手足となって動いていたのがそこから派生し月のように付き従うゴールドスミス家のふたつだ」

「なんか聞いたことある」

「たぶんいろんなところにその名残はあるだろう。銀行、ホテル、デパート、アパレル——。様々な分野に彼らは手を伸ばし、そして錬金術の根を張り巡らせたんだ。

ただあるとき、ゴルトシュミットとゴールドスミスの立場が逆転する出来事があった。それが僕たちが『ボルドーの日曜日』と呼んでいる赤い盾誕生の、忌まわしき記念日のことになる」

アダムが立ち上がり、カウンターの奥にあるワインクーラーの中にあるワインボトルとグラスを取り出し、それをテーブルの上に置いた。

そのラベルには遺跡のような塔が描かれていた。

「シャトー・デュエル。ゴールドスミスが保有しているワイン農園で造られているワインだ。世界的にもかなりの銘品だ」

「高そう……」
「高いよ。ものによってはロマネ・コンティに匹敵するとも言われてる」
「なにそれ？」
「世界的な高級ワイン。一本あたり車一台分とでも言えばいいかな？」
「……高ッ！」
「まあ、今、問題にするのはワインじゃない。このラベルのほう」
アダムが塔の絵を指差す。
「この塔——、青い蔓バラが咲く塔の中にひとりの少女が幽閉されていたんだ」
「……なにそれ。監禁？　犯罪じゃない」
「人間相手ならそうだったかもしれない。ただ彼女は人間として扱われていなかったんだ」
「……え？」
「愛を知らない獣として、この塔に閉じ込められ、何十年も観察されていたんだ」
アダムがひと息をつき、ボトルの蓋を開けるとグラスに真紅のワインを注ぐ。
「全ての始まりは、このシャトーが『動物園』と呼ばれていた一八三三年に遡る。
当時のゴルトシュミット家の当主はジョエル・ゴルトシュミットという男だった。なにもしなくても金は勝手に集まってくる。だから、彼はそれでも集められないもの——、世界中の珍しい植物や動物をこの『動物園』に集めて、観察と研究することが生きがいとなっていた。そのとき助手となったのが、ゴールドスミス家からジョエルの補佐をするように遣わされていたアンシェルという男だった。一族が皆、ジョエルの研究を奇異な目で見る中、アンシェル

だけが賛同者として彼に協力的だったんだ。彼は全知全能の存在がなんであるのかを知ろうとしていた男だったからなんだけどね。

ある日、ふたりはアイスランドで発見されたという奇妙な女性のミイラ——、ＳＡＹＡの解剖を始め、そこから繭を取り出したんだ」

「繭って、あの蚕とかが作るやつ？」

「その繭だ」

「なんで女の人からそんなものが出てくるの？」

「だから奇妙だったんだ。ＳＡＹＡは頭半分を潰された状態で発見され、膨らんだ腹の中から取り出されたふたつの繭はまだ生きていた。解剖時にアンシェルがメスで自分の指を傷つけ、血がその繭に落ちたとき、その繭が脈動したことで生きていることがわかったらしい。

彼らはその繭の観察に夢中になった。

様々な生き物の血を与えてみたが、人間の血にもっとも反応があったらしい。だから『動物園』に来ていた下男下女たちから少しずつ血を買い取っては与え、四カ月ほどで繭から小さな女の赤ん坊が現れたんだ」

「それっておかしいじゃん？　なんで繭から人間が出てくるの？」

「そう思うよね。でもそれが事実だから仕方がない。電子顕微鏡とかレントゲンとかの様々な分析装置があればその繭の中身を経過観察できたと思う。けれど実際のところ、彼女たちは人間の血を吸うことでその遺伝構造を引き継ぎ、その形に擬態して生きることが最適だと生物的な本能でそうしたんだろうと僕は考えている」

「宇宙人なの？」

「かもしれないね。

このふたりの赤ん坊をジョエルとアンシェルは育ててみることにしたんだ。あくまでも観察の範疇としてだけど。そのうちのひとりには元のミイラの名前であったSAYAからつけた、小さな夜という意味の日本の言葉で『小夜』という名前を与え、ジョエルの養女として乳母の乳を与えられ、人の愛を知る娘として育てられた。もうひとりは名も与えられず、あの塔の上にある鍵のかかった一室で生き血を喰らう獣としてアンシェルが飼育することになったんだ」

「飼育……？　人間なのに？」

「人間ではない。生まれたときを見ている彼らからすればね。だから小夜のほうがイレギュラーなんだ。でも考えてごらん。その昔、人間たちはアフリカから無理やり人間を連れてきて、奴隷として扱っていた時代もあったんだ。その時代の人間からすれば、種における遺伝子的な一致など意味をなさず、生まれ育った環境こそが全てだった野蛮な時代があったんだ。人間は生まれながらにして人とそれ以外に分けられた時代がね。今でもあるだろう。社会的格差のようなものが」

「……うん」

「人間は優劣をつけずにいられない生物なんだ。群れで生きる生物の本能としてね」

そのときグラスの中の真紅のワインの表面がさざなみのように波打った。

奏には感じられなかったが、船が少し揺れたのかもしれない。

アダムは静かに話を続けた。

「窓を閉ざされた塔の中で彼女に与えられたのは、石造りの壁と床、鉄格子と餌となる生き血を持ってくるアンシェ

ル。そして時折、窓の隙間から見える空の景色と、迷い込む虫の類、外から聞こえてくる鳥の鳴き声が、彼女にとっての世界の全てだった。彼女はある程度の年齢——、そう今の君たちくらいの年頃までは成長を続けたが、ある日、それが止まり、何十年も同じ姿のままだった。まるで彼女たちの周りだけ時間が止まったようにね」

「彼女たち？」

「小夜も彼女と同じだったんだ。それでも小夜のほうはジョエルに愛を与えられてレディとしての教育を施された。更には『動物園』の中で同じ年頃の子供たちと会うことなく育った小夜のために、ハジという少年をあてがい、社会的適応性を持ち合わせるための相手にしたらしい。けれどハジは普通の人間だった。だからいつしか小夜の年を追い越してしまったそうだ。それでも小夜は幸せだったらしい。

塔に閉じ込められたまま、誰とも会うことのない塔の中のお姫様はというと、ある日、外から聞こえてきた不思議な音に興味を持ったんだ。

それが小夜がジョエルから教育されていた楽器の旋律だったんだ。

そして鳥の声を真似るかのように、その旋律に声を乗せた。

塔の中の彼女はその音に興味を持った。

彼女が歌を覚えた瞬間だった。

そしてそれが彼女の全てになった。

飼育者であったアンシェルもこの反応に驚き、そして同時にも魅了されたらしい。

ただこの歌声が惨劇の——、『ボルドーの日曜日』の引き金になるなんて、このときは彼も予想していなかっただろうけれど」

「なんで歌が？」
「この彼女の歌声に導かれるように、小夜が彼女の存在を知ってしまったからだ。同じ母親から生まれていながら、離れ離れにされていた血を分けた妹がそこにいる。おそらく科学では証明しきれない力が働いていたのかもしれない。双子にはそうしたところがあるって聞くしね」
奏にも思い当たることがあった。
姉である響に身体の変調があると、自分にもそれがわかることがある。同じ身体の構成であり、環境も同じだからそうなる確率は高いだろう。けれどもそれだけでは解決できないことは多かった。
アダムは奏の表情をじっと見つめ、そして奏の興味がアダムに戻ってくるのを悟ると再び話を続けた。
「一八八三年。その日はジョエル・ゴルトシュミットの七二歳の誕生日だった。
小夜はジョエルを驚かせようとプレゼントを用意することにしたんだ。ひとつはジョエルの好きなヤマユリの花を採ってくること。もうひとつは、歌声を通じて存在を知った妹を友達として連れていくことだった。
言葉を知らないはずの塔の中のお姫様と小夜は不思議な力で意思を通わせることができたようだった。
そして小夜は自分の妹に名前をつけたんだ。歌声がきれいだから、ＤＩＶＡ――、ディーヴァとね」
「ディーヴァ……。それって――」
「そう。君たちの母親だ」
「でも――」
「最後まで話を聞けばわかるよ」
「……うん」

アダムが静かに物語の続きを話す。

「小夜はディーヴァの外に出てみたいという願いを叶えて、ジョエルへのサプライズプレゼントにするためにアンシェルが隠していた塔の鍵を取りに行き、その鍵を開けてしまったんだ。

そしてディーヴァは初めて外に広がる広大な世界を感じて、歌声を上げたんだ。

その歌声を最初に耳にしたのは、このことをこっそり見守っていったアンシェルだったんだけどね。

一方、ヤマユリを採りに行った小夜には悲劇が起きていた。従者だったハジがヤマユリを採ろうとして崖から落ちてしまい瀕死の重傷を負ったんだ。血が流れ続ければ確実に死んでいたはずだ。それを放っておけなかった小夜は、普段自分がジョエルから受けていた輸血をしてみようと思いつき、自らの血を飲ませたんだ。偶然なんだろうけど、ハジは息を吹き返した。そして助けを呼ぶために小夜が屋敷に戻ると、そこはジョエルの誕生日を祝う宴が催されている華やかな場所のはずが、累々と参列者の死体が転がり、炎に包まれた屋敷の中でジョエルの血を喰らい、歓喜の歌声を上げる自分の妹の姿を見つけたんだ」

アダムが指でワイングラスを弾いた。

真紅のワインが大きく波打つ。

「これが『ボルドーの日曜日』。そうしてディーヴァはその場から消えた。それを手引きしたのはアンシェルだったんだけど。ただその事実を知らないまま、ゴルトシュミット家は『動物園』で起きた惨劇を握り潰し、自らが解き放ってしまった彼女を見つけるための組織を作り上げたんだ。それが――」

「赤い盾?」

「そう。ジョエルの当時の息子が、その名を継いで、赤い盾を率いたんだ。自らの家の汚名を晴らすためにね。

ただこの人智を超えたディーヴァに対抗できるのは、彼女を逃した張本人である小夜の血だけだったんだ。だから赤い盾は小夜をただひとりの人間を殺すための暗殺者として仕立て上げた。そして偶然、小夜の血を授かり生き返ったハジは人間としての時が止まり、不死に限りなく近い存在である小夜の従者――、シュヴァリエとして小夜に生涯仕えることになったそうだ。

全てを知るアンシェル・ゴールドスミスにとって、ディーヴァこそが彼が探し求めていた全知全能の存在だった。また彼女に相応しい人間として傍にいたいとも願っていた。だから彼はディーヴァの血を受け入れた。自らの意思で」

「人間じゃなくなったの？」

「翼手の眷属。ディーヴァのシュヴァリエとして生きることを選んだから、そうなるね」

「シュヴァリエって……、なに？　英語？」

「元はフランスにおける騎士の呼び名だ。翼手の女王から血を授かり、その眷属となるわけだから、ある種の主従関係となる。ただそれは階級的な意味よりも、翼手の女王を守るための騎士として、不死に近い力を手に入れるんだ」

「死なないって無敵じゃない」

「そうでもないよ。ディーヴァたち、翼手の女王も完全じゃなかった。

彼女たちはある周期が来ると三〇年ほど眠りに就くんだ。繭の中で。

そしてその間にシュヴァリエに自らを守らせ、再び目覚めて、彼女たちの本能のままに生きようとする。もしかしたら小夜がハジをシュヴァリエにしたことでこのサイクルが動き出した可能性もあるんだ。もちろん同じ頃、ディーヴァもアンシェルをシュヴァリエにした。双子の偶然なのか、運命のいたずらなのかはわからないけど。

そんな不思議な存在だからこそ、アンシェルは興味を持ったんだろう。

ディーヴァの傍でアンシェルは、人類というものがどこまでディーヴァに近づけるのかを知るために様々な研究に莫大な資産をつぎ込んだ。ゴールドスミス家が得た資産を元手にね。彼は研究者としてだけでなく、経営者としても才覚があったんだ。ゴルトシュミット家が『ボルドーの日曜日』にジョエルを失い、その尻拭いをしている間に、ゴールドスミス家が完全にその覇権を握ってしまったんだ。それでもゴルトシュミット家が国家規模の資産を持つ富豪であることに変わりはなかったけれど、ゴールドスミス家の規模から比べれば象とネズミくらいの差はあったかもしれない。

アンシェルはディーヴァの血を使って、仲間を増やし、時の権力者の傍に付き従う人間を巻き込むことに成功していった。そうした人間は皆、人間というものに絶望していたから仲間に引き込みやすかったんだろうね」

「みんな仲が良かったの？」

「……いや。そんなことはないよ。裏切り者が、ひとり……いた。君はアドルフ・ヒトラーの名前を知ってるかい？」

「歴史の授業で聞いたことあるわ。第二次世界大戦で死んだ人でしょう？」

奏の答えにアダムが苦笑する。

「間違ってはいないけど、ただの戦死者じゃない。一九四五年四月三〇日。その日、彼は自殺した。第二次世界大戦で連合軍と対立した三国同盟のひとつ、ナチス・ドイツの総統だった彼だけど、連合軍の包囲網とソ連軍のベルリン侵攻で全てを諦めて自殺したんだ。愛人のエヴァ・ブラウンとね。

彼の死は当初、多くの謎に包まれていた。実は発見された死体は別人で、Uボートを使って大西洋を渡り南米にま

で逃げて今も生きている――とかね。
もちろん今では研究者たちによってその足跡が調べられて、ある程度の真相は見えているけれど。
でもこうした噂が出るには必ず元になった事実が存在している。
ヒトラーにはマルティン・ボルマンという個人秘書とも言える側近がいたんだ。彼はベルリンの総統府の中でもかなりの嫌われ者で、ヒトラー以外からは信用されてなかったそうだ。そんな彼が実はアンシェルが送り込んだディーヴァのシュヴァリエで、ディーヴァとともに世界を動かしていたって言ったら信じるかな？」
「え？　そんなことできるの？」
「彼だけだったら無理だっただろう。あの当時、ヨーロッパはどこにいても安全なところなんてなかった。だからアンシェルはもっとも安全な場所がどこかを考えて、ディーヴァをそこに避難させることにしたんだ。
それがドイツ。そしてもっとも安全な場所っていうのが、ヒトラーの傍だったんだ。
愛人のエヴァ・ブラウンが途中からディーヴァが擬態して入れ替わり、マルティンも同じように入れ替わっていたとしたら誰も気づかないよね。そして連合国側でも部隊を動かせるレベルの地位にアンシェルが用意したシュヴァリエたちが潜り込んでいたとしたら――、戦局を両方から察知しある程度の動きの中でディーヴァを避難させることができるからね。
それに当時、ナチス・ドイツがいろいろやっていた研究っていうのにもアンシェルはすごく興味があったんだ。
彼らも人間を超えた人間を創る研究をしていたらしいんだ。
その情報をマルティンに集めさせたりしていたんだ。情報が全部集まるヒトラーの傍にいたわけだし、筒抜けになるからね。それをマルティンは『ボルマン文書』という名前で密かにまとめていたんだ。ここまではアンシェルの描

いた思惑通りに進んでいた。
けれど誤算がひとつだけあった。
元々はドイツ含めて支配下に置こうとしていたロシアにもシュヴァリエを潜伏させていたんだけど、そのシュヴァリエが、赤い盾の小夜に狩られてしまっていた。その後、ロシア革命が起きてソ連となったことで彼らの手が届かなくなり、ソ連方面のコントロールができなくなった。結果的にソ連のスターリンがほぼ独断でベルリン侵攻を決めてしまったんだ。ディーヴァを救出することが難しくなって、それをドイツ内部に潜伏させていたマルティンに一任するしかなかった。
ところが五月七日のベルリン陥落後、このマルティンとディーヴァがドイツから抜け出したことがわかった。アンシェルが遣わしたシュヴァリエのネイサンという男が彼らを迎えに行ったらしいんだけど、彼らはその場所に現れなかった。
そこで初めて裏切ったことが発覚。しかも赤い盾に『ボルマン文書』と一緒に、ディーヴァを手土産にして寝返ろうとしていることまでもが、アンシェルの耳に届いてしまったんだ。
それがアルザスだったらしい。
アルザス・ロレーヌ地方。聞いたことあるかな？」
「なんとなく」
社会科の授業で聞いた覚えはあるが、そこがどんなところなのか奏には想像がつかない。言葉の印象からフランスあたりなのかもしれないと思うだけだ。
「アルザス・ロレーヌはドイツになったりフランスになったりと歴史に翻弄された場所なんだ。そんな場所でマルティ

ンは赤い盾のエージェントを待ったんだ。そのとき赤い盾から派遣されてきたのは小夜のシュヴァリエのハジだった

そうなんだけど、結果から言えば、マルティンはハジに会うことは叶わなかった」

「逃げたの？」

「当時の赤い盾の動きはアンシェルには筒抜けだったからね。もちろん、マルティン亡命の情報も彼の耳に入った。マルティン単独での亡命だったらアンシェルも見逃していたかもしれない。けれどマルティンはアンシェルお気に入りのディーヴァを取引の材料に亡命しようとしたんだ。

アンシェルの逆鱗に触れた形になったんだ。

そしてマルティンの元には、彼を罰するための処刑人が派遣された。シュヴァリエ殺しっていうとんでもない力を持たされたソロモンってシュヴァリエがね。彼はこうしたときのために選ばれ、シュヴァリエに仕立てられた。ゴールドスミスにつながる血族だったけどね」

「シュヴァリエって死なないんじゃなかったの？」

「いや、死ぬよ。とはいえ大量出血とかで機能停止させることはできても、焼かれようが、潰されようが時間をかければ蘇ることができるのがシュヴァリエだ。でももうひとりの女王の小夜の血があれば、シュヴァリエの血を結晶化させて殺すことができる。これがもっとも効果的だろうね」

「じゃあソロモンって人のやつは？」

「ソロモンのシュヴァリエ殺しには毒があったんだ。ディーヴァのシュヴァリエを確実に殺すことができる、小夜の血にも似た構造の毒がね……。もっとも小夜ほどの即効性はなかったけれど。

小夜に、二番目にシュヴァリエにしたグレゴリーがロシアで殺され、三番目にシュヴァリエにしたマルティンは四

番目にシュヴァリエにしたソロモンが殺した。その後、様々な実験体とするためにシュヴァリエに仕立てたカール、アメリカ軍の情報を得るためにシュヴァリエにしたジェイムズ、そしてドイツでヒトラーの動向を監視するために置いていたネイサン――。七人ものシュヴァリエを仕立て、最終的に生き残った五人でディーヴァの未来を作るために、この世界をディーヴァの歌声と青い薔薇で満たすために一致団結したはずだったんだ」
「誰か裏切ったの？」
「……うん。皆がディーヴァのことを愛していた。絶対的な母として。けれど小夜のことも愛していたんだ。これは生物学的に子孫を残すための求愛の相手としてね。ネイサンとジェイムズはちょっと違ったみたいだけど。『ボルマン文書』は行方知れずのまま、ディーヴァの血を元にアンシェルは人造翼手化計画を進めることにしたんだ。それがベトナム戦争の裏で行われたデルタ計画っていうやつ」
「デルタ……？」
「ディーヴァの『D』から取った計画のことだよ。戦争っていうのは情報が不安定でね、いろんなことが起きても不思議じゃない。だからそれを利用してアンシェルは非人道的実験というものを繰り返していったんだ。ベトナム戦争だけじゃない。湾岸戦争とか、いろんな民族紛争とか、とにかく金と火薬と憎しみが淀んだ場所にアンシェルは手を広げていって『ボルマン文書』に繋がる情報も手に入れた」
「見つかったんだ？」
「ゴールドスミス関連の製薬会社にサンクフレシュ・ファルマシーっていう企業があって、そこに在籍していたヴァン・アルジャーノの祖父が綴った日記の中にこの『ボルマン文書』の手がかりが残されていてね……。それを元にアンシェルはディーヴァの血で人造翼手を作り出すことに成功したんだ。不完全だったけど」

「不完全？　どういう意味？」
「彼らは太陽の下では生きられない。そして不安定な使用期限があった」
「使用期限って、モノみたいな言い方なのね」
「彼ら——、シフは兵器として活動するよう造られたんだ。後に使用期限も安定してある程度まではコントロールできるようになったけど。実際にアメリカでは秘密裏に彼らの実戦投入の話が進んでいたらしいんだ。ただそれを推し進めていた国防長官がニューヨークの事件で死んじゃったから、その真相は五〇年経たなきゃ公開されないファイルのひとつになっちゃったけどね」
そう言って無邪気そうにアダムが笑った。
「でも、そのニューヨークの事件——。そこで君たちの母親であるディーヴァが死んだんだ。小夜に殺されてね」
「——え？」
そこまで言ってアダムが音も立てずに立ち上がり、椅子に座ったままの奏の背後に回った。
そして体を屈めてそっと奏の耳元に囁いた。
「もうすぐこの船は赤い盾の本部に到着する。そこで君は選ばなくちゃいけない。君自身がなんのために戦うのかをね」
「戦うって……」
アダムを振り返ったが、もうそこにアダムの姿はなかった。
消える気配すらなく、いなくなってしまったのだ。まるではじめからそこにはいなかったかのように、動くものはいない。
ただ、テーブルの上にはグラスに注がれた真紅のシャトー・デュエルが残され、その表面だけがかすかに揺れ続け

「臭えな」
暗がりの中で男は悪態をついていた。それを諌めるような声がもうひとつ暗がりの中から聞こえてくる。
「ちょっとは我慢しな。特別の抜け穴なんだ。それにドブネズミの気分になるのはロンドン以来だ、懐かしいだろ？」
「思い出したくもねえって」
「よし、もう灯りをつけてもいいだろう」
その言葉と同時に白い光があたりを満たすと、光の筋の中に正体不明の微粒子が舞っているのが見えた。
これらが悪臭の元なのだろう。鼻と口を覆うような防臭マスクを着けていてもこの悪臭は完全には防ぎきれない。
それもそのはずだ。ここは東京都の地下を通っている下水道の中だった。
あらゆる汚水が流れ込む、東京都の中でもっとも不衛生な場所のひとつであるに違いない。
そう考えると靴の中を濡らすこの液体に触れていることがたまらなく嫌になってくる。
けれど生命と引き換えに選んだ選択肢がこれだったのだ。
「出口は？」
「もう少し先だ。そこに点検中の囲いを出してある」
「シャワーの用意してあるんだろ？」
「脱臭剤もたっぷりと用意してあるぜ。とっておきの塒(ねぐら)にここの匂いをつけたくないからな」

「匂い……ね。やつらにもつけてあるのか」
「一応な。あそこがふっとばされたってことは、俺たちの動きも感づかれたってことなんだろうけどな」
「ふたりは無事か？」
「今のところは。もっとも、ひとりは敵の手の中だ」
「デヴィッドは大丈夫なんだろうな」
「たぶんな。ガキの頃からいろいろと仕込んどいたから、そこら辺のプロ相手なら互角に渡り合えるだろ」
「お荷物がいるのにか？」
「最強のお荷物だ。なんとかなるさ」
「ナンクルナイサ……か」
「そうそう、それそれ。さあ、俺たちは俺たちの道を行こうや」
光の輪の中でくりっとした丸い目がゴーグルの奥で笑ったのが見えた。
「わかったよ。でもこれで飛行機とか乗れんのかな？」
「だったらこのまま地下を行くか、沖縄まで？」
「勘弁してくれよ」
男たちは悪臭漂う水の中を進み始めた。
守るべきものを守るために。

「なにこれ？」
霧の中、海の上だというのに巨大な壁が突然、奏の目の前に現れたかのようだった。
アダムが壁を見上げて微笑んだ。
「これが赤い盾の本部——、母船だよ」
赤い盾は世界的な情報機関だった。
しかし世界中に張り巡らせた情報と資本のネットワークは超国家レベルの影響力を持ち合わせており、テロ組織の標的となりやすい状況にあった。そのため常に世界中のどこでもない場所——、公海を移動し続ける小国家としてこの巨大な豪華客船に本部を置いていたのである。
「以前、ディーヴァと音無小夜の戦いでこの船は壊滅的な打撃を受けたんだ。でも、それを修復し、戦艦レベルの防衛装置を内蔵したことで再び赤い盾の本部としての機能を取り戻した」
頭上で大きな羽音が聞こえる。
見ればチャーター船の上にヘリコプターが降りてくるところだった。
それに乗り、空から母船を眺めると、ちょっとした豪華ホテル並の高さであることが実感できた。
「長さは三六〇メートル。高さは七〇メートルだったかな。最大で五〇〇〇人くらい乗せられる」
「五〇〇〇人……」

そう言われても咄嗟にそれがどれぐらいの数なのかは実感できない。
「同じようなタイプの豪華客船であれば、ミニゴルフのコースやプールがふたつ、アイススケート場にカジノ、そして多くのレストランやバーがあるって話さ」
「まるで町が動いてるみたい」
「そうかもね。ただここにいる人間全てが赤い盾に関わるエージェントで、翼手と戦うための戦闘技術や知識を叩き込まれたプロばかりさ。アフリカ近くを航行していても海賊程度であれば簡単に撃退できるんだ。だから安心してクルーズできる」
「アフリカって……」
奏は考えが追いつかなかった。
つい数時間前まで日本にいたのだ。そして一昨日までは拝島駅近くの小さな沖縄風居酒屋ＯＭＯＲＯの娘として庶民生活にどっぷり浸かっていた者が、こうして豪華客船風の外見をした戦艦に乗り込んでいる。
「君はディーヴァの血を身体に宿す特別な賓客。ここ、赤い盾は小夜を支援するために作られた組織。小夜とディーヴァの戦いは終わり、今となってはディーヴァの血を引く君と、君の姉さんの響は、この船の女王でもある。だからこの船を自分の家だと思って使っていいからね」
「ここが私の家──」
「でも、ひとつだけ約束してほしいんだ」
「約束？」
「君は僕らの監視下に置かれることになる。もちろん、君を守るために」

「えっち」

「え？」

予想外の奏の返答にアダムの目が一瞬だが点になる。

「監視ってことはお風呂とかトイレとか、ずっと見られてたりするってことでしょう？」

「プライベートが保持された場所なら、そこまではしないよ。ただ部屋にいるかどうかはセンサーで感知されるけど」

「音は聞かないでよね」

「担当者に言っておくよ。レディの嫌がることは僕もしない主義だから」

奏がアダムの横顔をじっと見つめて言った。

「アダムってさ、なんか変わったよね」

「そうかな？　確かにずいぶんと会ってないからね」

そうかもしれない。

アダムと遊んでいたのはまだ奏も響も小学校に上がる前の話だ。時間は人を変えてしまう。それがたとえ同じ環境に育った双子の姉妹同士だったとしても。

——響は自分とは違う。頭もいいし、運動だってできるし、いい子だし。

そんなことを奏はいつも思っていた。ただ響がいつも自分を抑えて我慢しているような印象はあった。もしかしたら響自身がそうしていたのかもしれない。理由はわからなかったけれど。

ここに響がいたらどう思うのだろう。

あの伊達メガネの奥にあるきれいな目を輝かせて、興味深そうにこの船を見つめるのだろう。

そういうところがあるのだ。響は。

今はあまりそうした顔を見せなくなったが、実は好奇心旺盛で、仮面の下に隠していた感情がついつい顔を出すことがある。気になるものがあるとじっと見つめてしまうのだ。その顔は子供のようにキラキラしていた。

それを知っているのは奏だけかもしれなかった。

響といる時間を誰よりも長く過ごしてきたからだ。ディーヴァという母親のお腹の中にいた頃から、ずっとずっと。

それが今は離れ離れになってしまっている。

響は敵に騙されてそうなってしまっているのだと——。

「お姉ちゃんを取り返さないと」

決意がつい口に出てしまう。

「赤い盾はそれに協力するよ。全ては女王のために。それが僕たちの生き方だから」

「だったらなにができるか知りたいの。今、なにが起きてるのかを教えて。全部のことがわかる場所に連れていって」

「仰せのままに」

アダムは奏にうやうやしく頭を下げた。

＊＊＊

アダムに案内されて赤い盾の母船の中を通って奏が通されたのは最後尾にある船室だった。

価値のある重厚な調度品や、棚いっぱいに並べられた古い本などが並び、ここが船の中の一室だということを忘れ

させてくれるようだった。広い窓の前には大きな机が置かれていた。ただその席は空いたままだった。
「この部屋で世界の全てがわかるんだ」
「ここ、誰かの部屋だったの？」
そう言ってアダムが空いたままの椅子の背もたれに手を置いて自らがそこに収まった。
「赤い盾を率いた、ジョエル・ゴルトシュミットの私室。だけど——」
「——主を亡くし、今は僕がその代行としてここで赤い盾を指揮してる」
「あなたが？　まだ子供なのに？」
「君もまだ子供だろ。けれどこの赤い盾を思うがままに動かすことができる資格がある」
「今は、興味ない。今、私がやりたいのはお姉ちゃんを助けること。カイの行方を探すこと。世界中のことがわかる場所なら、ふたりがどうしてるかすぐに掴めるでしょう？」
「……わかった」
アダムが机の上の電話機の受話器に手を伸ばしどこかへと指示を飛ばす。
「音無響の現状と、カイ・ミヤグスクに関する情報を六〇秒以内に。それとデルタに関して新しい動きは？」
アダムの目が細まり、そこに鋭い光が宿る。
奏はそれを見逃さなかった。
「なにかあったの？」
「——うん」
アダムが受話器を置いて奏を見上げる。

「デルタ〇六のこと、話したよね」
確か、響の高校で暴れた男子生徒が使っていたサプリメントに混入されていた、人間を凶暴にしてしまうものだ。
奏が頷く。
アダムが机の片隅を軽くノックすると、壁の本棚が開きそこから液晶モニターが現れる。そのモニターに日本地図が映し出されていた。
「赤い盾が掴んだ情報によると、このデルタ〇六による凶暴化現象が同時多発的に広がり始めてる」
アダムの言葉を補うように日本地図の上に赤い点がひとつ現れる。それは東京の瑞穂町あたりだった。
「最初に音無響の通う都立瑞穂東高校でその報告があった。赤い盾の部隊がその事態収拾にあたったんだけど――」
日本地図上の赤い点が一気に増え始める。東京西部に点が増え、それに触発されるように中部地方へと延び、ひとつの細い線の形となっていた。
「全てが東京のような事件になったわけじゃない。凶暴化しそのまま死んでしまったり、警察などに取り押さえられたりとかいろんなケースが報告されてる。けどそのほとんどが単独での事件ばかりで、最初の学校のように凶暴化が連鎖した事件は報告されていないんだ」
「聞いていい？」
「なに？」
「この赤い点が凶暴化が起きた場所なんでしょう？」
「そのとおり」
「これ見ると、私が住んでた東京のあたりから、西に行って、そしてそのまま上に延びて線になってるよね」

「ああ。八王子方面から甲府、そして長野県から日本海方面へと赤い点が延びてる」
「これもしかしてお姉ちゃんってこっちに向かって動いてるんじゃないの?」
アダムがモニターを見つめる。
「なるほど。音無響にはディーヴァの血が流れてるからね。君と同じように。そして過去の歴史が示しているとおり、翼手の血は女王の存在によって刺激を受ける。だとするならば、この音無響がいるところにデルタのキャリアーの反応がなにかしら起こる。そう考えるのであれば、音無響が行くところにこの現象が起こるというわけか」
「……うん。凶暴化してる人がいるから、あんまり喜んじゃいけないのかもしれないけど、これを追えばお姉ちゃんが見つかると思う」
「確かに。捜索隊をそちらに向かわせよう。絞り込めばその分、発見の可能性は高まるしね」
アダムが受話器を取って、指示を飛ばす。
あとはカイだけだった。
OMOROが爆発したとき、奏は目の前に現れたアダムによってあの場所から逃げるように促された。
もしあれだけの爆発に巻き込まれて生きているのだとすればどこかの病院にいるはずだ。
そんな一縷(いちる)の望みにかけるしかない。
けれど――。
奏は視線の先にあるモニターの赤い点を見つめた。
その点は長野県から新潟県へと至るあたりへと延びていた。
「あそこにお姉ちゃんがいる」

アダムが捜索隊を向かわせているならすぐに見つかるかもしれない。
あとは響を騙している悪いやつをなんとかするだけだ。
それもアダムの指揮する赤い盾というこの組織がやってくれるに違いない。
世界を動かせるだけの力がある組織だ。
奏は大きな力を得た気がしていた。
きっとなんとかなる。これで――。
「お姉ちゃんを助けるんだ」
そうつぶやく奏を見て、アダムが微笑んでいた。

追撃

「きゃあ！」
響は思わず悲鳴を上げた。
響の身体が雪で覆われた斜面を勢いよく滑り下りていたからだった。
「なかなかうまいぞ！」
並んで雪の上を滑るデヴィッドが声をかけてきた。グリセードの一種、通称・尻セードと呼ばれる技法で斜面を滑降しているのだ。
「その調子だ。体重をストックに預けてブレーキをかければ減速する」
響が言われたとおり両手で握りしめたストックを雪に突き刺し体重をかける。するとその抵抗で一気に減速して滑降が止まった。
響の胸が大きく上下する。
初めて体験した尻セードは想像以上の速度感だった。
「今のを覚えていれば、駆け下りるよりも速い。そして転がる危険性を回避して安全に斜面を下りられる」
「……わかった。子供の頃にやった草スキーに似てる」
響が沖縄に住んでいたまだ幼い頃に連れていかれた県民の森で遊んだ草の上をソリで滑った思い出が蘇ったのだ。
「そんな顔をしてたな」

「え？」
デヴィッドが一瞬だが笑ったように見えた。けれどその笑顔をごまかすかのように、デヴィッドが話題を切り替える。
「なんでもない。斜面を下りたら次は登りだ。日があるうちにあの尾根までたどり着かないとやつらから逃げ切れない」
「……うん」
そうなのだ。
ふたりは雪山で遊んでいるわけではなかった。
雪の中を同じように歩く冬山登山の登山客たちの姿は何人か見かけたが、皆が雪山の景色を楽しんでいた。
けれど響とデヴィッドにこの景観を楽しんでいる余裕などない。
彼女たちを追う影がつきまとっているからだった。
南小谷駅で大糸線から降りて、国道を行き、そして脇道へと入って敵を撒くことには成功したようだった。
それでも一時的なものでしかない。
あの列車に乗っていないことはいずれわかることだった。
ルートとして考えられる国道を行けばその先の駅で待ち伏せを受けている可能性もあった。
だからこそデヴィッドはこの道を選んだのだ。そして響もついていくことに異論はなかった。
自分が逃げのびるためには——、自分の明日を掴むためには、デヴィッドの力が必要不可欠であると信じるしかないからだ。
けれど、雪に覆われた冬山での行動はかなりの制限を伴うものだった。

日が落ちれば気温が急激に下がり、体温と体力を容赦なく奪っていく。だからこそ保温と適度な栄養補給でカロリーを維持しなければ凍死の危険性があった。一般的には日が傾き始めた午後三時頃に休息の準備に入るのだが、それでは遅いかもしれない。

ただ響とデヴィッドは逃げている最中だった。

こうした休息の準備も全てデヴィッドが行い、響は風の来ない場所で体力の温存を図るのが唯一できることだった。

日が昇った七時頃から移動を始めて、午後二時には移動をやめる。一時間に最低五分ほどの休憩を入れて、状況を確認し再び行動に移す。デヴィッドがかなり慎重に行動していることが素人である響にもわかった。

このようなことを三日ほど続けてきた。

いまだ敵の姿はない。

ただ追ってくる敵の姿だけが障害となっているわけではない。

慣れない雪道。

そしてアップダウンが繰り返される行程に、日頃から陸上部で鍛えているとはいえ、疲労が静かに溜まり始めていた。敵の姿が見えないものの、なにかに追われているという精神的な疲労も重なっていた。

それ以上に障害となるのは風だった。

容赦なく吹きつける冷たい風が体温と体力を奪っていく。遮るもののない尾根の上ともなれば、身体が吹き飛ばされそうになるのをストックと自らの脚で支えなくてはならなかった。

その風が吹き始めていた。

「今日はここまでだな」

デヴィッドがそう言って岩陰にテント設営の準備をする。風向きを考え、雪を踏み固めて均し、平らにしたところに丸めていたテントを広げていく。

響はそれを見ていることしかできない。

手伝おうにもどこか足手まといになるような気がしてならない。それぐらいデヴィッドの動きはテキパキとしていた。

このテントに泊まるのはもう三度目になる。

この狭いテントの中だけは狭いながらも外よりは寒さをしのげる唯一の空間だった。夜になって外気温がマイナス一〇度を下回る中、テントの中は零度ほどで落ち着いていた。寒いことは寒いが、夜などはシェラフに潜り込むことでなんとか温かさは保つことができた。最初の頃は傍にデヴィッドの息遣いを感じて休むことに抵抗はあったものの、疲れた身体がそうしたことなど気にする暇もなく眠りへと導くのだった。

そして今も設営の終わったテントの中で響はひとり疲れた脚を休めていた。

風を遮ることのできるテントの中は暖かかった。

デヴィッドはテントの外で雪を溶かし湯を沸かしている。

まだ外は明るかったが、これ以上進むのは危険だというデヴィッドの判断だった。

正直なところ、響はほっとしていた。

既に限界近くだった。

雪に埋もれないようにと、スノーシューという装着具を足につけての歩行も普段の歩き方と異なり、使っていない筋肉を使うことになる。そして疲労した筋肉は熱くなり、重くなっていた。

シューズを脱いで足をほぐすことでなんとか気持ちが落ち着いてくる。

デヴィッドが湯気の出ているアルミ製のコッヘルを手にテントの中へと入ってくる。
「温まる」
「甘い」
差し出された液体を口に含むとそれはお汁粉だった。フリーズドライのものだろう。
口に広がった甘さが今は優しく感じられる。
デヴィッドがテントの中で地図を広げて言った。
「あと二日、冬山を動くだけの準備はしてある。だが一日に進めるのは頑張っても八時間。午後三時を回ると気温が下がりすぎて遭難の確率が一気に上がる。装備を考えると明日には山を下りたほうがいいだろう。そこから考えられるルートがこれだ」
デヴィッドが淡々と状況を説明しながら指し示すルートを見ても、響は頷くことしかできない。
雪で覆われた山の尾根を進んで最終的には登った口の反対側に当たるダムを目指し、そこから一般道を使って日本海側の町に下りるというものだった。
「今のところ敵が追ってきてる気配はない。おそらく俺たちが国道を進むものだと想定して、その周辺に網を張っているんだろう」
「逃げ切れるの？」
「今のところはな。それを飲んだら休めるうちに休んでおくといい」
「うん」
それだけ言うとデヴィッドは地図をしまい、またテントの外へと出ていこうとする。

「どこに行くの？」
「周辺を探ってくる。なにがあってもいいように靴だけは履いておくんだ」
そう言って出ていってしまった。
薄暗いテントを風が時折揺らしている。外は少しずつ暗くなり始めているようで、雪も少し舞い始めている。
デヴィッドの読みどおり、ここで休むことにして正解だったのかもしれない。
年の頃はおそらく響と同じくらいであるはずなのに、デヴィッドはその年以上の経験を重ねているように思えた。
なにがあっても冷静で、そしてすること全てに無駄がない。そして正解に近いところへと響を導いていく。
もしその選択にミスがあれば今頃は敵に捕まっていただろう。
――彼はいったい何者なのだろう。
デヴィッドの話しぶりからすると、他にも仲間がいるようだ。
ただ赤い盾が世界的な組織だとするならば、デヴィッドの仲間というのはかなり小規模なのかもしれない。ただディーヴァの血という世界を変えられるほどの強力な力を手にしようとしている以上、これもまともな組織ではないのかもしれない。
なにも知らない自分たちがそんな世界に巻き込まれようとしている。そんな不安だけが響の周囲にあった。
どんな運命が待っているのか。
普通の人間でいたいと願っていたのは響自身のはずなのに、もうそこに戻ることは叶わない。
薄々は感じていたのだ。
どこか人と違うところがあるということに。

傷の治りは子供の頃に比べてだいぶ早くなっていた。
デヴィッドには言わなかったが、ちょっとした切り傷であれば数分で消えてしまう。
ただそうした傷が治る代償として、異様な渇きを覚えるようにはなっていた。水を呑んでも癒やされない、なにか別のものを欲する渇きのようなものを。
なぜか肉が食べたい。
そう感じるのだ。
「私は、人と違うのかな……。やっぱり」
薄暗いテントの中に響の声だけが聞こえた。
そう思うようになったのは夏のあの日、怪我をした奏に輸血できなかったことがそれを自覚させるきっかけではあった。
血を分けた双子の妹なのになぜ——?
そんな疑問が周囲から聞こえてきたのだ。幼い頃はあまり気にもとめなかったことだったが、成長し、血液型と家族の関係や、一卵性双生児の類似性のことなどがわかるようになると、あのとき自分の血が輸血できなかったのはなぜなのだろうという疑問がずっと胸のうちでわだかまっていたのだ。一卵性双生児といえど血液型が違う例はあるそうだが、することも似ているし、考えることも似ている奏を見ている限り、それが当てはまるとも思えなかった。
そして響は自ら望んで奏と異なる生き方をしようと思ったのだ。
奏が個性を主張する生き方を選んでいたから、自分は個性を殺し、集団の中に溶け込めればそれでいい——と。
けれどこの血はそれを許してはくれないようだった。

特別な生き方を否応なしに歩むよう運命づけられているからだ。
自分が生まれるずっと前から。
ディーヴァという翼手の女王の娘だから。
それを受け入れるしかないのだ。
コッヘルの中のお汁粉を口へと運ぶ。
考え込んでいるうちにずいぶんと冷めてしまっていた。
けれどその甘さは変わることなく、響の心を癒やしてくれる。
このように人と同じものを食べているというのに、なにが違うというのか。
不意に遠くでなにかが破裂するような音が聞こえた。
そしてテントの外から雪を踏む音が近づいてくる。
響はデヴィッドに言われたことを思い出し、慌てて靴を履き直す。
「敵だ。急げ。トラップが反応した」
「荷物は――？」
「テントは諦める。今は持てるだけでいい。早く外に出るんだ」
そう言ってデヴィッドが響をテントの外へと追いやる。代わりに中へと入り込み、一〇秒ほどで外へと出てくる。
「行くぞ」
外を見ると遠くの青空に赤い煙がたなびいていた。発煙筒の煙だろう。デヴィッドが仕掛けたトラップだ。
その煙とは逆の方向へとデヴィッドが再び雪の中を進み始める。

山頂のほうを目指してデヴィッドが進む。
ということは、下から敵が上がってくるということなのだろう。
また破裂するような音が下のほうから聞こえてくる。
振り返れば先程よりも近いところで発煙筒の赤い煙が上がっていた。
距離が詰まっていた。
「敵ってどんな人たちなの？　何人いるの？」
「ひとりだ。だが、考えられる中で最悪なパターンになった」
最悪とはいったいなんなのか。
大勢に追われて逃げるのであれば絶望的にもなるが、相手はひとりである。
なんとか逃げおおせるのではないか。
響がそう思っていると、不意に背後から激しい爆発音が耳を叩いた。
「なに!?」
振り返ると雪煙とともにテントの布が宙に舞っていた。
「トラップを仕掛けておいた。少しは足止めになればいいが」
「でも、あれ、爆発したんじゃ……」
「そうだ。相手が人間なら確実に殺せるはずだ」
殺す——。
そんな言葉がデヴィッドの口から出てくることで響の背筋を不意に冷たいものが這い上がってくる。

デヴィッドがそんな響の様子を察知して言葉を投げる。

「ただ、俺たちを追ってきてるのは人間じゃない。あれぐらいで死ぬかどうかわからない連中だ」

「……え？」

「高校で暴れたコマツとかいただろう。あれはまだ人間だ。殺そうと思えば死んでくれる。けれど今俺たちを追ってきてるのは、シフ。ディーヴァの血から生まれた人造翼手の最終型だ。人間じゃない」

人間じゃない。

響は耳を疑った。

「雪山だというのに接近する速度が異常だったろ？」

確かにそうだ。発煙筒のトラップの距離はそれなりに離れていたはずだった。

やはり人間ではないのか。

その疑問に答えるかのように、不意に赤黒い光が目の前を過ぎると、行く手の雪が爆ぜた。

舞い上がった雪飛沫が傾き始めた陽光を受け、キラキラと光っていた。

その美しい光の中からそれは影となって不意に現れた。

フードを目深に被った、黒いマント姿の影だった。そしてその裾からは赤黒く尖った杭の先端が顔を覗かせていた。

それが雪飛沫を上げた槍の正体だった。

これがシフなのか。

その影が動こうとしたとき、乾いた音が鳴り響き、フードを被ったシフが大きくよろめいた。

見るとデヴィッドの手には銃が握られていた。

なんでそんなものを持っているのか——。
「こっちだ！」
デヴィッドが呆然と立ち尽くす響の手を引いて雪の斜面を指差す。
「足を伸ばして座れ！　一気に滑り下りる！」
言われたとおりの姿勢を取ると、デヴィッドがその背中を押しやる。
響の身体が斜面を勢いよく滑り始める。
「きゃあ！」
「教えただろう！　足を伸ばせ！　俺がコントロールする！」
滑り始めた響の背中にデヴィッドが追いつき、しっかりと脚で響の身体を挟み込む。タンデムの尻セードだ。
そしてその速さは徐々に加速し、まるで自分自身の身体をソリにでもしているかのようだった。
響はその加速感から足をブレーキ代わりに踏ん張りたい衝動に駆られた。けれどその気配を察知したデヴィッドが、
「足をつくな！」
とすぐに警告するのだ。
デヴィッドは進行方向を響を挟み込んだ脚と手にしたストックをブレーキ代わりにうまく使って荷重を制御し、滑りやすい斜面を選んで滑走させていく。
目の前には雪に覆われた森があった。
このまま行けば木に激突する。
「俺を信じろ」

背後からデヴィッドの声がする。
響は全てをデヴィッドに託すしかない。そう思い、しっかりと目を閉じた。
身体が左右に振られる。
不意にブレーキがかかったのはストックを使ったからだろう。
その回数が次第に増している。
大きく体重が左右に振られ、そして背後で雪の爆ぜる音が聞こえる。
そこに銃声が混じった。
デヴィッドが滑り下りながら、背後に向けて銃を発射しているのだ。
響がうっすらと目を開くと、左右を一瞬で森の木々が流れていった。
赤黒い光が通り過ぎると雪飛沫が舞って響たちの身体を叩く。
「歯を食いしばって、しっかり身体を縮めろ!」
「え!?」
デヴィッドの声に響が反射的に自分自身の身体を抱くように身体を縮めると同時に、その身体が横へと転がり出す。
滑るのではなく転がり始めていた。
そして不意に身体が宙へと放り出される。
見れば斜面が消えていた。
雪に覆われた田園のようなものが見えていた。
ほんのわずかだが段差の下へと落下し、深く積もった雪の上に身体が埋もれた。

「……く」
身体が思うように動かない。
響の腕が掴まれて強引に引き上げられる。
デヴィッドか。
そう思い、顔を上げるとそこには黒いフードをかぶった冷たい仮面のようなものがあった。
シフだ。
声が上ずる。
悲鳴を上げようとするがそれが出ない。
冷たい仮面の目の部分にはサングラスのようなバイザーがあり、奥の表情は見て取れない。そしてその反応もまるでロボットのようで、響の顔を見つめてその正体を確かめるように動きを止めていた。
そのバイザーが轟音とともに跳ね上がり、響の腕が振りほどかれる。
見ればデヴィッドが銃を構えてこちらを向いている。
デヴィッドがシフの頭を撃ったのだ。
「逃げろ！」
「でも……」
「やつは死んじゃいない！」
その声に背中を押されたように、深い雪に脚を取られながら、響が進み始める。だが、思うように前へと進めない。
背後で雪の動く気配がした。

シフが立ち上がったのだ。
続けざまに銃声がする。デヴィッドがシフに向けて銃を連射しているのだ。立ち上がったばかりのシフが踊るように揺れて、動きを止める。
デヴィッドは弾倉がカラになると、取り出した弾丸を直接排莢口から弾倉をねじ入れ腰を落として狙いを定める。
ひときわ大きな発射音がした。
その弾丸が命中すると、シフの肩から先が大きく爆ぜて、向こう側の景色が覗く。
まるで爆発だった。
ぐらりとシフの体が揺れて雪の上に倒れていく。
「倒したの？」
「イグナイター。対翼手用の弾丸だ」
デヴィッドが銃を雪の上へと放り出す。
「あれを使うと、銃がガタガタになるのが欠点だ。行くぞ」
「もう大丈夫なの？」
「ああ。俺が確認した追っ手はあいつだけのはずだ」
デヴィッドの顔に疲労の色が浮かんでいた。
無理もない。短い時間だったとはいえ、命のやり取りをしていたのだ。
響はまだ目の前の現実が受け入れ切れないでいた。
あたりは何事もなかったかのように静けさを取り戻していた。

飛び散った雪がキラキラと陽の光にきらめいている。
「このまま行こう。運が良かった。偶然だが田畑があるところに出られたってことは人が近くに住んでる可能性がある。誰もいなかったとしても屋根があれば――」
そこまでデヴィッドが言ったときだった。
デヴィッドの体が揺れていた。
見ると、赤黒い杭がデヴィッドを貫き、鳩尾あたりから生えていた。
響は我が目を疑った。
デヴィッドの背後で、体半分を吹き飛ばされたはずのシフが、そのままの姿で起き上がろうとしていた。傷口が蠢き再生を始めているのだ。
不死の血を持つ翼手。
造られた翼手とはいえ、その属性は失っていない。
だが目の前で鳩尾を赤黒い杭で貫かれたデヴィッドは不死ではない。
人間だ。
デヴィッドの大きく見開かれた青い目が光を失い、わずかに揺れた。
「デヴィッド！」
その名を響が叫んだ。
倒れたデヴィッドの体が雪の中へと沈んでいく。
その背中から生えた杭を響が掴んだ。

「抜けて……」
歯を食いしばり、滑る杭を抜き取ろうと力を込める。
風を切り裂く音が聞こえ、その瞬間、響の肩が大きく揺れて後ろへと投げ出された。
肩が焼けるように熱かった。
見れば響の肩からもデヴィッドの体を貫いた赤黒い杭が突き刺さっていた。
シフが右腕を前へと突き出していた。その手の先から赤黒い杭が新たに生えてくる。
鮮血が雪を赤く染めていく。
初めての経験だった。
そして死を恐怖した。
自分も殺されるのか。
響の身体の中に熱いなにかが溢れてくる。
渇き。
そして、飢え。
そのときデヴィッドの声が聞こえてきた。
「諦めるな」
消えそうな声だった。
幻聴だったかもしれない。
前のめりに倒れているデヴィッドへと響が視線を向ける。

青い目が響を見ていた。
観察するような目ではない。
温かく、それでいて憐れむような視線だった。
「……」
デヴィッドの唇が動いた。
だがその声は声にならずに、雪の中へと埋もれていく。
「デヴィッド！」
いつの間にかシフが立ち上がり、響たちのほうへと近づいてくる。その体は先程よりも再生が進んでいた。
「なんで――、なんで私が――、私たちがこんなところで――」
シフは答えない。
機械のように響とデヴィッドの元へと近づいてくる。
そして雪の中に倒れているデヴィッドの傍らで足を止めると右腕から生えた赤黒い杭を下へと向けた。
狙いはデヴィッドの心臓のあたりだ。
「やめて！」
響の嘆願でシフが止まるようなことはない。
人造の翼手であり、戦うために造られた目の前のシフに意思はないからだ。
シフの手が狙いを定める。
なにかが響の頭の中で弾けた。

響の身体がこれまでにないほど熱くなった。燃えるほどに。
逃れられない現実に抗おうとする響の心が生んだ、熱——、激しいまでの怒りだった。
その熱が痛みを消し、そして響の身体を突き動かす。
響の身体が雪の上を跳ねた。
それは人間には成し遂げられない高さと速さだった。
響の手が肩から生えた杭を引き抜き、己が血の滴るそれをシフの再生しかけた傷口へと振り下ろす。
ズブリという感触が響の手から伝わってきた。
硬いものが肉を貫く感触。やがて硬い骨にぶつかりその侵入がそこで止まり、そのままシフを雪の上へと押し倒す形となった。
一瞬、シフが動きを止める。
自らの体に起きた異変を確かめるように、自らの体を踏みつける響を見上げていた。
シフが見たものは赤い瞳だった。
燃えるような、熱を持った、翼手の女王の瞳だ。
それを認められたかどうかは定かではない。
そうなる前にシフの体に突き立てられた杭から、シフの血が赤黒い結晶となって全身に広がっていく。
響の血。
それがシフの血を喰らい、殺しているのだ。
ピキピキと雪原に血が結晶化していく音が広がっていく。

そしてその音が止んだとき、恐るべき追跡者は完全に彫像のようにその動きを止めていた。
響はその彫像の上で大きく肩で息をしていた。
空いた傷口から流れ出る血が次第に小さくなっていく。
見れば、その傷口の肉が盛り上がり、凄まじい速さで塞がっていく。
「なにが――」
「……これで、安心だ」
か細い声が聞こえてきた。
デヴィッドの声だ。
まだ息がある。
響が倒れているデヴィッドの元へと駆け寄り、体を仰向けに返してその顔を覗き込む。
死相が現れていた。
大量の血が体の下の雪を赤く染めている。
「大丈夫!?　すぐにお医者さん呼ぶから!」
「沖縄だ」
「……しゃべらないで!」
「そこに、もうひとりのデヴィッドが……、いる」
「いいから!」
「……もう俺はここで、終わる……」

「やめて！」
響がデヴィッドの傷口を押さえる。
だが溢れ出る血が止まることはない。
デヴィッドの口から弱々しい声が漏れる。
「……ごめんな。……あんとき、なにもできなくて……」
「いいから黙って！」
「……俺が、奏を、怪我させたから……」
「……アダム、なの？」
響の中で、目の前に倒れている黒髪のデヴィッドに、幼き日の幼馴染の影が重なっていく。
その問いかけにデヴィッドは答えなかった。
響がデヴィッドの心臓の上に耳を当てる。
鼓動は聞こえなかった。
「なんで——！」
やり場のない怒りをぶつけるように傍の雪を叩いた。
その手が赤く濡れた。
デヴィッドの血だった。
「血……。そうだ、私の血……」
響は自らの傷が再生したことを思い出した。

デヴィッドの鳩尾から突き出たシフの杭で自らの手を傷つける。
その傷口から赤い血が流れ出す。
それを口に含むと、響はデヴィッドの唇に己の唇を重ねた。
燃えるような女王の血は、命の灯火を失いかけた若者の凍えた体へと分け入っていく。
そしてその熱で凍えた体に火をつけていくのだ。
女王の血の契約によって誕生する従者に新たな命を与えるのだ。
不意にデヴィッドの体が大きく跳ね上がる。
「デヴィッド！」
響がデヴィッドの名を呼んだ。
デヴィッドの体が激しく痙攣していた。
その震えを止めるように響がデヴィッドの体の上に自らの身体を重ねる。
「止まって！　お願い！」
デヴィッドの体から逃げ出そうとする命を捕まえるかのように、必死にその体を響が押さえつけていた。
どうなるかなど考えてはいない。
ただ目の前の命が助かってほしい。
信じた背中がもう一度戻ってきてほしい。
それだけだった。

どれぐらい時間が経っただろうか。
あたりは闇に呑まれ、月明かりが雪を白く照らしていた。
響の身体もすっかりと冷え切っていた。
通常の人間であればそのまま体温を失って凍え死んでも不思議ではない。
けれど響の身体は熱かった。
目覚めたばかりの女王の血が、溢れ出る不死の血が、それを許さないのだ。
横たわるデヴィッドの体の震えはいつしか収まり、そしてその目が静かに開いた。
青い目が、覗き込む赤い瞳を見上げていた。
「……デヴィッド」
「生きてるんだな、俺は」
「うん」
「……俺はお前のシュヴァリエになったのか」
響は答えられなかった。その言葉がなにを意味するのか、よくわからなかったからだった。
今はデヴィッドが目の前で息を吹き返した現実だけを喜びたかった。
「女王陛下万歳、か」
デヴィッドの顔に弱々しい微笑みが冷たい月明かりに照らされて白く浮かび上がる。
その体を響が強く抱きしめた。
己の永遠の従者となるシュヴァリエの誕生を祝福するかのように——。

第三章 『明日』



「走れ」
静かな声が響の背中を押した。
一気に風になる。
雪山を下りてから、こうしてアスファルトの上を走るのは、もう何度目となるのだろう。
今も背後から赤い盾の男たちの足音が聞こえていた。
ひとり、いや、ふたり――。
響の疑問にデヴィッドが落ち着いた声で答える。
「四人。脇道から先回りしようとしている人間がひとり。合計五人」
「そんなに？」
「処理してくる」
「え？」
「このまま進め。処理してくる」
それだけ言うと前を走るデヴィッドの姿が響の視界から青い光となって消える。
背後から男の悲鳴が四つ上がった。そして少し遅れて別の方向からも悲鳴が聞こえたかと思うと、その刹那、響の隣にデヴィッドの姿が現れる。

「終わった」

その声に、響が脚を緩めた。

振り返ると、男が四人、アスファルトの上に倒れていた。姿の見えないひとりも同じように倒れているのだろう。

「……殺したの？」

「いや。あれはただの人間、赤い盾に雇われたエージェントだろう。殺す必要はない」

赤い盾のエージェントならば、相手は荒事のプロだろう。それを複数相手にしておきながら、このデヴィッドはまだ少年の面影の残る横顔でこともなげにそんなことを言うのだ。

響はその顔をまともに見ることができなくなっていた。

――変わってしまったんだ。

もう一週間ほど前のことになるだろうか。

北アルプスの山中で、デヴィッドは一度死んだ。――いや、死にかけた。

シフと呼ばれる人工翼手と戦い、致命傷を腹部に受けたのだ。

だが響の血を与えたことで、デヴィッドは蘇った。人間としてではなく、女王に仕える翼手としてである。

見た目には変わったところは見られない。

ただデヴィッドは眠らなくなった。食べることも止めていた。

そして、追ってくる敵との戦いを繰り返す中、デヴィッドは大怪我を負ってもすぐに治癒し、人間を超えた力と素

早さで敵を排除していく。
翼手の女王の血である、響のそれを、体が受け入れるまでのしばらくの間、デヴィッドは激しい痛みと渇きに顔を歪めながら雪山を歩いていたが、山を下り、この町に入った頃からそうした姿を見せなくなっていた。
もう人間ではない。
響のシュヴァリエとなったのだ。
それがどういうことなのか響にはまだ実感がない。デヴィッドから受けた説明では、シュヴァリエは翼手の女王を守るためにその身を捧げ、時には剣に、時には盾となる存在なのだという。
そして捧げるのは体だけではない。彼らの明日をも、捧げてしまうのだ。守るべき女王がいる限り、永遠に——。

——私が、彼の全てを奪ってしまった。

「気にするな」
デヴィッドの声に響が顔を上げる。
響の感情の機微を見透かすような青い目がそこにはあった。
そこは彼がシュヴァリエとなる前から変わっていない。
そしてその口調も響に仕えている割には上からの命令口調でもあった。そこも変わっていない。
常に前を歩くところもだ。
ただ、そうしたひとつひとつのことに響は安堵感を覚えるのも事実だった。

変わってほしくないこともあるのだ。
今はデヴィッドと名乗っているが、彼が響の幼馴染のアダムなのかもしれない。本人はそれについて答えてはいない。そして響もあのときからその答えを聞くことはしなかった。
デヴィッドはそんな響の様子に気づいているのか、気づいていないのか、答えを顔に浮かべることなく淡々と先のことを話していく。
「ここまで追っ手が来ている以上、俺たちの動きは完全に掴まれているのかもしれない」
「……どうするの？」
「そうだな。今のうちに服を変えたほうがいい。その後、予定したルートで沖縄に入る」
「フェリーで？」
「ああ。二日に一度しか出ないフェリーだ。今日の夜を逃せば、また二日逃げ続けなくてはならない。もっとも、今の俺とお前を簡単に止めることはできないだろうけどな」
実際にそうだった。
響たちを見つけては追いすがる赤い盾の追っ手たちを、デヴィッドは赤子の手をひねるかのように簡単に倒していくのだ。
近くの量販店で新しく服を買い替え、また違う自分となった。デヴィッドも同様だ。
「よし。お互い別人に生まれ変わったな」
一度、人間としての死を迎え、そして今は翼手の眷属に生まれ変わった男が言う、最高の皮肉だった。
「でも、今だから言える。自分がシュヴァリエになって初めてわかったよ。これだけの力があるのだから、世界をこ

の手に収めてみたいと思うようになるわけだ……。女王のために――」

デヴィッドの青い目が響の目を捉えた。

「お前がそれを望むなら――」

「いらない。世界なんか」

世界など手に入れてどうなるというのか。

響が一番欲しいものは、もう過去の中にしか存在していない。

音無響として、血の繋がらない養父の宮城カイの「人間の」娘であったあの瞬間が、一番幸せであったのではないか。

デヴィッドを死の淵から蘇らせた、翼手の女王の血。それを持つことに気づかされてしまった今、戻ることはできないのだ。今この気持ちが分かち合えるのは双子の妹である奏しかいない。同じ、特別な血を持つ奏しか、この気持ちを分かち合うことはできないだろう。

「奏に会いたい」

「会えるさ。沖縄にさえ行ければ」

「沖縄になにがあるの?」

「はじまりの場所。守るべきものがある場所」

「私がそれを守るの?」

「わからない。もしかすると、戦わなくちゃならないかもしれない」

――戦う?

なにと戦うというのか。

今は赤い盾という組織からこうして逃げているではないか。この組織の他にも戦わなくてはならない相手がいるというのだろうか。

「もうすぐ出航の時間だ。急ぐぞ」

「間に合うの？」

「こうすれば間に合う」

そう言ってデヴィッドは響の腰に腕を回した。

「ちょっと――」

「しっかり掴まってるんだ」

デヴィッドは響の膝を持ち上げ、いわゆるお姫様抱っこのような形で抱え上げると、一気に宙へと跳んだ。

不意の加速に耐えきれず、響はデヴィッドの首に抱きつくしかなかった。

ビルの上から上へとデヴィッドは跳んだ。

足元には鹿児島の町の夜景があった。

そしてその向かう先には海が見える。暗い海だ。

「世界がいらないと言ったよな」

「え？」

デヴィッドは先ほどの話のことを言っているのだろう。

「俺も世界はいらない。シュヴァリエになってから望むもの――、それはたったひとつだけだからな」

「なんなの、それ」

デヴィッドはそれには答えなかった。

答える前に、デヴィッドは港へと下り立ち、夜間飛行は終わりを迎えていた。

この鹿児島新港からフェリーで沖縄へと向かうのだ。ここからいくつかの島へと立ち寄りながら片道二五時間もかかるという。

これが目的地へと向かうまでの最後の関門でもあった。船が出てしまえばあとは沖縄で目的の場所へと向かうだけなのだ。そしてその間は久しぶりにゆっくりと休むことができるだろう。そのためにデヴィッドは赤い盾を煙に巻くいくつかの偽装をしていた。偽名でのチケット購入はもとより、福岡空港から翌朝出る航空機をそれとなくデヴィッドと響とわかるような形で予約してある。他にもいくつかの偽装をしているのだろう。

デヴィッドが船内を散策し、赤い盾の追っ手が乗船していないかを探っている間、響はひとり、客室でデヴィッドが戻ってくるのを待っていた。

——あと少し。

沖縄に行ってなにが変わるのかはわからない。

望むものがもう二度と手に入らない以上、自分はなにを得ればいいのだろうか。

その答えを求めるように外に視線を向けても、その目に映るのは暗い海だけだった。

そしてその手前のガラスに自分が映り込む。

髪の毛がくしゃくしゃだった。

見れば、買ったばかりのシャツにもサイズを示す透明なシールがついたままになっている。それを慌ててはがしてポケットにねじ込む。

自分には余裕がない。
そしてなにもできない。
ただ、翼手の女王の血をこの身体に宿しているだけだ。
実感はない。
デヴィッドの言うような不老不死であることも、超人的なところもなにひとつ見当たらない。
傷の治りが早いことくらいが思い当たることかもしれない。
そして襲ってきたあのシフという化け物じみた追っ手の血を一瞬のうちに石のように変えてしまったこと、デヴィッドをシュヴァリエに生まれ変わらせてしまったことがなければ、なにひとつ信じられなかっただろう——。
進めば進むほど不安しか見えない。
希望を感じられない。
ほんの少し前までは、家を出て、この広い世界の中でひとりになっても生きていけると信じていた自分が、本当はとても小さな存在であることに今頃気づかされた気分だ。
世界は広いだけではない。
海のような深さもあるのだ。
その底に沈んでいくのを感じずにはいられなかった。
暗い、暗い、海の底に——。

予定外

「僕に無断でシフを使いましたね？」

背後から声をかけられ、コリンズの手からグラスが滑り落ちる。

甲高い音を立てて、グラスが砕け散った。その中にあった琥珀色の液体が床へと広がっていく。

「あなたの好きなモルトを床にごちそうですか。それとも、床に這いつくばって、これからそれを舐めてみせてくれるのですか？」

コリンズは背後に立つ男の顔を見られなかった。

恐ろしく冷たい目でこちらを見ているのがわかっていたからだ。

声は優しげだが、そこに毒があった。死に至るほどの毒が。

「シフを使ったのは、一刻も早く確かめたかったからだ。あの娘が、本物かどうかを——」

「それは僕が決めることです。しかもそのシフを一体失ったばかりか、あなたのせいで彼女に余計な戦力がついてしまった」

コリンズの体が小刻みに震えていた。

「失った？　シフをかね？」

「はい」

「するとあの娘は『S』型のキャリアーということか。ははは、これは吉報じゃないか。これで『ボルマン文書』の

証明ができるぞ。君も完全体になれる」
「それはどうも」
「どうした？　浮かない顔をしているな」
「敵にシュヴァリエが誕生してしまいましたので」
「そんなもの、シフを使って倒せばいいだろう。『D』型のサンプルはいくらでもあるんだ。それより『S』型だ。シフの死体は？　いや、結晶は回収したのかね」
「回収された結晶は後ほど送られてきます」
「ははは。これから忙しくなるぞ。『S』型の娘はどうする？　捕獲するのかね？」
「彼女は僕たちに仇為す血を持った、新しい女王のひとりです。ですから――」
男の青い目に冷たい光があった。
「彼女を殺します」

「起きろ」

その声に、響は目を覚ました。

いつしか眠ってしまったのか、見ると、窓の外は既に明るくなっていた。

「なにか、あったの？　赤い盾が追ってきた？」

「いや。なにもない。どうやら完全に撒くことができたようだ」

「そう」

響は安堵の息を漏らした。よく眠れたことで少し気持ちが軽くなっている気もした。

「デヴィッドは――」

よく眠れたの？

そう尋ねようとして言葉を飲み込んだ。

「いいさ。俺は眠らない」

また心を読まれたように、デヴィッドから返事が戻ってくる。

「ごめんなさい」

「気にするな。俺自身が人間でなくなったことなんて、あまり気にしちゃいない。俺はずっと前から、人間らしい生き方なんてしてこなかったしな」

どういう意味なのだろう。
またそれが響の顔に表れていたのか、デヴィッドが話し始めた。
「子供の頃から、俺の生き方は決められてたんだ。たったひとりの人を守るための盾となれるようにってね……。まだ年端もいかない子供を雪山に置き去りにしたり、人もいない砂漠に落としたり、海の真ん中に取り残されたり——。ありとあらゆるサバイバルを体験させられたよ」
デヴィッドはどこか遠い過去を語るかのように淡々とした口調で言った。
「最初に覚えさせられたのは、道具を作ることだった。石と石をぶつけて、硬い石と軟らかい石とがあることを教えられる。そして石の割れ方と剥がれ方から、薄く剥がれる硬い石をナイフとして磨いていくんだ」
「原始時代の人みたいに？」
「俺たちには手がある。その手こそが最強の道具であることを徹底的に叩き込まれるんだ。子供の頃は興味本位に、楽しい遊びだと思ってたよ。火をおこすこともそうだったし、飲み水を作ることもそうだった。身の回りの道具が使えるときは、本当に楽しい遊びだと思ってやっていたんだ」
デヴィッドは懐かしそうにそれを語っていた。
飲み水を作るなら、一般的に簡易な濾過装置を作るのがもっとも簡単に飲み水を得る手段であり、自分が着ている衣類、小石、砂といったものに、炭があれば更によい。これを順番にボトルなどに詰めていき、上から雨水などを入れ、不純物が取り除かれた水を利用するのだ。
ただこの水をそのまま呑むと体を壊すことがある。
そこで水を煮沸するための火が必要となるのだ。

火をおこすにはいくつかの方法がある。
最初に作った石のナイフを使って適当な木などを選んで、火をおこす道具を作るのだ。麻の繊維や蒲(がま)の穂などから作った火口に火打ち石などで火をつけて、大きく育てていく方法がある。他にはもみきり式という、木の棒を火切り板の上で体重をかけて回転させて起こる摩擦熱で種火を作り、それを火口に引火させて育てていく方法だ。もちろん、ライターやマッチなどの道具があればそれを使うのが時間の節約になる。レンズなども太陽の光を集めて火をおこす道具になる。
火があれば、水を沸かすことも、更に捕らえた魚などを焼くこともできた。
焼くという行為は、余計な寄生虫や菌などを熱によって処理するために必要な工程でもあった。
人間が生活していく中で普通に行っていることは、こうした必要不可欠な行為の進化を利用しているだけなのだ。
このようなサバイバルの技術の意味を知って身につけることで、生きるためのバリエーションが増えていくのだ。
デヴィッドはそれを身につけていた。
おそらくこうした原始的なサバイバル技術から、現代社会の中において金銭を得る方法も一種のサバイバル技術と言えるだろう。それも身につけているに違いない。
「いろんなことを覚えるのは楽しい時間だった。死にかけたことも何度もあったけど、ギリギリのところまで親父は手を差し伸べなかった。差し伸べられたところで、途中から取ることもなくなったけどな」
親父——と言って懐かしそうな顔でデヴィッドが笑った。
そうだ。デヴィッドも人の子なのだ。考えてみれば当たり前のことなのだが、父親もいれば母親もいるのだ。人間である限り——。

「どんなご両親だったの？」
「母さんは、ずっと研究ばかりしてる人で、実際のところ、一年のうちで会うのって数えるほどしかなかった。最後に会ったのも、もう五年も前の話だ」
「そんなに？」
「ああ。俺も父さんの命令でいろんなところに行かされてたからな」
デヴィッドが遠いところを見るような目をした。
「頑固で、口下手で——、生き方が下手な父親だったよ。息子をこんなことに巻き込んだからな」
「ごめん」
「なんでお前が謝る必要がある？　事態がこうなることは時間の問題だった。俺がそのタイミングに間に合ったからこそ、こうして一緒にいるんだ。シュヴァリエになったことは計算外だったけどな」
「ごめん」
「謝るな。それにシュヴァリエになったのは俺のような人間にとって都合のいい体になっただけだ。眠くならない。食べなくてもいい。そして人を超えた力を手に入れた。……ただ時折、どうしようない渇きを覚えることはある」
「渇き？」
「吸血衝動」
それを聞いて響は言葉が出なかった。
翼手とは、吸血生物であった。
そしてその頂点とも言えるべき場所に自分は立っている。だが未だに吸血衝動のようなものを覚えたことは一度も

ない。
「お前たちにはきっと特別な血清のようなものが与えられていたはずだ。そうでなければここまで成長していないかもしれないだろうし」
響には思い当たることはあった。
月に一度程度だったが、定期的に検査を受けて、薬のようなものを飲んではいた。あれがそうなのだろうか。子供の頃からカイに連れられて行っていたし、薬もカイが持ってきたものだから、あまり気にしたことはなかった。
「あなたがそれに耐えられなくなったら、どうしてるの？」
「そうだな。ウサギかネズミでも捕まえるさ」
響はデヴィッドがそれらから血を啜る姿があまり想像できなかった。
「直接行くわけじゃない。これでも元文明的な人間様だからな」
「血が欲しかったりするなんて、翼手って人間よりもすごく強そうなのに、なんだか原始的」
「強さがヒエラルキーの基準なら、ゴリラのほうが圧倒的に上だろうな」
「そうね」
「ただ、翼手は個体数が圧倒的に少ない。俺が聞かされている限り、ディーヴァと音無小夜以外の個体は確認されていない。生物的な観点から捉えるなら、ふたりの母体であるＳＡＹＡという存在がある以上、もう少し個体数は存在するんだろうけどな」
「世界のどこかにあなたたちの知らない翼手がいるということ？」
「たぶん。会ったことはないけどな。もしかしたらそのＳＡＹＡのシュヴァリエだってまだ生きているのかもしれな

い」
「女王がいなくなってもシュヴァリエは残るの？」
「死ぬ理由がない。自分から死を選択しない限り」
「不老不死なのに、死ぬの？」
「相手の女王の血があれば——。シュヴァリエを動かしている原動力は、その体に流れる血だ。それをある程度失えば、シュヴァリエとはいえ死ぬかもしれない。だから、血を得ることを拒めば、ゆっくりと枯れていくように死ねるのかもしれない」
「……死んじゃうんだ」
「あくまでも仮定の話だけどな。俺もいずれ死ぬかもしれない。けれど今はお前がいる。女王がいる限り、その身を守らなくちゃならない。いや、それは義務ではなく、願望だ。守らなくちゃいけないんじゃなく、守りたい。そう思ってる」
デヴィッドの青い目が正面から響を見つめていた。
思わずその視線を逸らす。
「顔が赤いぞ」
「だって——」
まるで愛の告白のようだった。
通常の男女ならばの話だが。
ただこれは全ての枠を超えた、女王と従者の契りなのだ。

翼手という生物的な本能がそう思わせるだけなのかもしれない。
全ては、種の保存のために作られたシステムだ。
「この先、私たちどうなるの？」
「そうだな。考える時間だけなら、他の連中よりもあるんだろうな」
「……そうだね」
窓の外に目を向けるとオレンジ色に輝く夕日に照らされた海が広がっていた。
フェリーはゆっくりと、それでも確実にふたりの目的地である沖縄を目指して進んでいた。
この先になにがあるのか。どうなるのかの答えがあるに違いない。
眠っていたためにいくつの島を越えたのかはわからない。
暗くなってから出港し、丸一日かかるはずだからあと数時間で沖縄には着くのだろう。
もしかすると上に登れば北端が見えているのかもしれない。
「私、結構寝てたの？」
「二〇時間くらいか」
「そんなに？」
「普段はそんなに眠らないのか？」
「うん」
「……翼手の女王には休眠期があると聞いたことがある」
「私が眠いのもそれなの？」

「わからない。俺はそっちの専門家じゃないからな。ただお前になにかあったら俺が体を張って守るだけだ」
そう言われて、響は、北アルプスで、雪の上を自らの血で染めたデヴィッドの姿を思い出してしまう。
あのままデヴィッドが死んでいたとしたら——。
——私は、無力だ。
「ねえ」
響がデヴィッドを強い光を宿した目で見つめた。
「なんだ？」
「私に、戦い方を教えて」
「必要ない」
「なんで？」
「俺が守る。それで十分だ」
「十分じゃない。もう私はあなたが傷つくのを——、私のためだからといって傷ついていくのを黙って見ていたくはないの。なんにもできないけど……、私は……」
黙り込む響をデヴィッドは静かに見つめていた。
その青い目は響の気持ちが全て見えていた。
守りたい。
そう言いたいのだろう。
けれどそうする術を響は持っていない。だから口に出せないでいるのだ。

デヴィッドが静かに口を開いた。
「この前、シフの血がお前の血で結晶化したことでわかった。お前の血はディーヴァの血を持つ翼手にとって毒となるようだ。それはやつらと戦っていく上で最高の武器になる。俺の銃やナイフ、シュヴァリエとして得た能力よりもだ」
そう言ってデヴィッドは懐から一本の鞘に収まったナイフを取り出し、テーブルの上に置いた。刃渡り一〇センチほどの小ぶりなシースナイフだ。
「小夜は翼手と戦ったとき、自分の血を塗ったサムライソードを使ったそうだ」
「サムライ……？　日本刀のこと？」
「ああ。お前がそれを使えるとは思えない。だからこのナイフでいいだろう。自分の血をこのナイフに塗り、翼手に突き立てれば勝負はつく」
響は目の前に置かれたシースナイフを見つめる。
よく研がれた頑丈そうな刃がシースから抜かれ、窓から入る光を静かに反射させていた。
「手を出してみろ」
「手？」
響がすっと差し出した手に向けてデヴィッドがシースナイフを握った手を動かしたように見えた。
なにが起きたのか。そう響が思っていると、手の甲に赤い粒が盛り上がる。
血だった。
その粒がひとつふたつと盛り上がり、そして繋がって朱線となって手の甲にあふれていく。
斬られたのだ。

傷口が次第に痛みと熱を持ち始めていた。
シュヴァリエの神速の動きは響の目にも捉えられなかった。
「なんで……」
「俺は運がよかったらしい」
「え？」
「俺がシュヴァリエになれたのはあの危機的状況の中で、お前の血が一時的に女王の血としての機能を果したからなんだろう。もしちゃんとお前が血に目覚めていれば、その傷は一瞬で治るはずだ」
血はまだ溢れ、そしてテーブルの上に赤い模様を作っていく。
「ここまで来る間に観察はしていたが、シュヴァリエである俺の動きにもついてこられない。肉体もまだ人間のままだ。血に目覚めない限り、戦うことはできない」
「でも、それじゃ私はあなたを――」
響がまた言葉を飲み込んだ。
「俺を守りたい。そう言いたいのか？」
響はデヴィッドの青い目を見つめ、そして頷き、そして言った。
「あなたを……、もう失いたくない」
「戦う覚悟はあるんだな」
響は静かに、深く頷いた。
「そうか」

デヴィッドはそう言うと、シースナイフをおもむろに自らの手に突き立てて傷を作った。
響は思わず目を見開く。
「なにを……？」
「俺を信じろ」
デヴィッドはそう言って、自らの血を口に含み、もう一方の手で響の顎を持ち上げる。
青い目が響の目を見つめていた。
響もその目を見返す。
優しさと、悲しさが混じったような光が青い目の奥にあった。
その目が近づき、そして響の唇にそっとデヴィッドの唇が触れると、その唇を割って熱い液体が響の中へと流れ込む。
「――！」
気味悪さよりも先に、甘さを感じていた。
――これを求めていたのかもしれない。
響の喉が鳴った。
その瞬間、体中を熱が走り抜けた。
血が一斉に目覚めていく。
船を叩く波の音。
船のエンジンが回る音。
人の声。足音。衣擦れ。吐息に至るまで、意識を向ければあらゆる音が耳に飛び込んでくる。

そして手の甲の傷口から熱が消えていくのを感じていた。
すっとデヴィッドの唇が離れた。
「目覚めの血だ。シュヴァリエの血は、女王を眠りから解き放つ」
「私は――」
手の甲を見ると傷が消えていた。
「お前の赤い瞳がその証だ」
そう言われて、響は鏡に向かうとそれを覗き込む。
赤い瞳がそこにはあった。
それが次第に薄れ、元の色へと戻っていく。
「お前は女王になった」
響の背中にデヴィッドの声が届く。
「俺の女王に」
「……初めてだったの」
「ん?」
響が自らの唇を指でそっと触った。
「さっきの……。ファーストキスだった」
デヴィッドはしばらく返事ができないでいた。そしてようやく、
「お前は、ときどき俺の予想を超えることを言うんだな。だがあれはファーストキスじゃない」

「え？」
「お前が俺をシュヴァリエにしただろう？　あれがファーストキスだ」
「あ……」
響は自分からしたことを思い出し、顔が熱くなるのを感じていた。
あのときは無我夢中でしたことだっただけに、自分がしたことを忘れてしまっていたようだ。
——でも、本当の意味でのキスは——。
「やっぱり今のがファーストキスだよ」
「本当にわけがわからないな」
そう言ってデヴィッドは肩をすくめた。

「また抜かれるの？」
繊細な刺繍のほどこされたクロス張りのソファの上で奏が不満そうに頬を膨らませる。
アダムが微笑み、頭を下げ、検査服を奏へと差し出した。
「ごめんよ。君が特別な存在だから、細かく体調を管理していかないといけないんだ」
「美味しいお肉食べられるからいいけど、そのうちひからびちゃったりしない？　私のおばあちゃんみたいに」
「おばあちゃん？」
「だってお母さんのディーヴァのお母さんはミイラだったんでしょう？　それって血を抜かれすぎたからとかだったらやだなぁって思って」
「それは違うと思うけど」
「そうかなあ。でも私とお姉ちゃんみたいに珍しい血を持ってるなら、みんな同じように調べようとしたんじゃない？　人体実験とかでさ」
アダムは答えなかった。
「当たっちゃった？　ま、いいけどね。カイに言われてうちまでお医者さんが来て血液検査とかやらされてたし。あれってさ、そういうことだったんだなぁって納得いったし」
「怖いね、君って」

「そう？　ふつーだと思うよ」
「では、検査をお願いできるかな。たぶんこれが最後の検査だから」
「最後？」
「もうすぐこの船は目的地の近くまで到着するから。そうしたら上陸だよ」
「やっと船から出られるんだ。それ、どこ？」
「オキナワ」
「え？」
沖縄は奏にとって忘れられない場所のひとつだ。
奏の気持ちが上を向く。
そして立ち上がるとアダムの背中を部屋の外へと押していく。
「どうしたの？」
「レディが着替えるんだから、部屋から出てって。あと、監視カメラも切っておくこと！　見るならお金取るからね！」
そう言って奏が部屋の天井にあるライトに目を向け指差した。その光の輪の中に小さなドーム型のレンズがつけられている。普通ならまず気づくことはないだろう、部屋中全てを捉えることができる広角レンズのついた監視カメラだった。
「怖いね。本当に」
肩をすくめてアダムが部屋を出ていった。
ひとりとなり、奏が大きく深呼吸する。

内心ドキドキだった。
平気な振りをしているのがである。
奏は度胸が据わっているとか、あっさりしているとかヨコチやケンジなどの友人たちから言われていた。けれどそれは奏が会得した身を守るための術を駆使しているだけだった。考えているのだ。どうすれば人が自分を自分として見てくれるかを。
人は群れたがる。その上で序列をつけたがる。そして都合が悪くなれば排除するために牙を剥く生き物だ。
だから人との距離を的確に測るのだ。
これは身内の人間でも同じだ。カイとだってそうだった。そして姉である響とも――。
「お姉ちゃんが一番遠いんだよなぁ」
耐えきれぬ思いが言葉となって口から漏れる。いつからかそう感じていた。
双子だから同一視されることが多かった。
服も、靴も、髪形も、子供の頃はほんとにおそろいだった。区別できなくなるからとカイが服やワインポイントの色だけは変えていたようだ。
引っ越しを繰り返すたびに双子であるということがまず注目を集め、次に比較され始める。
小学校も三年生ぐらいになると、そうしたことに慣れ始めながらも、違うということに意味を見出すようになっていった。だから奏は髪を伸ばした。一方、響はカイが一番得意なカット方法だというショートヘアを頑なに続けている。
響が優等生で聞き分けのあるいい子でいるならば、奏は劣等生でわがままな問題のある子でいようと自然と思うようになったのだ。それが自分自身の個性だからと。

人はひとりひとり違う。
双子だからといって同じ生き方をしなくちゃいけないということはない。
音無奏は、音無奏しかないのだ。
特別な血を持っているからとアダムに言われても、音無奏が別の人間に変わるわけではない。
「私は、私だもん」
奏はそうつぶやくと、スカートのファスナーを下ろし始めた。

＊＊＊

赤い盾で奏に対して行われる検査は血液検査に始まり、レントゲンからＭＲＩなどの装置を使った検査があった。
この赤い盾の本部の大型客船は大きな町だと思っていたが、最新鋭の医療技術を詰め込んだ病院までもがあるようだ。
普通の病院でやるならば検査以外の長い待ち時間があるものだが、ここでの検査は奏ひとりに対して集中的に行われるために二時間もかからずに終わってしまう。けれど、若い奏にとっては退屈な二時間でもあった。
言われるままに身体を動かし、必要な薬剤を飲まされる。
血液検査では注射針を刺されてシリンダーの中に溜まっていく赤黒い血液を見つめると、自分が生きているのだという実感がある。それと同時に自分自身の命がそこに流れていくのだという錯覚もあるのだ。
一時的な貧血症状かもしれないが。
その退屈な時間を終えて、奏は検査服のまま赤い盾本部の船内を歩いていた。

ちょっとした豪華ホテルの廊下とも思える場所を、病院の検査服を着て、足元はスリッパという奏が歩いていく。
ここには誰もいない。
いや、見てはいるのだろう。
廊下のいたるところに死角ができないよう広角の監視カメラが設置されているのを奏は知っている。
そして奏自身がこの船では最高の賓客として扱われていることも。
だから自由気ままにしているのだ。
どうせこの船から出ることはできない。
大きな豪華ホテルレベルの空間はあるものの、立ち入れない場所も多く、検査のあるとき以外、エレベーターを使うこともできない。そのため奏の寝泊まりしている客室と、船尾にあるジョエル・ゴルトシュミットの部屋とを繋ぐ廊下がここ数日間の奏の生活空間だった。海風を感じ取れる通路にすら出ることができない。
ネットも繋がらないため、外部の情報を知るのは、部屋を訪れるアダムとの会話だけだった。他のエージェントたちはほとんど姿を見かけず、話しかけても必要なこと以外は口を開かなかった。それはアダムに言われているからというよりも、奏を「翼手の女王」として見ているからなのだろう。
畏れられているのだ。
かつて先代の女王であるディーヴァと戦った経験のある者たちだから、その恐ろしさを知っているのだろう。
奏は船の中では、窓から外を眺めるか、寝るか、ジョエルの部屋で読める本を探して眺めることぐらいしかすることができなかった。
この夕映えの光が差し込む部屋、その書架に厳かに収められた幾千もの書物の中に『ジョエルの日記』の一冊があっ

た。
赤い盾創設から始まり、小夜とディーヴァを巡る戦いの記録を綴った記録書だ。
表紙には『le journal intime des JOEL』と書かれてあった。
そしてその記録は、一八三三年に「動物園」が作られたときから、一八八三年の日曜日——月日の部分が血で汚れ、読み取れたのはそれだけだ。そのページから後ろが空白のままだ。
「これが『ボルドーの日曜日』……」
アダムから聞いた話から、そのときの光景を奏は思い浮かべる。
目を閉じると、どこかから歌声が聞こえてくるようだった。
その歌声は頭の中——、深い深い記憶の中から聞こえてくるような気がしていた。
高らかな歌声。
一気に絶頂へと駆け上る詠唱。
アリアだ。

——なぜだろう……。私はこの歌を、たぶん知ってる。

奏の口からその歌が静かに流れる。歌詞はわからない。ただその旋律が自然と唇から漏れ始めるのだ。

ここは深い深い森の奥。

誰も知らない閉ざされた秘密の花園。
そこに私はいる。たったひとりで。
誰かを待って。
けれど。
やってくるのは鳥と蜘蛛。
そしてあの黒い獣だけ。
それまで私は花を摘もう。
青い青い蔓バラの花を。
あの人は気に入ってくれるかしら。
私の薔薇を。
私の歌声を。
私の赤い血を。
ふたりで世界をつくりましょう。
私とあなたのふたりの世界を。
誰にも邪魔されないふたりだけの花園を――。

この歌に歌詞などはない。
ただそんな感情が口から旋律となってほとばしるのだ。

それは奏自身の歌ではないのかもしれない。遠い遠い記憶がそれを歌わせるのだ。
こんなことは初めてだった。
なにかが起きている。
もしかしたら奏ではなく、響にかもしれない。
姉の響になにかがあれば、妹である奏にもなにかがあるのだ。
――熱い。
なにかがむくりと頭をもたげようとしている。
それは身体の奥のほうで――、いや、身体全体を巡る赤い血の中で起きているようだった。
細胞のひとつひとつが熱くなっている。
自らの身体を腕で抱きしめ、その熱を抑えようとする。
だが止まらない。
「……なに、これ……？」
「目覚め始めてるのでしょう。もうひとりの女王が」
アダムが部屋の入口にいつの間にか立っていた。
「目覚め？」
「音無響のシュヴァリエが誕生したんだ。そして女王はそのシュヴァリエの血をその身体へと受け入れ、血の契約をかわした。だから――」
「だから？」

「僕を、君のシュヴァリエにしてほしい」
「アダムを？」
そっとアダムが奏の首筋へと口づける。
「ちょっと――」
チクリとした痛みがあった。そしてそこから血が流れ出る感覚も。
奏の耳元でアダムの喉がごくりと鳴った。
――私の血を、飲んでる？
アダムが奏から離れると、その口端が血で濡れていた。それを取り出したハンカチで丁寧に拭い、アダムが微笑む。
「もうこれで、僕は君のシュヴァリエ――」
窓から差し込む光の加減だろうか。
奏にはアダムの目が赤い光を湛えたように見えていた。

「悪かったな」

「いいの。あなただったから。デヴィッドは、アダムなんでしょう？」

響がそうデヴィッドに問いかける。

一番聞きたいことだった。

幼馴染のアダム。

沖縄に住んでいた頃に、一緒によく遊んでいた金髪の癖っ毛の男の子。

奏が怪我をしたときも傍にいて泣いていた響を撫でて慰めてくれた小さな手。

ひとつ年下の青い目の男の子。

「……俺は――」

デヴィッドがなにかを言おうとしたときだった。

嫌な音がした。

「！」

響とデヴィッドが顔を上げる。

それはふたりにしか聞こえない音だったかもしれない。
いや、声か。
翼手の女王の血に目覚めた響と、そのシュヴァリエのデヴィッドだから聞こえた声。
それは同じ種族のものが漏らす、鬨の声だった。
「響！」
その名前と一緒にシースに収められたナイフが響に放られた。先ほどのものだ。
「お前は俺が守る。だが――」
「わかってる」
ふたりの間に、もう言葉はいらなかった。
血で繋がった女王と従者の間に生まれた絆に、言葉はただの添え物でしかない。
デヴィッドが青い光となって部屋の外へと飛び出すと、響もそれに続いた。

フェリーの甲板の上には夕日を眺める乗客が何人かいた。
全てがオレンジ色に染まる、美しい景色だった。
静かなその情景を崩すような音が空から近づいてきた。
それは輸送機のシルエットだった。
米国空軍の基地のある沖縄本島が近いだけに、皆、あまりそれを気に留めてはいない。
だがその輸送機はいつもの輸送機ではない。

そのカーゴの中に収められている積み荷が違っていたのだ。
輸送機がフェリーの上空に差しかかると、ゆっくりとその後部ハッチが開かれる。
高度は二〇〇メートルほどだろうか。
開かれた後部ハッチの縁に人影が並んでいた。
見るものがいれば降下訓練かと思ったかもしれない。
ただその人影は皆、黒いフードを目深に被り、その手には身の丈のほどもある大剣を手にしていた。
黒い影が輸送機の外へと飛び出し、フェリー目がけて、重力に身を任せて落下していく。
甲板の上に轟音が響く。
乗客たちがその音の方を見た。
見れば輸送機が遠ざかり、そこから最後のひとりが落ちてくるところだった。
異様なのは彼らがパラシュートを装着していないことだ。
普通ならば落下の衝撃で死んでしまう。
だが、彼らは死んでいなかった。
甲板の上に落下した彼らが皆、体を起こしたのだ。
目深に被ったフードの中で、彼らにしか聞こえない声が指示を与えた。
——ジェノサイド。
命令はそれだけだった。
その声に影が動く。

そして彼らは命令どおり、手にした大剣を振るってジェノサイドを始めた。
対象は目の前にいる動くもの全て——。フェリーの乗客全てだった。

＊　＊　＊

「シフ！」
通路を走る響が見たものは、逃げ惑う乗客に斬りかかるシフの姿だった。
雪山で襲ってきたあの人造翼手だ。
「数が多いな」
デヴィッドが苦々しく言った。
そのとおりだ。その数は一〇体以上いるだろう。
フェリーのいたるところから悲鳴と破壊音が耳に届いた。
響の足元が赤黒く濡れていた。
それは床一面に広がる斬り刻まれた乗客たちの血だった。
襲われた乗客たちは痛みすら感じる暇がなかっただろう。ただ運が悪い乗客たちはそれに気づく猶予を数秒与えられ湧き起こる恐怖の中で絶命していったはずだ。
悲鳴に混じって火災報知器が鳴り始めている。
「連中は狙いを変えてきたようだ」

「狙い？」
「ああ。最初のうちはお前の身柄を手に入れるために人間を使い、なるべく表沙汰にならないように襲ってきていた。町中でも人の目につくような場所での襲撃はなかったはずだ」
確かにデヴィッドの言うとおりだった。
赤い盾のエージェントたちは皆、一般人の格好はしていても、こちらを襲うタイミングを見計らっていたはずだ。
だからわざと誘い出し、それを撃退するといった作戦をデヴィッドは取っていたのだ。
雪山で響たちを襲ってきたシフにしても、あの場所にいる人間などかなり限定的だった。
だからこそああした特別な刺客を送り込んでこられたのだろう。
そしてあのときの目的はデヴィッドの排除であり、翼手の女王である響の確保だったはずだ。
だが今は違う。
目の前にいるシフたちはこの船ごと響たちを海へと沈めようとしている。
「――どうして」
「まずは目撃者の迅速な排除。目撃証言がなければ船体の不具合による海難事故で証拠隠滅だ。そしてもうひとつの要因が、やつらは必要なものを手に入れているからだろう」
「……奏のこと？」
「お前はシフを結晶化させた。つまりはディーヴァの姉である小夜と同じ種類の血を持っているということだ。やつらが欲しいのはディーヴァと同じ種類の血。それがあれば翼手を作り続けることができるからな」
「なんでそんなことを――」

「世界を意のままに操るためだ。そうすれば自分たちにとって都合のいい居場所ができあがる。翼手の女王は三〇年の長きにわたって眠りに就く時期があるそうだ。その間を狙われれば人間にだって殺される。それを防ぐためにシュヴァリエたちはいる。彼らが擬態を繰り返すのも、いつの時代にも同じ姿で現れ続けることを欺くための能力だそうだ。だからやつらにとって都合のいいように世界を動かすことができる。群れで生きる人間たちは、絶対的な力に従うしかない」
「その力が翼手の女王の血……？」
「不老不死の力でな。だが彼らにも弱点がひとつだけある。同じ母親から生まれたもうひとりの女王だ。それが敵の手にあっては思いどおりの未来は描けない」
響には言葉がなかった。
「私の血が……、奏を殺すの？」
そんな響を青い目が見つめた。
「自分の血について悩むのはここを切り抜けてからだ。やつらが描いた最悪な未来像を変えることができるのはお前たちだけなんだ」
「私たち？」
「音無響と音無奏。このふたりが常に同じ明日を見ていることが、これまで血で血を洗う歴史の呪縛から解き放つはずだ。俺はそのためにここにいる。お前を守るために」
「奏は……？」
「言っただろう？　ディーヴァと同じ血を持つ彼女を、やつらは女王として扱うと。俺は――、俺の仲間は、お前た

ちの明日を作りたい。もうその血で悲しむ人間を作りたくないから、戦っているんだ」
明日を作る。
力強い言葉だった。
響がデヴィッドを見つめる。
——彼となら、きっと未来を作れる。
「来るぞ」
緊迫したデヴィッドの声が空気を変える。
風が迫った。そう感じられたのだ。
その風を響とデヴィッドは躱した。
床の破片が舞った。
そして姿を見せたのは大剣を床に突き立てたシフの姿だった。
間髪入れずにデヴィッドがそのシフに向けて銃弾を撃ち込んだ。
狭い通路の中でシフの体が大きく弾け飛び壁に激突する。
「響、女王の血を！」
「う——、うん」
響が手にしたシースナイフで自らの手のひらを傷つける。
チリッとした痛みがあった。
そこから流れる鮮血がシースナイフの刃を濡らす。

――これで刺せば！
倒れているシフがゆっくりと動き始める。
響の動きが止まった。
生きている生命を奪うこと。そのためらいが、響の動きを止めたのだ。
無理もない。
翼手の女王といえど、響は人として生きてきたのだ。愛情を注がれて。
雪山でシフを刺したときは、デヴィッドの死と自らの危機が目前に迫っていたという状況を前にして感情のままに動いただけだ。しかし今は違う。
響は冷静だ。ある程度の興奮状態にはあるが、頭は冷めたままだった。それが身体を停めていた。
ためらう響の手からデヴィッドがナイフを取ると、それをシフへと突き立てる。
その傷口から入り込んだ響の血――、女王の血が毒のように体を巡り、シフの血を瞬時に結晶化させ、その肉体を石のように変えていった。
シフは動かなくなった。
「あ――」
動かなくなったシフを見下ろし、響は言葉を失った。これが生命を奪うということなのだ。
「ためらえば死ぬ」
デヴィッドの冷たい声がした。
「後悔する時間はいくらでもある。だがその時間は死ねば終わりだ」

「わかってる。けど……」
響の手が震えていた。
デヴィッドはその手にシースナイフを押し込む。
「……俺を信じろ。そして自分を。自分の明日を守れるのは最後は自分だけなんだ」
響には返す言葉が見つからなかった。
そんな響の頭をデヴィッドの手が優しく覆う。
「大丈夫だ。お前は俺が守る」
「……あ」
その手から響は温かいものを感じていた。
この手はやっぱり――。
そうだ。自分自身が戦うと決めたのはこの温もりを守りたいと決めたからなのだ。
――ためらうな。
ぐっと響がシースナイフの柄を握りしめる。
激しい震動がフェリーを揺らし、そしてどこかから爆発音が聞こえ始める。
デヴィッドが床に突き立てられたままのシフの大剣を手に取り、その重みを確かめるように一振りする。
「俺から離れるな」
「うん」
デヴィッドが駆け出した。

響は前を行くデヴィッドの背中を見失わないように走り出す。
船内は地獄絵図と化していた。
いたるところに転がる乗客の死体が傾く船体の中を滑っていく。
どこかで火災も起きているのか、焦げ臭い匂いも漂ってくる。
響とデヴィッドはその中を駆け抜ける。
現れるシフの動きをデヴィッドが止め、そして響が女王の血で止めを刺す。
もう、ためらわなかった。
肉を裂く感触は嫌だったが、それを厭えば自分自身の未来が消える。
未来を失わないために響はデヴィッドが斬ったシフに自らの血を送り込んでいた。
——私は死神だ。
そう思いながら。

フェリーが沈没するのは、時間の問題だった。
既に半分ほど傾き始めた船体から水圧を検知して救命艇が自動的に海上へと放出されていく。
だがそれに乗り込み避難する乗客と船員の姿はなかった。
シフたちが殺していったのだ。
その中で、ただふたりだけ、この傾いたフェリーの中で生き残り、甲板へと続く階段を上り、脱出を試みる人影があった。

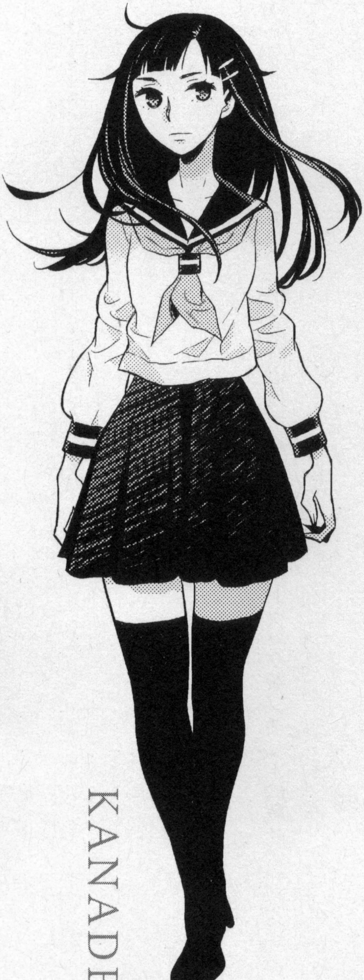
響とデヴィッドだ。
シフがまたひとり、響の手により結晶化され、崩れていった。
既に何体結晶化させたのかわからなくなっていた。
響は自らを傷つけ、流れた血でシフを結晶化していく。
そしてデヴィッドはシフの攻撃をその身で受け止める盾となり、傷ついても傷ついても、響が止めを刺すチャンスを作る。
「あとどれぐらいいるの？」
「あと四体だ。だが、そろそろ船から脱出しないと俺たちも危ない」
「翼手でも溺れるの？」
「その経験はまだないな」
真面目な顔でデヴィッドが言った。
こんな状況だというのに、響にはなんだかそれがおかしかった。
「なにを笑っている」
更に真面目な顔でデヴィッドが返事をする。
「デヴィッドは、もう少しリラックスしたほうがいいよ」
「俺は十分リラックスしている。だからといって弛緩してるわけじゃない。力が入ってたら思うように動けないから、適度な緊張状態を保って――」
「そういうところ」

「……しょうがないだろ。親父譲りだからな」
デヴィッドがそう言って甲板へと上がっていく。
そこでデヴィッドの動きが停まった。
「なに？」
デヴィッドの後ろからその視線を追うと、傾く甲板の上にシフが四体待ち受けていたのだ。
「残るは俺たちだけということか」
デヴィッドがシフから奪った大剣を構える。
それが合図になったように、シフが一斉に動いた。
デヴィッドが最初の一体に斬りかかるが、それが躱される。その背後から別のシフがデヴィッドを襲った。
振り向きざまにデヴィッドが大剣を薙ぐが、それがシフの大剣で受け止められる。
デヴィッドの左右からシフ二体が交錯するように大剣を突き出してくる。
それをデヴィッドが跳躍して躱す。
最初のシフが下からデヴィッドを襲った。
デヴィッドが空中で姿勢を変えて大剣を突き出す。
それがシフの体を貫く。
全てが神速の動きだった。
時間にして一秒も経っていない。
止めを刺すチャンスを窺う響もその機会を与えられないほどだった。

人間であれば四方同時にかかってくることはないと言われている。同士討ちを避けるためにだ。しかしシフは人間ではない。お互いが傷つこうと、それをものともせずに息をもつかせぬ攻撃を続けてくるのだ。
そしてついにデヴィッドが捕まった。
シフが二体がかりでデヴィッドの両腕の動きを封じていた。
残るシフが互いに前後からデヴィッドを挟み込むように大剣を突き出し、串刺しにしたのだ。
「デヴィッド！」
その声はデヴィッドに届いたのだろうか。
光。
風。
熱。
それらが響を襲い、その身体が大きく吹き飛び海へと投げ出される。
十数メートルから落下し、水面に身体が叩きつけられたあと、暗い海が響の身体を包み込んだ。
闇の中で、ゴンゴンと水の中で大きな音が鳴っていた。
沈んでいく船が作る波の音だった。
一〇メートル近く沈んだだろうか。
ようやく浮上へと移る響の目に海面が見える。
水面がオレンジ色に揺らいでいた。
燃えているのだ。

破片が降り注いでいた。
爆発したのだ。
シフが、デヴィッドを巻き込んで。
女王の血を持つ響を狩ることが目的だった。だがそれ以上にシュヴァリエの存在が邪魔だったのだろう。
目的を遂行するために、最大の障害を排除することへと狙いを変えたのだ。
シフが自爆することなど、デヴィッドも予想していなかったのかもしれない。
——デヴィッド。
その声は空気の泡となってオレンジ色に輝く水面へと上っていく。
響の身体が再び上昇に移ろうとしたとき、オレンジ色の光が再び大きく膨らみ、響の身体を暗い海の底へと押し戻す流れを作った。
その流れに翻弄されながら、響の意識は闇の中へと落ちていった。
暗い、暗い、闇の中へと——。

第四章『血』



KANADE

沖縄

船の窓ガラス越しに見える暗い海の向こうに、星のような光が帯のように広がっている。
沖縄の町の灯りだった。
あの灯りの中で、幾千の人間たちが息づき、そして感情に従い生きている。
笑い。
怒り。
悲しみ——。
今もそうした声がこの耳に届いてくるかのように、奏は感じていた。
懐かしいイントネーションだ。
「ただいま」
そんな言葉が奏の口をついて出てくる。
幼い日に沖縄を出て以来、初めて戻ってきたのだ。
あのときは養父であるカイに連れられ、響と一緒に家財道具一式を積み込んだトラックをフェリーに載せて、賑やかで楽しい船出だった。
けれど今は、ひとりだ。
アダムや赤い盾のエージェントはいる。

それでも、どこか遠い。
ノックの音がした。
「女王様、お待たせしました。ヘリの準備ができました」
部屋のドアの前で、奏に向けてうやうやしく礼をするアダムがいた。
「やっと船から出られるんだ」
「うん。行きたい場所はある？」
「コザ」
「え？」
「わたしとお姉ちゃんと、アダムの、はじまりの場所」
「ああ。そうだったね」
「あそこに行って、ちゃんと『ただいま』しないと」
そう言った奏の目は沖縄の夜の町の先にある、あの場所を見つめていた。

＊＊＊

赤い盾の船からヘリに乗せられ、降り立ったのは普天間(ふてんま)基地の近くだった。
空から見ると基地周辺はその基地に寄り添うように住宅が密集している。
その一角にある真新しい建物の敷地に降り立ったのだ。

「知ってる。このあたりに住んでる人たちって、基地ができたあとに住み始めてるんだ」
「うん。だってここがないと生活できなかったし」
「でも面白いのは、この基地の移転が問題になったとき、どこかの偉い人がさも元から住宅が密集してたようなことを声高に言ってしまったことなんだ。目の前の事実を自分たちの都合のいいように捻じ曲げて解釈するっていうのは人間の業なのかな」
「ただの都合だよ。私が知ってるのは、私たちが沖縄を出たときくらいに、日本の総理大臣の中で、すんごくバカな人がいてごちゃごちゃにしちゃったってだけだって、カイが言ってたのを聞いたことあるくらいだし」
「世の中を面倒にするのは、ペンは剣より強しの意味を履き違えて、不定形な情報というものを扱いきれない痴れ者がいるからさ。だから僕たち赤い盾はいくらでも世の中からその姿を隠すことができるんだけどね」
「あの大きな船も？」
「財力はなによりも強い武器になる、この世界の血だから」
アダムが建物の扉を開いた。
「このビルだって、赤い盾の傘下に収まったかつての敵であるサンクフレシュ・ファルマシーの沖縄拠点だったところさ。サンクフレシュの名前は残れど、体内を流れる資本という血液が全てを作り変えてしまった」
「のっとったの？」
「もともとはジョエルとつながっていたゴールドスミスの持ち物だからね。ディーヴァの側についたゴールドスミスが本家であるゴルトシュミットの懐に戻っただけの話さ」
「じゃあアダムはお金持ちなんだ」

「僕が？」
「ジョエルさんの代わりをしてるんでしょう？」
「そういうことになるね。そっちはあまり興味ないから専門のスタッフに任せてるけど」
「じゃあアダムってなにに興味があるの」
「そうだね」
アダムの手が動いた。
その指が奏の唇に触れる。
「君だよ。僕の女王——、音無奏」
「なにそれ？　コクハク？　……ダサ」
「ふふ。そう言ってる割に、顔が赤いよ」
アダムに指摘されたとおり、奏の頬が紅潮していた。
こういう色恋沙汰にはあまり興味がなかった。確かにリョースケのように自分に言い寄ってくるような男の子たちはいたが、それらは皆、本気ではない。ただの衝動だ。
けれどアダムのそれはどこか違っていた。
一言一言が胸に響くのだ。
奏は自分の領域と相手との領域との距離をとっていたはずなのに、沖縄という懐かしい場所に着いた安堵感が気持ちを緩めたのか、久しぶりの陸地という安定感がそうさせたのか、すっと自分の領域に踏み込まれたのだ。
アダムが奏の血を飲みシュヴァリエとなったからだろうか。

前よりもアダムの言葉が頭に残るのだ。
それはこの場所に来て更に強まり、頭の中で大きな存在となり始めていた。
アダムに導かれ、ビルの最上階にある部屋に通されると、そこは高い天井のある礼拝堂のような造りをしている一室だった。
ステンドグラスがはめ込まれた正面の壁にはご丁寧に十字架までもが架けられている。その脇の壁に大きなモニターが設置されていた。床にはやってくる礼拝者が座る長椅子も並んでいた。
奏が天井を見上げてそっと両耳に手をあてる。
そこから不思議な声が降ってくるかのようだった。
「なにか聞こえてる」
それはアダムの声のようでもあった。
けれど、もっと大人びていて、落ち着いていて、優しげで——。そんな声を、奏は遠い記憶の中で聞いたことがあるような気がしていた。
「誰の声だろう」
「錯覚だよ。そう思わせるような作りになっているんだ、ここは」
アダムも天井を見上げて言った。
「主よ——、ってね。前は礼拝堂として使われていたそうなんだ。悪趣味だろ？」
「それ、私への嫌味？　吸血鬼の女王だから」
「ううん。翼手はそんな空想上の生き物じゃない。人間がすることの愚かさを言ったんだよ。自分の想像の及ばない

ことになると自分以外に責任を求めようとする。なぜ自分で成し遂げようとしないのかってね」
「いいじゃん。別に。オーマイガーって、私は嫌いじゃないよ」
「でも、ここにいる人間たちは皆、そんな気分になっているかもしれない」
そう言うとアダムは十字架の下にある卓上のコンソールに触れ、壁面に備えつけられた大型のモニターを起動させる。
モニターに映されたのは全国ネットのテレビのニュース番組だった。
基地移転の工事を妨害する人々の姿が映し出されている。
「まだこんなことやってるんだ」
「彼らの正義がそこにあるからさ」
「そんなの意味ないじゃん。ここから基地がなくなったら、近くの食べ物屋さんとか、中で働いてる人とか仕事なくなるかもしれないのに」
「気にしてないんだよ。あとのことなんて。正義を振りかざし、そして実行する人間たちはあとのことなんて考えてないし。そのときに勝てるかどうかだけ。自分たちが『正しい』ってことが一番大事なだけなんだ」
「そういうのって面倒。無責任な学校の先生みたい」
「人間の社会というものが生んだ歪みなんだろうね。もしかすると平和というものが生んだ悪なのかもしれない」
「で？　この人たちとなにか関係あるの？　私がここに来たことが」
「うん」
アダムがコンソールを操作するとニュース映像が縮小され、別のウィンドウが開いた。そこには沖縄県の地図が表

示されていた。
その地図上には小さな赤い点が星のように表示され、基地周辺や移転先の埋立地近くの道路などに張りついているように赤い帯を作り出していた。
「これなに？」
「音無響の高校で起きた凶暴化事件のことは話したよね」
姉の響が逃走を続ける原因となった事件のことだ。赤い盾に敵対する組織がばら撒いたサプリメントの名を騙った合法ドラッグが生徒たちに広まり、それを服用し続けていた何名かが他の生徒を襲う事件に発展したものだった。表向きには武装集団による学校占拠事件として報道されているものだった。
赤い盾が関係機関と協力し、この事態収拾にあたっていることは聞いていた。
「元々は先代のディーヴァの血と、マルティン・ボルマンが残した『ボルマン文書』にある人造翼手計画を元に作り出されたデルタシリーズが原因となって起こった事件だ。だからデルタを開発していたサンクフレシュ・ファルマシーを傘下に収める赤い盾としては黙って見過ごすことはできない」
「誰がそんなことを。赤い盾の中に裏切り者がいるの？」
「かもしれない。でも今は犯人捜しをするよりも、この事態を終わらせることに集中したいんだ。でないと大変なことになる」
「大変？」
「この沖縄の、いわゆる反対派の人間たちの間にもサプリメントが広まってる」
「この赤い点が？」

「デルタシリーズは特殊な波長に反応する特性がある。それを利用して視覚化させたものだ」
「こんなにいるんだ」
「実はこのサプリメント、沖縄には流されていなかったものなんだ。それがここで広まったのは、ここにいる反対派の人間たちの多くがよそから流入してきてることを意味してる。まあそれはどうだっていいんだ。問題は彼らの波長を計測してる限り、もうすぐ彼らは暴徒化する」
「……え？」
「もしかするとそれ以上かもしれない。互いの中に芽生えたデルタの因子が共鳴し合って、こちらでも掴めていない効果を示すかもしれない。
東京の高校で起きた凶暴化は、生徒数名による発症からそれに感化された数名が暴れたものだ。赤い盾の実行部隊が調査した結果、暴徒化したのは五名ほどだったらしい。しかし証言を分析してみると、生徒たちの多くは実際より倍以上の人間が暴徒化していたと思い込んでいるということがわかってる、パニックによる錯覚さ。
その後、こうしたサプリメントの本州における凶暴化の発症は確認されているけれど、限定的なものばかりだった」
アダムがコンソールを操作すると沖縄の地図がぐんと縮小し日本全体が映し出される。
「音無響を連れて逃げてるレジスタンス——、今はシュヴァリエになっちゃったけど、その逃走経路、前にも見せたよね？」
「……うん」
日本列島の地図上に星のように散った赤い光点は以前見たときよりも確実に増えていた。そしてそのうち密集した赤い点がひとつの帯のように、東京から長野、日本海側を経由して大阪から四国を抜け、そして九州を横断して鹿児

島あたりまで延びている。
「お姉ちゃん、鹿児島にいるの？」
「いや、今は違う」
アダムが鹿児島から南に向かう海の上を指さして言った。
「ここからは沖縄に向かうフェリーに乗ったらしい」
「沖縄？　それじゃここにいるの？」
アダムが首を横に振った。
「実は行方がわからないんだ。彼女の乗ったフェリーが沈没する事故が起きたから」
それを聞いて奏は言葉が出なかった。
「ただこの事故はおかしなところがある。こうした事故なら少なからず要救助者の姿は確認されるはずなんだ。それがひとりも見つかっていない。もう少し明るくなれば状況がわかるかもしれない。けれど、導き出される結論はひとつある。事故の前にみんな死んでいたんじゃないかって——ね」
「誰がそんなことを……？」
「さあ」
アダムがモニターの表示を沖縄へと戻す。
「ただ、音無響は死んだりはしていないと思う」
「なんでそんなことが言えるの？」
「だって君はなにも感じていないんだろう？」

「え？」
「君たち、翼手の女王は特別だ。こういうのは非科学的だって言われるかもしれないけど、見えない糸で繋がってる。だから片方がいなくなればなにかしらの予兆があると思うんだ」
アダムの言うとおりであった。
互いに見えない糸で繋がっている感覚はあった。
科学では説明できない一卵性双生児にある不思議な共感——、それ以上のものを奏は響との間にあると感じていたし、今もそれを疑っていない。
光と影。
プラスとマイナス。
どちらがどちらなのかわからないが、そうした関係にあるような気がしているのだ。それは年々、自分たちが年を取れば取るほど強くなってきた感覚であった。
「僕たちは今、音無響の捜索を始めている。ただ障害となるのがこの赤い点の暴徒化、これの収拾にもあたらなくちゃいけない。だから君に協力してもらいたい」
「私になにができるの？」
「君がやりたいことはなんだい？」
自分がやりたいこと。思いを届けること。それを人に伝えるための手段は——。
「……歌」
「それじゃ、歌ってみたら。ここに来る前に歌っていただろう？　あの歌だ。あの歌声なら、きっと音無響に届く。

その歌が彼女の耳に届けば、きっと翼手の女王の血が反応する。そして彼女のあるところにこの赤い点の連中は反応するんだ」

「これも、共鳴ってやつなの？」

「そうかもしれない。でも僕たちは翼手のことを知らなすぎる。赤い盾が一〇〇年近くも研究してきてるのに、わかったことといえば、個体数が少ないという記録だけ。それにオリジナルのＳＡＹＡから先の翼手のことはまったくわかってないからね。

でも、君たちは別だ。目の前にいる。歴史に刻まれた記録じゃない。いろいろと試すことができる。そうすればきっとわかると思うんだ。君たちのことも、翼手のことも、シュヴァリエのことも、そして——」

アダムはそこで言葉を切った。

珍しくアダムの息が弾んでいた。

奏がモニターの赤い点を見つめる。

このどこかに反応があればそこに響がいるということになる。

歌えば、響に届く。

届けばなにかが起こる——。

——会いたい。

響に。

もうひとりの自分自身に。

「響と私は、ふたりでひとつだよね」

「……うん。ディーヴァの遺した子供たちだからね」
奏の中でなにかがむくりと目覚めるような感覚があった。
これはなんだろう。
今まで殻の中に閉ざされていたなにかが開くような感覚だ。
「わかった。私、歌ってみる」
奏は再びモニターに映し出された沖縄を見つめる。
──必ず会えるはず。このはじまりの場所で。
そう信じて──。

「めんそ〜れ、か」
カンカン帽を被り、サングラスをかけた男が那覇（なは）空港の到着ロビーに書かれた、めんそ〜れおきなわの文字を見上げて言った。
「どうやら俺たちのマークは薄そうだな」
「こんだけ臭いのにな」
男の隣にいる大柄な黒人がタオルで汗を拭きながら人懐こそうな笑みを浮かべる。
「お前さんがドブ臭いから搭乗拒否されるかと思ってたんだがな」
「ちゃんとシャワー浴びただろ？　それよりあんたのほうが身元バレるだろ？　フツー」
男に言われて黒人が肩をすくめる。
「そこは慣れってやつよ。まあ、お前さんも死んだことになってるしな。赤い盾の連中が俺たちを追う理由なんてないからな。なあ、アイス食べていいか？」
「なんでアイスだよ」
「デブはアイスを食わねえと熱が出るんだよ」
「そんなのあとにしろよ。ひとまずあいつらに合流しないと、なんの情報もないからな。今の俺たちじゃ盾の連中と戦うには差がありすぎる」

「蟻と象か」
「それ以下とそれ以上だろ」
「それに、あっちは奏を手に入れてる。響はどうなってるか知らないが――」
「デヴィッドに任せるしかないだろ」
「それがあいつの仕事か？　少し堅物すぎるところが気になるけどな」
「そんなところだけ親父似か。元相棒の教育が足りてないんじゃないのか？」
「ユーモアのセンスはこれから叩き込むところだったんだよ」
空港の外に出ると、沖縄の太陽がふたりを照らした。
黒人がサングラスをかけて太陽を見上げる。
「このお天道さんを、明日も見られるといいよな」
「ナンクルナイサ」
「またそれかよ」
「俺たちにはそれしかないからな」
そう言って男は歩き始めた。
生まれ育った懐かしい町へと向かうために。

漂着

カニだ。
うっすらと開いた響の目の前を横切るのは片方のハサミがアンバランスなほどに大きなシオマネキだった。求愛行動が潮を招くように見えるダンスをすることからそういう和名がついているらしい。
そんなことを記憶の引き出しから取り出しながら、響は身体を起こす。
そこは岩場のビーチだった。
濡れた体に当たる風が冷たかった。
けれど遠浅の海の色はエメラルドグリーンから深い青へと変わる、響がかつて見てきた海の色と同じだった。
海の反対側には消波ブロックが積み重なり、その向こうにガードレールが見える。そこに車が通る道があるのだろう。そしてその奥は急斜面となり、その上の方にはこの地方独特の冠のように平たく緑を置いたイタジイの樹が生い茂る森が見えた。
「沖縄だ」
身体を動かしてみると、どこにも怪我らしい怪我の痛みは感じられない。
ふと手の中になにがあった。
それはシースナイフだった。デヴィッドから渡されたものだ。
「……デヴィッド?」

響はデヴィッドの姿を捜した。
「デヴィッド!?」
しかしその声は風の中に消えていった。
打ち寄せる波がやわらかな音を立てては消えていく。

——そうだ、デヴィッドは……。

鹿児島から沖縄へと向かうフェリーの上で、シフたちの自爆に巻き込まれて、死んでしまった。
たぶん、おそらく。
不死性のあるシュヴァリエであっても、フェリーに大穴を空けるほどの爆発だ。体が持たない。
血の契約を交わし、ふたりでなら生きていける——、そう思った矢先にひとりにされてしまった。
痛み以上に空虚感があった。
ただ響は生きている。
普通なら溺れ死ぬところだったのだろうが、おそらく翼手の女王の血がそれをさせなかったのだ。
生きろと身体の中から言われているのかもしれない。
デヴィッドがいたら同じことを言うのだろう。
「きっと、言う」
その思いを口に出してみる。

雪山の中でも、沖縄に行け、もうひとりのデヴィッドに会えと言っていた。
きっと仲間がいるのだろう。
どこに行けばいいのかはわからない。
ただなんとなく、以前住んでいた場所に行けばいいような気がしていた。
そこになにかがあるような気がしていたのだ。
それは遠い記憶の中で、誰かが言っていたような気もしていた。

ナンクルナイサ。

そんな声が頭の中で優しく流れる。
沖縄の、波のような声。
カイの声だ。
はじまりの場所。
そんな言葉が響の頭の中に蘇る。
その言葉を思い出した瞬間、なにかが響の耳から飛び込み、頭の中を通り過ぎていく。
「歌？」
風の音かもしれない。
けれどそれは明らかに旋律を伴っていた。

歌詞はない。
ハミングのようでもあり、なにか言葉にできない思いを声に乗せている——、そんな感じの歌声だった。か細い。
消え入りそうな旋律だ。
あたりを見ても、誰もいない。
ただそれはこの場所からずっと南の方にあるような気がしていた。
響はその歌声を辿るように、岩場を上がり、目の前の道へと続く階段を上り始めた。

海を右手に見て、道の上を歩いていく。舗装された車道だった。
しばらく歩いていくと、青い標識の中に五八の数字が見えた。
「国道五八号なんだ……」
その名前は覚えていた。
沖縄を南北に走る国道だ。那覇を南端に、実のところ北端が鹿児島まで、いくつかの島を経由して届く海上国道である。
沖縄に住んでいた人間であれば必ず通る道といってもいいだろう。那覇から浦添（うらそえ）、宜野湾（ぎのわん）、嘉手納（かでな）基地の脇を抜け、恩納村（おんなそん）から国頭村（くにがみそん）へと通じている。
東京で横田基地の傍を通り過ぎる景色と、嘉手納基地の傍を通り過ぎる景色は、なんとなく空気が似ていると響は感じていた。それだけにこの道のことはよく覚えていたのだ。

山があるということはおそらく国頭村のあたりだろう。
フェリーが沈没したのは沖縄本島の北側だったはずだ。
運良く流れ着いたのが沖縄でよかったと響は感じていた。
時折足を止めながら、微かに聞こえる歌声のような旋律の発信源を探し、そして歩き始める。
その先の国道の上にある青い案内表示に、海洋公園や名護の名前があった。
ようやく知っている土地の名前を見つけて、響は嬉しさと懐かしさがこみ上げてくるのを感じていた。
今、できることは前に進むことだけ。
響は歩き続けた。
南へ向かえば向かうほど、道が広く、きれいになっていく。
水平線の先に陸地も見えている。
おそらく本部あたりだろう。
途切れ途切れに聞こえていた歌声もわずかにだが、はっきりとした旋律となり始めている。
聞き覚えのある声——。
「奏の、声？」
響はそれを確信していた。
それを信じてひたすら前進し続け、やがて町中へと入り込んでいた。そして町中を通り過ぎ、ひたすら国道五八号に沿ってを歩いていく。すると賑やかな人の声がする。なにかの集団だろうか。
その方向を見ると、海沿いの公園で、市営球場のグラウンドが見えた。

そこに一〇〇〇名以上の人間が集まっているようだった。
ハンドマイクを持った人間や、横断幕のようなものも見える。
沖縄を返せ。
そう書かれた横断幕の文字が見て取れた。
なにかのデモ隊なのかもしれない。沖縄にはこうした人間たちがいる。実際のところ、よくわからないがその多くが地元民ではないとも聞いていた。
子供の頃に沖縄を離れてしまい、なんとなくそんな話をカイや周りの大人たちがしているのを聞いていたのを覚えているだけだ。
デモ隊の人々が声高にシュプレヒコールを上げて、行進が始まった。
よく聞くフレーズだ。
この声が響の耳に届く微かな歌声を妨げている。明らかなノイズだ。
うるさい――。
そう叫びそうになる気持ちを響は抑えていた。
デモ隊の声の中にフェリーのことが織り交ぜられていた。爆弾テロがあったのは米軍がいるからだ――などだ。
――違う。
響はそう叫びたくなった。
あれは自分たちを追ってきた赤い盾のシフたちだ。それはテロなどではなく、もっと大きなものだ――と。

響しか知らないであろう真相ではなく、自身たちの都合のいい話に置き換えたデモ隊の行進が通り過ぎていく。
遠巻きに見つめる通行人や町の人たちの中に交じり、響はそれを見つめていた。

いつもいつもあきないのかね。

暇なんだろ、プロ市民は。

デモを遠巻きに見ている通行人や、町の人々がつぶやく声が響の耳に入る。
警官隊が誘導して歩く列の向こう側で声を上げるデモ隊の声が徐々に熱を帯びたものへと変わっていく。
こうしたデモが行われるときは必ず警官たちが沿道に配置されており、届け出のとおりに行進が行われているかを見ているものだ。デモ自体はこうした決まりごとの中で行われるものなので通常、混乱が起こるようなことは少ない。
けれど今日のデモ隊はどこかおかしかった。
列の中から上がる声もどこか感情的だった。

今日はなんだか怖いわね。

力入ってんなぁ。

地元の住民の声だろうか、それを心配するものが聞こえてきた矢先だった。
デモ行進の列の中からひとりの男がいきなり列を外れていく。

「そこ、列を離れないように」
注意しながら警官が素早くその男を押さえようと動く。するとデモ行進の列の中から別の参加者がいきなりその警官に向かって飛びかかっていったのだ。
それを見た他の警官たちがその警官を襲ったひとりを引き離そうとするが、デモ行進の列の中から次々と人々が離れ、警官に向かって飛びかかっていったのである。
それは次々と連鎖し、拡大していった。
警官に飛びかかるデモ隊の中には女性も、老人もいた。
警官たちも最初は取り押さえようとしていたのだが、相手は暴徒と化している。警官の中には集団で組みつかれ、そしてその腕や足などに噛みつき、爪を立てるデモの参加者がいた。
いつしかシュプレヒコールが獣のような声に変わっていた。
響には聞き覚えのある声だった。
高校で、コマツという生徒が暴れたときの、あの声――。

音無響ぃぃい！

そう自分の名前を呼ばれたときの声が脳裏に蘇った。
――まさか。
目の前であのときと同じことが繰り返されようとしている。

そして規模はあのときの比ではない。
その数が一気に拡大しているのだ。
暴徒の群れが警官隊だけでなく、デモ行進を遠巻きに見ていた通行人やこの町の人たちをも襲い始めた。
ドクン、と響の身体の中でなにかが脈打つ。
「く！」
響が思わず自らの身体を両腕で抱きしめその場にうずくまり、うめき声を上げる。
——なにかがおかしい。

襲撃者たちがその動きを止めて顔を上げた。
彼らの視線の先には響の姿があった。
皆が響を見ている。
その目が鈍く赤い光を湛えている。

——なに？

暴徒のひとりが高らかに天に向かって遠吠えのような声を上げた。
それに応えるように他の暴徒たちも遠吠えをする。

そしてその姿が徐々に人のものでなくなり始めていく。

顎がせり出し、腕が長く伸び、その指先は鋭い爪と変わり、体全体の構成が獣のように変わっていく。体の膨張に耐えきれなくなった衣類は破れ、露出した腕と胸の間には薄い翼のような膜が覗いて見えた。それはゴリラとコウモリの間のような形をしていた。

前にデヴィッドが響に見せた画像にあった、ニューヨークに現れた化け物――、翼手だ。

暴徒が翼手化したのだ。

逃げ惑う人間の悲鳴を翼手の声が追った。悲鳴は途切れ、あとに残るのは翼手の咆哮だけだ。

響の目の前で、人間たちが翼手に喰われ始めていた。

ゴロゴロと獣が喉を鳴らすような音を立て、呆然と立ち尽くす響の周りに翼手たちが集まり始める。

これはなにか。

人間とは違う匂いの血。

そんな品定めでもするかのように、響を赤い目が見つめている。

じりじりと包囲の輪を縮めてくる翼手の群れに響が後ろに下がる。

ガシャンとシャッターの音が聞こえた。

背中がシャッターに当たった音だった。

これ以上、下がることができない。

響を半円状に取り囲む翼手の輪が厚くなり始めていた。

響は息ができなかった。

翼手の一体がすっとその爪を振るう。
それが響の肩をかすめ、一条の朱線が走り、つつっと血が滴る。その血を見た翼手たちが興奮したように一斉に吠え始め、響に爪をかけた翼手が響に向けて前に出、響を抱きかかえようとする。するとその隣にいた翼手がその翼手を阻止して響を奪おうと噛みつき出す。
翼手同士が響を巡って争い始めていた。
——今だ。
崩れ始めた包囲の輪からそのほころびを縫うように響が走り始める。
それに気づいた翼手たちが響を追いかける。
咆哮が響の背中から迫る。
背後から風が伸びてきた。それを身を捩って響が躱す。
翼手の爪が視界の端にあった。
響を得ようとする爪だ。
——なぜ。
逃げながら響は思った。
また爪を躱す。
——なぜ翼手は私を追ってくるのか。
新たに別の方向から伸びてきた爪が響の腕を掠めた。
力の限り、響が跳んだ。

その身が一気に数メートル上の宙へと瞬間移動し、近くにあったビルの壁を蹴り、別の方向へと跳ぶ。
宙を跳ねて逃げる響に向けて翼手たちが吠えた。すると翼手たちの体に変化が現れる。腕が伸び、胸から腕にかけて収められていた膜が翼となって現れたのだ。
翼手たちが宙に舞う。響を追って。
響はコウモリのように自由自在に宙を舞う翼手の爪と牙を身体を捻って躱そうとする。しかし足場のない空中での動きには限度があった。
「飛んだ?」
ついにその腕が翼手の手のように変形した足の爪に掴まれ、宙高く持ち上げられる。
腕に食い込んだ爪から血が流れていた。
どんどんと地面が遠ざかる。
不老不死である翼手の女王である響といえど、これ以上高度が上がり、爪から逃れ落下すれば、死にはしないが身体が治るまでの間、しばらく動くことはできないだろう。そうなれば逃げられない。
――武器は。
掴まれた腕から滴る血が伝い流れる一方の手にはシースナイフが握られたままだった。
デヴィッドがフェリーの中で渡してくれた、戦うための牙が――。
響がシースを口に咥えて、ナイフを抜き取り、滴る血を塗りつけて翼手の足へとナイフを突き立てた。
ピキ、となにかが割れる音がした。
響がナイフを突き立てた翼手の傷口からだった。その傷口を中心に、体全体に向けて亀裂が広がっていく。翼手の

体内を流れる血が結晶化し始めているのだ。
シフと同じだ。
バキンと響の腕を掴んでいた足が石膏像のように折れ、響の身体が落下を始める。
落下していく響の身体を横から滑空してきた別の翼手が足で掴み上げる。
「離せ！」
その翼手にも己の血の付いたナイフで斬りつける。また結晶化し、翼手が落ちていく。響も一緒だった。
響の身体がコンクリートの床に激突した。
「く！」
そこは幸いにも雑居ビルの屋上だった。
響が手すりから下を覗く。
数を増した翼手たちが吠え、逃げ惑う人間たちを襲っている。時折、警官隊の銃声が混じるが、それも翼手の咆哮に飲まれて消えていった。
運悪くそこに差し掛かったタンクローリーが横転し、逃げ惑う人々を巻き込みながら建物へと激突し、爆発炎上した。
その熱が響のいる雑居ビルの屋上にまで届く。

地獄が、そこにあった。

「なんで……」

言葉を失う響に向けて咆哮が頭上から迫った。
翼手だ。
響が手にしたナイフの刀身で自らの手のひらを傷つけ、そして血を塗りつける。
この地獄を抜け出すには、自らが血を流すしかない。
そしてこの先も地獄が続くのだろう。
それでも進むしかないのだ。
血で自らの進む道を切り開き、はじまりの場所を目指して。
修羅となるしかないのだ。
「うわあああ！」
響が絶叫し、迫る翼手に向かって跳んだ。
斬、斬、斬――と、響の血が斬撃となり、翼手の体を結晶へと変えていく。
響の血と、翼手の結晶がアスファルトに飛び散っていく。
どれぐらいの翼手を結晶へと変えていったのだろう。
響の腕が重かった。
頭の中は真っ白だった。来る翼手に向けて血を塗りつけナイフを振るう。
ナイフは翼手の体に当たり、鈍い音が響く。

ナイフがふたつに折れていた。
折れた刀身は翼手の体に突き立ったまま、翼手を結晶化させていた。
翼手を何体斬ったかわからない。
金属疲労なのだろう。
そして響の身体も疲れていた。不老不死であろうとも疲労はする。その体力は無限ではないのだ。
刃の折れたナイフを捨てる。
「……私は、生きるんだ」
戦う牙を失っても、まだ響の心は折れていなかった。
残されたのは自分の爪と牙だけだ。
翼手はかなりの数が残っている。
逃げるしかない。
だが身体が動かなかった。
限界だった。
——ここまで来たのに。
もう腕も上がらない。
それでも響は諦めなかった。
弱った獲物を見定めるように近づいてくる翼手たちを睨んでいた。

「よく頑張ったな！」
突然、声が降ってきた。
黒い影が翼手の間に現れ、踊るように飛び跳ねる。
そしてその影が振るった光が翼手を真っ二つに断っていく。
それは斧——、道具の斧ではなく、戦うために作られた両刃の戦斧(せんぷ)だった。
その重みを自在に操り翼手をたった一撃で行動不能な状況に断っていく黒く小さな影が響の前に降り立つ。
黒いフードを被った姿はシフそのものだった。
だがフェリーで戦ったシフたちとはどこか違っている。体も小さく、そしてフードの奥から覗く顔は目のとても大きな少女の顔立ちだ。その大きな目がフードの奥から響を見る。
「お前、響だろ？　遠くから戦ってるの、見えたから助けに来たぞ」
「ルルゥ。話はあとな！　動けるか？」
「あなたは——」
「少しなら」
「じゃあしょうがない」
ルルゥと名乗った小さな少女が懐から発煙筒を取り出し、それに火をつけてアスファルトの上に放り投げる。
「あたいの後ろにいて！」
「はい」
ルルゥは近づく翼手に容赦なく戦斧を振るい、真っ二つに断っていく。

獅子奮迅の戦いとはまさにこのようなものなのかもしれない。翼手の動きを読み、そして無駄のない一撃で翼手を行動不能にしていく。

「……すごい」

響はルルゥの踊るような戦い方を見つめることしかできない。

ルルゥの戦い方は、その少女のような印象がそう思わせるのかもしれないが、子供が翼手と遊んでいるようにさえ見える。

ルルゥはシフだ。サンクフレシュが作り出した戦闘兵器として開発した人造翼手のプロトタイプの一体だった。シフはもともと遺伝構造的に寿命が極端に短い生命体として作られていたが、ディーヴァとの戦いのあと、赤い盾のジュリアという生物学者が開発した抗体で延命が実現し、前の戦いから十数年経った今も変わらずに生きていた。ただ沖縄の太陽の光の下ではまだマントなしには活動できないものの、ちょっとした日焼けしやすい体質ぐらいにまでは改善してきている。そして純粋な戦闘兵器として生まれてきたために、その戦闘力は翼手を軽く凌駕する。

「どんなもんだい！」

ルルゥの一撃で手近なところにいた翼手たちが肉塊と化していた。

まさに嵐が通り過ぎたかのようだった。

遠くの方で、不意に翼手が地面を転がった。

衝突音とともに重いエンジン音が近づいてきていた。

大振りな装甲車のような車だった。

マローダー。南アフリカ製の装甲車だ。米軍の汎用輸送車のハンヴィーが有名だが、それを更に大きくし、頑丈さ

を足した化け物のような車だ。その化け物が一〇トンをも超える重量と頑丈なボディで翼手を跳ね飛ばし、時には踏み越えてこちらに近づいてきて、響たちの前で翼手一体を跳ね飛ばして停まった。
「遅い！」
ルルゥがマローダーに向けて言った。
「間に合ったでしょう！　早く乗って！」
運転席から顔を覗かせたのは勝ち気そうな目をした女性だった。
その言葉に導かれるように、響は助手席のドアを開け中へと乗り込む。
ルルゥはそのままマローダーの屋根の上へと飛び乗った。
「出すよ！」
ハンドルを握る女性がアクセルを踏み込み、マローダーが急発進する。それに巻き込まれた翼手が跳ね飛ばされていく。公園の柵にぶつかろうと、その柵のほうがマローダーのパワーの前に破壊されてしまう。
追いすがろうとする翼手をルルゥが天井で戦斧を振るって追い払う。
時速は軽く一〇〇キロを超えていた。
まるで走る超重量級の弾頭だった。
マローダーは国道五八号を走り、翼手たちの姿が見えなくなるまで法定速度をかなり無視した走りを見せていた。
「もう追ってこないよ」
ルルゥのスピーカーが上から聞こえてきた。
特殊なマイクをつけているらしい。

「オーケー。やっと落ち着いて走れるわね」

ルルゥの声を聞いて、ハンドルを握る女性がアクセルを緩める。

彼女は長い髪を後ろでひとつに束ね、袖なしの淡いピンクのダウンジャケットをカットソーの上から身につけ、体にフィットしたデニムを穿き、足元はキルトのスリッポン、まるで近所に買い物にでも行くかのような格好をしていた。年の頃は三〇を少し超えたくらいだろうか。

「音無響ちゃん？」

女性に不意に名前を呼ばれて響が返事に戸惑う。

「私、岡村真央。カイの……、戦友かな？」

「お義父さんの？」

「高校時代からのね。音無――、ああ、音無小夜のほうね、あの子のこともよく知ってる」

「じゃあニューヨークで……？」

「うん。この上にいるルルゥも一緒。まあ、いろいろあって今は赤い盾から離れてるけどね。で、デヴィッドはどこ？」

響はすぐにそれに答えられなかった。

ただここに来るまでに起きたこと全てを、少しずつ、真央に説明するので精一杯だった。

「そっか。シュヴァリエになっちゃったのか、彼」

「……私が、そうしたから……」

「いいの。だって彼が望んだんでしょ？　男がしてくれって言ってんだから、責任は向こうにある。あんたは悪くない。それでオーケー、いい？」

「……はい」
響はここまで誰にも言えずに抱えていたことを話すことができて少しだけだが気持ちが軽くなった。真央の対応も竹を割ったようにはっきりとしていて変な気遣いもなく、ありがたかった。

＊＊＊

コザの市街地に入ったマローダーは国道から裏道へと分け入り、産業廃棄物などのドラム缶や壊れた自動車などが積まれた処理場の倉庫の中に入っていってそのエンジンを停めた。
謝花（じゃばな）興産。
そんな看板が入口の門のところにつけられていた。
「疲れたでしょう？　シャワーとか浴びる？」
「……いえ」
「女の子がなに遠慮してんの。楽になるよ」
「そうそう。あたいだっていちおー女だからシャワーとか浴びるし」
ルルゥが会話に割って入りながら、響の身体に鼻を近づけくんくんと動かした。
「あんた、小夜と同じニオイがするね」
「え？」
ルルゥはそれだけ言うとさっさと倉庫の奥の扉の中へと、あの戦斧を手にして入っていく。

「響ちゃんもこっち来なよ」
ルルゥが入っていった扉の奥から、真央が響を手招く。
「はい」
中に入ると、そこは会社の事務所のようなところで、スチールデスクの上にパソコンが数台並び、奥には書類などを収めたスチールの棚が置かれていた。
一カ月の日付の書かれたホワイトボードには、真央やルルゥの名前の書かれたマグネットボードがあり、そこに外出や休みなどの札が貼られていた。ルルゥがその外出のマグネットをひっくり返して、勤務中の文字に切り替える。
「……ここは？」
響の質問に真央が答えた。
「私の事務所。表に看板あったでしょ？　謝花興産ってのがその名前なんだけね。あ、謝花ってのは私の旧姓。親父の会社のひとつなんだ。旦那が戦場カメラマンでずーっと帰ってこないから、私が会社やって生活支えてんのよ」
真央が昔のことを懐かしそうに響に語って聞かせた。
高校時代にカイが野球部にいたこと。ちょっと惚れていたけどふられたこと。そして小夜にまつわる世界を股にかけた冒険活劇から、ニューヨークでの事件。そして今起きていることまでを――。
「カイはあんたたちを守るために必死になって赤い盾から逃げてたんだ」
「逃げてた？」
「実は、ディーヴァの双子の娘たちが生きていることは、赤い盾では一部の人間しか知らない秘密になってたの。小夜の眠ってる場所と一緒にね」

「総帥のジョエル・ゴルトシュミット自らが事件の顛末の目撃者でもあり、その生存はないと断言したのよ。結果、ディーヴァとその双子の娘の死亡、小夜もディーヴァと相討ちになって瓦礫の下へと消えた。それを以て赤い盾の目的は完遂され、翼手に関する案件は幕を閉じた——はずだったんだけど」

真央が響の前で手を腰のあたりまで下げた。

「あんたたちがこんくらいだった頃に、奏が大怪我したでしょ？　あのときにカイがふたりを育ててることが赤い盾にばれたのよ。特殊な血を持っていたから」

「あの怪我で——？」

「治療には赤い盾の施設が必要だったから。その後、カイはあなたたちと一緒に沖縄から消えたわ。小夜と一緒に消えたときみたいにね」

「それであんなに引っ越しを……」

「私が知ったのは、あなたたちが中学校に上がるときくらい。ルイスから聞かされたのよ。どうしても協力者が欲しいって言われてさ。私なら赤い盾との距離感もちょうどいいしね」

「あたいも黙ってたんだぜ」

ルルゥがひょこりと机の下から顔を出す。

「ジュリアと一緒に赤い盾にいたから情報を真央に横流ししてたんだ。あたいの動き追える人間なんていないからね」

「ま、そんな感じで私たちはレジスタンスとしてあんたたちを守るために暗躍してたってわけ」

「それで赤い盾が敵になったんですか？」

「それはまた別の理由があるんだけど――」
「あ！」
ルルゥが不意に声を上げた。
「真央、赤いのがまた増えてる」
ルルゥがスチールデスクに置かれたパソコンのモニターを見て、真央に向かって言った。
「響ちゃんが来たからかなぁ、急に数が増えてるね」
「私が来たから？」
「うん。さっきの翼手たち、あれデルタシリーズの発症者特有の波長が出てるの。それを追うシステムがこれなんだけどね――。まあうちらは赤い盾のをハッキングして覗いてるだけなんだけど」
「やっぱ響見て翼手もヨクジョーしたんだよ、ヨクジョー」
「ヨクジョー？　お風呂のことですか？」
「ううん」
真央が珈琲を淹れながら響に説明を始めた。
響が遭遇した翼手たちは、響の中に流れる翼手の女王の血――、小夜と同じ血に惹かれて欲情し、響を襲ったのではないかという推察だった。ディーヴァの血から生まれたデルタの翼手は、そのシュヴァリエたちと同じ性質を持っている可能性が高い。だから小夜と同類の血を持つであろう響をその交配相手だと本能で察知し、喰らうというよりも繁殖のために奪おうとしたのだろうと。
言われてみれば確かに噛みついてくるような行動を翼手はしてこなかった。ただ響の動きを封じようとするために

腕や脚といった部分を中心に攻め、中には抱きとめようとする動きもあったかもしれない。

「でもさ――」

そう言いながら真央が淹れたての珈琲をサーバーからカップに移し、ひとつを響の前に置いた。いい香りが鼻をくすぐる。

「――響ちゃんが来たからってあんな爆発的にデルタが発症するとは思えないんだよね。あれ、ニューヨークのときと同じ感じだったし」

ルルゥが珈琲に角砂糖を入れながら言った。

「あのときはディーヴァが歌ってたよな」

「……そういえば歌が、聞こえてきました。私が、沖縄に流れ着いたときに」

「歌？」

それを聞いた真央がパソコンのモニターにタッチし、おもむろにキーボードを叩き始める。

「マジ？」

モニターを覗き込んだ真央がつぶやき、眉間にシワを寄せていた。

「なんだよ、見せろよ」

ルルゥがそれを興味深そうに後ろから覗き込む。響もそれにならった。

モニターには沖縄の地図と赤い点が映し出されている。

そしてその上には、先程はなかったいびつな円を重ねた等高線のようなものが表示されている。そのモニターに映し出された等高線を真央が指でなぞっていく。

「ニューヨークのときのディーヴァの歌声で観測されたある帯域の周波数と同じものがこれ。そしてここが――」
真央はそのまま指を等高線が作るいびつな円の中央へと運んでいく。
「――発信源」
そこは沖縄中部、普天間基地の東を通る沖縄自動車道よりも東側にあたる場所だった。
「中城(なかぐすく)のあたりっていうと――」
真央がキーを叩く。
地図上にピンのようなアイコンがいくつも表示され、その上に名称が現れる。
そのうちのひとつを真央が指で押した。
ある企業名が地図上に表示される。その名を響がつぶやく。
「サンクフレシュ・ファルマシー沖縄」
「赤い盾系の企業がここ。そうなると、響ちゃんが聞いた歌っていうのは、奏ちゃんの歌声かもね」
「奏が？」
「音無奏の歌声は翼手を活性化させる」
その言葉は別のところから聞こえてきた。
ブラックスーツを着た金髪の外国人の男が立っていた。五〇代半ばだろうか。ただし背筋は伸びており、無駄な贅肉などがついていない。
「音無響。大きくなった」
「あの――」

――誰だろうか。

響は記憶の中から思い当たる人物像を探す。そしてそれは遠い昔の記憶の中にあった面影と、最近見た青い目を結びつけた。

「アダムの……、お父さん?」

「今はチャールズと呼ばれている、先代のデヴィッドだ。息子が世話になった」

「いえ――」

響は言葉が続かない。

先代のデヴィッド――、チャールズの低い声が響が話せないことを代弁していた。

「息子は――、アダムは最期まで自らのデヴィッドとしての任務を全うした。そして君が我々の目の前にいる。それで十分だ」

「やっぱり、アダムだったんですね」

「最期までそれを名乗らなかったのか。たいした頑固ものだな」

「誰に似たんだか」

真央がチャールズに向けて嫌味を言った。

「ジュリアも頑固モノだぞ」

ルルゥが珈琲が熱いのか、ふーふーと息を吹きかけながら会話に割り込んでくる。

「で、響ちゃんはやってきた。デヴィッドは来られなかったけど、ここから計画どおりにいくわけ?」

「そうだな」

チャールズが真央のパソコンのモニターを見つめて腕を組む。
「音無奏の居場所は特定できたんだな」
「もちろん。響ちゃんが来たからはっきりしたわ」
「……サンクフレシュ・ファルマシーか。これも因縁だな」
「で、ここを襲撃するの？」
「いや」
チャールズがモニターのある場所を指差した。
それはサンクフレシュ・ファルマシーから少し北側に行った海沿いの場所だった。
「音無奏が赤い盾の手中にある以上、この場所に赤い盾はやってくるだろう」
「そこって、どこなんですか？」
響が尋ねた。
チャールズが静かに言った。
「はじまりの場所だ」

奏は壁の十字架に向けて歌い続けていた。
それが自分にできるただひとつのことだから。
アダムに言われたからではない。
こうすることで、響に会えると信じていたからだ。
実際に歌っているときに、響がそれに応えたような気がしていた。
その声が確かに聞こえてきたのだ。
——お姉ちゃんはここに来ている。
奏はそれを確信したからこそ、歌い続けていた。
響に会いたい。それだけしか考えていなかった。
それは歌えば歌うほど、確信へと変わっていく。
頭の中に流れる歌が、記憶に刻まれた旋律が、そんな思いで歌われていたことがわかるのだ。
それは母親である、ディーヴァが歌った歌なのだろう。
たったひとりで塔の中で生きながら、やっと出会えた歌という楽しみと、そして大好きで大嫌いな姉の姿。
会いたいという気持ちをそこに乗せて、彼女は歌い続けたのだ。
最期のそのときまで。

「音無響の消息が確認できた」
サンクフレシュ・ファルマシー沖縄の最上階の一室に現れたアダムの一言が奏の歌を止めた。
「沖縄に来てる」
「やっぱり」
「わかってたんだ」
「お姉ちゃんの声、聞こえたから」
「君の歌声が届いているんだね」
「うん」
それは確信というよりは、願いだったかもしれない。
アダムがモニターを見つめながら言った。
「もうひとりの女王にも聞こえているみたいだよ」
「それって誰？」
「……ううん、なんでもない」
アダムの視線の先、ある場所だけ赤い光にブラックホールのような暗い点があった。
「はじまりの場所。あなたは、そこにいるんですね」
アダムがもうひとつの顔でにこりと微笑み、そして奏に手を差し伸べる。
「それじゃ、迎えに行こうか。彼女を」
「うん」

振り返り、壁面につけられたモニターに視線を向けると、沖縄の地図上の赤い光が歌い始めよりも確実に広がっていた。それは名護を北端に国道五八号などの主要道路を血管のように赤く染め、沖縄、宜野湾、浦添、うるま、那覇、豊見城などの市部へと延びていた。基地のある場所だけが黒く表示されているが、それぞれの地域が赤く染まる中で、今奏のいる中城から沖縄市にかけてのエリアが特に真っ赤に浮かび上がっている。

そこに翼手がいるのだ。

＊＊＊

外に出ると、いつしか日が暮れていた。

アダムに促され、奏が車へと乗せられる。

「待て！」

ビルの中から声を上げながら初老の男が姿を見せた。

「コリンズ博士。なんの御用でしょう？」

アダムの言葉遣いが丁寧なものへと変わっていた。まるで人が変わったかのように。

「私を連れて行け。いるんだろう？　我々の求める女王の血のキャリアーが」

「残念ですけど、それはできません」

「なぜだ？」

「確かにあなたは『ボルマン文書』の実証をはじめ、いろいろと僕に尽くしてくれました。けれどここからはあなた

のような俗物の入ることが許されない領域なのです」
「研究の成果を独り占めするつもりか！」
「そんなもの、興味ありません」
「なに？　ならばいったいどんな理由だ、リトル・ソ――」
「その名前で僕を呼ぶな！」
コリンズの体が揺れた。
その胸に刀のようなものが突き立っていた。
「僕が欲しいのは女王の愛だけです」
その言葉とともに刀が引き抜かれる。
だがその刀はどこにもなかった。代わりにアダムの手が血で濡れている。それをハンカチで拭ってアダムは車へと乗り込んだ。
その顔は元のアダムへと戻っていた。
「さあ、行こうか」
車は海に近い国道を走っていく。
町のいたるところから黒い煙が立ち上っていた。時折、消防車のサイレンなども鳴り響いている。
そして時折、建物の陰から人間とは思えない獣のような姿が垣間見え、それが車窓から後ろへと流れていく。
「あれなに？」
「翼手」

「あのゴリラみたいなのが？」
「下等な、人造翼手さ」
「私とお姉ちゃんがあれの女王様なの？」
「アレを君たちと一緒にしないほうがいい。君とあれとでは人と猿の違いくらいに差がある。デルタシリーズが世に蔓延した結果があれだ。僕たちはあれを止めたい」
「でも元は赤い盾の中の、サンクフレシュってところが作ったものなんでしょう？」
「それを盗み出して利用してる組織がある」
「そこがお姉ちゃんを攫った人たち？」
「そう。レジスタンスの連中さ。もしかすると音無響は今頃、彼らの偽装に騙されているかもしれない」
「……お姉ちゃん、人を信じやすいからな」
「君は違うの？」
「私は、私以外を信じてないから」
「強いんだね」
「ううん。弱いから、そうなるの」
奏は響を思った。
——私は、お姉ちゃんがいないとなにもできない。
子供の頃からそうだった。
ずっと響のあとをついて回った。真似をした。一緒にいたいから、一緒になりたいから真似をすることで響と重な

ろうとしていたのだ。

ただ夏のある日——、五歳の夏だった。

コザの広い公園にカイに連れられて遊びに来ていた響と奏は、カイの目を盗んで見晴らしのいい展望台へと上っていった。そのとき確か前を歩いていたのは、まだ小さなアダムだったはずだ。

アダムがふたりの先頭を切って高いところへと登っていったのだ。

そして自分の背丈ほどもある手すりに手をかけ、その上へとよじ登り、そこに器用に腰掛けると、自慢げにこちらを見ていたアダムが笑って言ったのだ。

「響ちゃん、どう？　すごい？」

最初にアダムがかけたのが響に向けた言葉だった。

奏はそれが気に入らなかった。

なんで私じゃないのだろう、と。

だから奏もアダムの横に並ぶように手すりへとよじ登る。

「危ないよ、奏」

響の声が背中に聞こえていた。

それでも奏はやめなかった。

「危ないって。お義父さんに怒られるって」

引きずり下ろそうと奏のスカートを引っ張る響の手があった。
「やだ」
意地を張った奏が思い切り響を足で蹴った。
響は展望台の床に尻もちをついて転がる。そしてその勢いがついた奏は手すりを乗り越え、展望台の反対側から下へと落ちたのだ。
なにが起きたのかはわからない。
ただ身体の真ん中が熱かった。
そして痛かった。
どくどくとお腹のあたりから流れるのが真っ赤な血――、それを見た記憶はある。
そのあとは気を失いなにが起きたのかは覚えていない。
ただ、奏のことを呼ぶ響の声がよく聞こえていたことだけは覚えていた。
その声が遠く遠くか細くなりながらも聞こえ、気がつけばそこは病院の一室で、カイと金髪の女の先生が奏のことを覗き込んでいたのだった。

「ジュリア先生……」
ふと奏がその名をつぶやいた。確かそんな名前のはずだった。
「誰?」
隣に座るアダムが奏に声をかけた。

「今思い出したの」
「なにを？」
「憶えてる？　私が怪我したときのこと」
奏がお腹のあたりを手で押さえる。
「私を治してくれたの。あれって確か、お母さんだよね……。アダムの」
アダムは奏を見つめたまま、なにも言わなかった。
奏の、アダムを見る目の光が弱っていた。
アダムがぽそりと言った。
「さすがは女王。人間ならすぐに効くはずの催眠波長……、やっと効いてくれたみたいだね」
それに奏は答えなかった。
「さあ、行こうか。僕の女王……、ディーヴァ」
「……うん」
ディーヴァと呼ばれて奏がこくりと頷いた。
その目からは光が失われていた。

＊＊＊

車から外に出ると潮風に運ばれた磯の香りが奏の鼻をくすぐった。

海へと下りる階段の下にビーチが広がり、その先に海の浅瀬の中に突き出た岩があった。
「はじまりの場所……」
奏の口から自然に言葉が漏れていた。それにアダムの冷たい声が重なった。
「そう。ここから全てが始まった。だから、ここで終わらせようと思ってる」
遠くから獣のような咆哮が風に乗って聞こえてくる。
先ほど見た翼手たちだろう。
そうした存在がいること自体が異常なはずなのに、奏自身、それを違和感なく受け止めていた。それは自分自身の存在がそうした異質な側に位置しているからなのかもしれない。
声が徐々に増え、そして近づいてきていた。

歌って。

奏にはその声がそう聞こえていた。
まるで子守唄をねだる赤子の声のようだった。
響もこの声が聞こえているのだろうか。聞こえているとするならば、どう聞こえているのだろう——。
奏の口が静かに開いた。

＊　＊　＊

「奏！」
響が足を止めた。
目の前を走っていたチャールズたちが立ち止まり、響を振り返る。
「どうした？」
響が夜空を見上げて奏の居場所を探し求める。
「歌声が、奏の歌が聞こえるんです」
「今度はあたいにも聞こえる。たぶん近い」
ルルゥが響の言葉に頷いた。
「……でももうひとつ」
「もうひとつ？」
響の言葉にチャールズが怪訝そうな顔をする。
「奏の歌に合わせて、さえずるような声が聞こえてくるんです」
「声、だと？」
「はい。まるで夢を見ながら歌っているような……、そんな感じです」
チャールズの顔がにわかに厳しいものとなる。

「まだ目覚めには早すぎる」
チャールズが耳につけたインカムマイクに話しかける。
「こちらチャールズ。緊急事態だ」
インカムのイヤホンから真央の声が届く。
《緊急？》
「棺が開くかもしれない」
《それって――》
「急いでくれ」
《了解。こっちも荷物を回収したから急ぐわ。市街地ちょっとやばいことになってる》
「ヤバイ？」
《翼手が行進してる。そこ突っ切ってくしかなさそう》
「頼む」
《わかった。あ、荷物から伝言。響ちゃんに怪我させるなよ、酔っぱらい――だって》
それを聞いてチャールズの口元がほころぶ。
「もう酒はやめた、と伝えといてくれ」
《了解！》
真央の声が途切れると、チャールズが響とルルゥを見る。
「ここからは戦闘態勢で向かう」

チャールズがそう言って響に長い布包みを手渡す。ここまでチャールズが肩に担いできたものだった。
その包みを受取り、布を解くと中から日本刀が姿を見せた。
「これって——」
「小夜は刀を使ってディーヴァを斬った。翼手と戦うときに、役に立つだろう」
響が日本刀の柄を掴み、鞘からそれを引き抜く。
白く静かな夜のような光がその刀身に宿っていた。
この美しく波打つ刃紋は人を斬るために造られたものなのだ。
素人目に見てもわかった。
これは斬れる——と。
「奏は、私が守ります」
「そうなるよう、俺も願ってる」
その言葉の裏にある悲劇を響は頭から拭った。
繰り返してはならない。
最後に立つ女王はひとりだけだという悲劇を。
「行くぞ」
「オーケー」
チャールズが走り出し、ルルゥがそれに続いた。
響は刀を鞘に収めると、それをしっかりと握りしめ、ふたりのあとへと続いた。

＊＊＊

奏の歌声が波のように広がっていた。
その歌声をビーチに突き出た岩の上で心地よさそうにアダムが目を閉じて聞いていた。そしてそれはアダムだけでなく、歌声に誘われたかのように獣が喉を鳴らすような声がひとつ、またひとつと現れ、数を増していく。見れば宵闇の中で赤い光が星のように蠢いている。
翼手だ。
奏とアダムの周りを翼手が輪となって取り囲んでいた。
だがアダムは、翼手たちを恐れることなく、落ち着いた様子で奏の歌声に耳を傾けている。まるで周りにいる翼手たちがまったく気になっていないかのようだった。
その歌声の中にノイズが混じり始めた。
銃声だ。
翼手の声にも野蛮な咆哮と悲鳴のような雄叫びが混ざり始めていた。それが近づいてきている。
アダムが目を閉じたまま言った。
「子供たちが泣いてる」
それを聞いた奏が歌を止める。
そして振り返る。

視線の先に、奏と同じ顔があった。
響だった。
「奏……」
「お姉ちゃん……？」
響の顔は翼手の返り血に濡れていた。
乾いた拍手の音が鳴った。
それはアダムの手から生まれてくる音だった。
「感動の再会だね。それもこんな素敵な、はじまりの場所で——」
銃声が轟き、アダムの頭が巨大なハンマーで殴られたかのように弾け飛び、そしてその体が公園の芝生の上に転がった。
チャールズが手にしていたM５００から硝煙が立ち上っている。
撃ったのだ。
象をも倒せるリボルバーで、アダムの頭を。
普通の人間の頭であれば形も残らずにただの肉塊と化しているはずだった。普通であれば——。
だがアダムは普通ではなかった。
その頭が再生し、元の天使のような顔へと戻っていく。
「ひどいな、ダディ」
「お前にダディなどと呼ばれる筋合いはない。化け物め」

「せっかく理想的なアダムになってやっていたのに——」
アダムの姿が瞬間的に掻き消え、奏の傍に現れる。
その目は優しげな微笑みを湛えていた。
「奏もそう思うだろ？」
奏はそれに答えなかった。
代わりに響が刀を構える。
「あなたはアダムじゃない。……誰？」
「今はアダムだよ」
「でも違う！」
「仕方ないな」
アダムが高らかに右手を上げる。
するとその両脇に、黒いマントをまとった人影が一〇名ほど現れる。
シフだ。
「この、ニセモノ！」
ルルゥがシフへと戦斧を持って飛びかかる。
シフが風のように散り、そして再び姿を見せたとき、その手には剣や、槍といった物騒な得物が握られ、ルルゥへとその矛先を向ける。
それが届く前にルルゥが光となってその場から逃れる。シフたちがそれを追った。戦闘における経験値はルルゥの

ほうが上だ。だが数はシフたちのほうが多い。デモ隊の人間が変わった本能のままに獲物を求める翼手よりもその戦闘能力は高く、そしてチームとしての動きも見せる。ルルゥが苦戦を強いられていた。
チャールズも翼手を相手に奮闘しているが、相手は人間以上の生命力を持った化け物だ。
彼らに死を齎せるのは、響の血——、響の中に流れる女王の血しかなかった。
みんなを守る。
その気持ちが響を動かしていた。
響の手に握られた刀は、初めて握ったとは思えないほど、その手に馴染んでいた。
そして翼手に傷を負わせ、自らの血を流し込む。
手から痛みが伝わってくる。
それは自らを傷つける痛みであり、相手の命を奪うという心の痛みでもあった。
チャールズが撃った翼手に止めを刺し、ルルゥを追うシフを結晶化していく。
神速の動きで修羅となる響の姿を、奏の瞳が捉えていた。
「お姉ちゃん……、怖い」
「そう。彼女は守るべき相手を間違えている。だからそれをちゃんと教えてやらないと。さあ、歌ってごらん。君の歌は僕たちに勇気を与えてくれる。力を与えてくれる」
アダムに背中を押されて、奏が再び歌声を上げる。
力を解き放つ歌を。

響の刀が翼手の肉へと食い込む。
そのまま刃が通り過ぎるはずだった。だがその刃が途中で止まった。
「え？」
同時に翼手が吠えた。これまでにはない程の咆哮。
翼手が結晶化しながら、響に向けてその爪を振るってきた。
その心臓めがけて。
響が刀から手を離して、そこから逃れる。
爪が身体を掠め、その皮膚が切れた。
切れた上着から白い胸が覗いて見えた。その上に朱線が走り、そしてすぐに消えた。流れた血の跡だけを残して。
「驚いた？」
アダムの声がどこかからか聞こえた。その声はすぐ傍にあるかのようで、そして遠かった。
「翼手は交配相手の女王を殺すはずがない。でも、それ以上に守るべき女王に仇なす敵を狩ろうとする。彼らにとってもっとも大切なものは女王。その身に流れる血に従うのさ」
結晶化して息絶えた翼手から刀を抜き取り、響がアダムを探した。
——あれが全ての元凶だ。
そう響は確信していた。
歌声を上げる奏の姿はそこにあった。

だがアダムの姿は見えない。
女王の目を以てしても追えない速さで動いている。
あれはただの人造翼手などではない。
意思持つ翼手――、シュヴァリエだ。
奏のシュヴァリエだとしたら、奏の意思に従うはずだ。だがアダムはそうではない。どちらかといえば奏を自らの手のひらの上に載せて意のままに操っているかのようであった。
そして奏の歌声が、彼らの力を増強しているように思えた。
翼手は――、シフは――、ディーヴァの血から生まれた翼手だ。
そして奏はディーヴァと同じタイプの血に属する女王。つまりディーヴァの血を持つ翼手たちの血にあの歌声が力を与えているのだろう。
であれば、アダムは、ディーヴァのシュヴァリエ。
自分の血であれば、止められる！
響がアダムに向けて自らの血を塗りつけた刃を突き出す。
手応えがあった。
アダムの体に響の刀が突き刺さっている。
そしてこのままアダムの血が結晶化して――。
「それだけ？」
アダムが微笑みながら響を見ていた。

「どうして……？」
「僕は最強のシュヴァリエになったんだ。『ボルマン文書』を解析し、君の血に対抗できる抗体を体に持っているんだ。功労者のコリンズ博士は死んじゃったけどね」
「……そんな」
響は絶望を感じていた。
たったひとつの切り札が、もっとも倒さなくてはならない相手に通じないのだ。
光が走った。
反射的に響の身体が動き、その光を躱していた。
そこに刃があった。
それはアダムの手から伸びている。アダムの手が刃そのものとなったかのように。
「知ってるかな？　シュヴァリエ殺し。超振動で翼手を再生できないほどに切り刻む刃だよ」
アダムが微笑んだ。
その目に優しさはない。あるのは冷たく赤い光だけだった。
アダムが響の目の前から消えた。
光。
それを手にした刀で受け止め、弾く。
鋭く、疾い。そして手慣れている。
見た目は響とあまり変わらない少年の面影を残す顔立ちをしている。

けれどその戦い方は手練。
経験が響をはるかに上回っている。まるで翼手同士の戦いを何度も経験してきているかのような――。
「不思議？　じゃあ、教えてあげるよ」
アダムの刃の速度が上がる。それを受け止めるだけで響は手一杯になっていた。
「僕はかつてディーヴァのシュヴァリエだったらしい。けれど僕は、一度死んだ。小夜の血でね。
でもシュヴァリエの長兄だったアンシェルという男が、まだ結晶化しきっていなかった僕の脳を取り出して、僕を蘇らせようとしたんだ。行き場をなくしていた赤い盾の副長官だったコリンズ・アイストンを利用したんだよ。
けれど、アンシェルは死んだ。小夜のシュヴァリエの手で。でもコリンズはアンシェルの用意した施設でひとり研究を続けたんだ。そこからシフの血とか、遺されたディーヴァの血とか与えられてなんとか僕の体はできあがったんだ。赤ん坊の状態でね。そのとき、コリンズは僕のことを『リトル・ソロモン』って呼んだ」
「ソロモン……」
「そう。ディーヴァのシュヴァリエ。でもね、僕はその名前が好きじゃなかった。だって一度死んだシュヴァリエだ。最強じゃなきゃ王様にはなれない。女王の傍に立つにふさわしくないからね。
今は新たな女王のために、脅威となる血を排除しなくてはならない。それが僕の生き甲斐だ。そのために赤い盾を手に入れたんだ」
「それでアダムの名前を……」
「力を手に入れるためだよ。それにはゴルトシュミットを手に入れるのが一番手っ取り早いからね。でも、僕のシュヴァリエとしての能力は不完全だった。まだ人間としての体が成長しきってないからかもしれない。顔は変えられて

も、体格までは変えられなかったんだ。そこで翼手と遊んでるデヴィッド――、今はチャールズだっけ？　彼の息子の名前を騙ることにしたんだ。アダムは、赤い盾の総帥、ジョエル・ゴルトシュミットのお気に入りで、いつも一緒にいたからね。子供のいなかったジョエルは、彼を次のジョエルにしようとしていたんだろうね」
銃声がした。
翼手と戦い満身創痍となったチャールズが隙をついて撃ったのだ。
だが銃弾は光となってアダムの体をすり抜け、闇へと消えていった。
代わりに銃を撃ったチャールズの肩にアダムのシュヴァリエ殺しが突き立っていた。アダムは瞬間移動し、チャールズの背後に立っていた。
「ぐぅ！」
「すごいね。これでも悲鳴を上げないなんて。さすがは元赤い盾のデヴィッドだ。その名を継いだ息子のほうはシフと一緒に死んじゃったけどね」
翼手と戦っていたルルゥがこれに気づく。
「チャールズ！」
ルルゥがチャールズの方へと向かうがシフが邪魔をする。
「……デヴィッドは、誇り高き、戦士だ。最後まで諦めない」
チャールズが自らシュヴァリエ殺しを引き抜き、アダムへと抱きつく。
響が見たチャールズの左手には手榴弾が握られていた。
「チャールズさん！」

「わあ！」
爆発音がした。同時にルルゥの悲鳴も。
しかしそれはアダムの背中ではなく、ルルゥのいた方から聞こえてきた。
見ればチャールズの左腕が半ばから消えていた。
アダムのシュヴァリエ殺しが空を向いている。チャールズの左腕を手榴弾ごと切り飛ばし、ルルゥの方へと投げたのだ。
爆発に巻き込まれたルルゥが砂浜の上に倒れていた。
そしてチャールズもがくりとその場に膝をついていた。
「油断も隙もない。本当に、諦めの悪い男だな。デヴィッドを名乗っていたやつって」
蒼白となった顔でチャールズはアダムを睨んでいた。痛みを堪えているのか、噛み締めた口端から一条の血が流れ落ちる。
「でももう文字どおり、手が出ないでしょ？」
それをアダムは冷ややかな目で見つめた。
アダムが響たちに背を向け、歩き出す。
その向かう先には高台があった。
そしてそこへと続く長い階段が――。
「……まさか」
チャールズが苦々しくつぶやく。
その声が届いたのか、アダムが背中で答えた。

「そう。僕は君たちが必死に守り通してきた、はじまりの場所を——、小夜の眠る場所を見つけたんだ。そこだけ彼女の歌を打ち消すような反応があったからね」
アダムの目に暗い光があった。
「僕は小夜を殺す」
響が震える声で言った。
「小夜おばちゃんを……？」
「そう。君の血はもう怖くはない。でも小夜の血はどうだろう？　だから寝ている間に死んでもらうんだ。……僕の中に眠るソロモンの記憶とともにね」
「させない！」
響がアダムの前へと躍り出る。
——守る。もう誰も失いたくない——。
音無小夜は母親であるディーヴァを殺した仇だ。けれど同時に、もっとディーヴァが愛した人でもあった。もうあのふたりの戦いは終わったのだ。
こんな戦い、ここで終わりにしなくちゃいけない。そんな気持ちが響の身体を突き動かしたのだ。
最期まで自分を守るために盾となったデヴィッドがそうしたように。
そんな響の思いに、アダムは冷たい微笑みで答えた。
「無駄だよ。言ったじゃないか。君の血は僕には効かない。——それとも先に逝きたい？」
アダムのシュヴァリエ殺しが響に向けて突き出される。

そのとき——。

キィン！

夜の砂浜に硬いもの同士のぶつかり合う音が響く。
アダムのシュヴァリエ殺しが響の前に不意に現れた人影に遮られていた。
響がその人影を見上げる。
それは漆黒の鎧を身にまとった騎士の姿にも似ていた。
その鎧の手甲がシュヴァリエ殺しを正面から受け止めていた。何者をも切り裂く超振動の刃が超硬度の手甲の前で火花を散らしていた。
その黒い騎士から言葉がかけられる。
「お前は俺が守る。そう約束しただろう」
それで響には十分だった。
黒い騎士が言った。
「俺を信じろ」
「……デヴィッド」
「そんな……、僕のシュヴァリエ殺しが……」
アダムの声が震えていた。

「所詮、紛い物だ」
アダムのシュヴァリエ殺しが光となって砕け散った。デヴィッドの鎧がシュヴァリエ殺しに勝ったのだ。
「シュヴァリエは女王への思いを力に変える。俺は響を守ると誓った。デヴィッドとして、シュヴァリエとして。その思いがこれだ」
シフの自爆から瞬間的にデヴィッドの体を守ったのは、このシュヴァリエの鎧だったのかもしれない。
デヴィッドが鎧の手甲をアダムへと向けて振るった。
アダムが砂浜の上を転がる。
「……まだだ。僕は、まだ、終わらない。僕は僕の女王のために最強のシュヴァリエになった！　お前の女王の血は僕には効かない！」
アダムの手にシュヴァリエ殺しが再生する。
デヴィッドが鎧を構えてアダムに正対する。その背中で響に言った。
「響。あいつは俺が押さえる。お前は奏を止めるんだ」
「どうやって？」
「歌うんだ」
「……え」
「アダムが使ったのは、赤い盾が開発していた催眠波長というものだ。それを打ち消し、奏の目を覚まさせられるのは同じ女王の声しかない。頼んだぞ」
「うん」

デヴィッドの言葉に嘘はない。
お前を守る。
その約束を守ってくれたのだ。
響が奏の目の前に立つ。
「奏……。私の歌を、聞いて」
響の口から歌声が流れた。
それは遠い日に聞いた子守唄だ。
響は、その思いを歌声に乗せていった。

シフや翼手たちが一斉に動きを止めた。
突然増えた歌声に戸惑っているようだった。
だが次の瞬間、その重なる歌声に歓喜するかのように更なる暴走へと翼手が転じていく。
翼手同士が互いに喰らい始めていた。
シフとシフとが斬り合っていた。
町は完全な混乱の中に没し、逃げ惑っていた人間たちもその様を呆然と見つめていた。
傷ついてもなお、治癒する体で傷つけ合う永遠と苦しみの続く無間地獄さながらのカオスだ。
響と奏の歌声が、それを引き起こしていた。
互いが互いを思い歌っていた。

響は奏を。
奏は響を。
シュヴァリエとシュヴァリエが互いのプライドをかけてぶつかり合う。
デヴィッドとアダムが、その存在意義をかけて――。

混乱する翼手たちの中をヘッドライトが突き進んでくる。
マローダーだ。
それが翼手とシフを跳ね飛ばし、チャールズとルルゥの傍で急停止する。
「生きてる？」
運転席のドアが開き、真央が顔を覗かせた。
「ああ」
「あたいも生きてるよ」
チャールズとルルゥが顔を覗かせる。
顔面蒼白のチャールズの体を支える腕があった。
「よう。年の割に頑張ってるじゃねえか」
かつての相棒の顔がチャールズの目の前にあった。ルイスだ。
「すぐに止血してやる」
その傍で銃声がした。

チャールズに襲いかかろうとした翼手の頭が吹き飛んでいた。
イグナイターだ。
「遅くなったな、チャーリー・ブラウン」
チャールズにそう声をかけたのは、手には養父、宮城ジョージの形見であるM1911A1、コルト・ガバメントを手にしたカイだった。
「俺は犬は飼ってないぞ」
苦しげな声ながらチャールズがジョークで返す。
「それならまだ死にはしないか」
「こんなところで死んだら、ジュリアに恨み言を言われるからな。……俺のことより、今はあのふたりだ」
「ああ」
カイの視線の先に高らかに声を上げて歌う、響と奏の姿があった。
デヴィッドの手甲が、アダムのシュヴァリエ殺しが、周りの翼手やシフを巻き込みながら嵐のような戦いを続けていた。
「僕は、最強のシュヴァリエに――、女王の脇に並び立つ最強の男になったんだ」
その激しさを増す剣戟をデヴィッドが受け止める。
思いの力を堅牢さに変えた黒い鎧に亀裂が入る。それをまた、自らの意思の強さで修復して耐える。
デヴィッドが耐えていた。

しかしこのアダムを止める決め手がなかった。コリンズが作り出した響の血を無効化する抗体が実質無敵のシュヴァリエを作り上げていたのだ。

——どうする？

そのとき、デヴィッドとアダムの耳に不意に新たな歌声が届いた。

響と奏が歌う声に、もうひとつの歌声が重なったのだ。

その声はまどろみの中にある寝言のようなハミングのようだった。

それは歌声を上げる響と奏にも届いていた。

——この声は——。

バサリ、と月の中で黒い翼が動いた。

高台の上の空にその影はあった。

黒い翼を持つシュヴァリエが、女王を抱いて舞っているのだ。

ハジと、そしてその愛すべき女王——、音無小夜だった。

小夜がまどろみながら、その目をハジへと向ける。

「……ハジ」

ハジが自らの唇を噛み、そこから流れた血を口へと含み小夜の唇へと流していく。

シュヴァリエの目覚めの血に、小夜の目に光が宿った。

そしてハジが言った。
「小夜、戦って」
小夜は黙って手を伸ばす。
その手にハジが刀を握らせた。
何度、こうしたことを行ってきたのだろう。
小夜がその刃に自らの血を塗りつけ、そして狂った翼手たちの輪へと身を躍らせた。

眠りの淵から夢の世界へとやってきた女王の姿を、カイが見つめていた。
「あいつ……、しょうがねえな」

赤い結晶が月明かりに照らされて星のように舞っていた。
女王とシュヴァリエのダンスだ。
それを彩る赤い星へと翼手たちが変わっていく。
ハジがその手を振るう。
小夜が刃を振るう。
シフが、翼手が、響と奏から流れる歌の中で光となって散っていく。
アダムが動きを止めていた。
「あれが、小夜」

「そう。あれがオリジナルだ」
デヴィッドの一撃がアダムのシュヴァリエ殺しを砕いていた。
翼手の間を踊る小夜の目がアダムを捉えた。
逃げようとした。
しかし体が動かなかった。
「なぜ、僕が恐れる……」
それに応えるように、アダムの頭の中で何者かの声が囁く。

——僕は彼女の思い出の中にのみ生きる影なのです。だから——。

刹那、赤い光がアダムの胸を貫いた。
小夜の刃だった。
まどろみの中にありながら小夜はアダムに自らの血を送り込む。
アダムは自らの体が別のなにかに変わっていくことを感じていた。
赤い結晶に。
「そんな……」
ディーヴァから産み落とされた響と奏の血を小夜の血は超えていた。
作り出された『ボルマン文書』の抗体が持つ力を削ぎ落とすかのように。

その血を消したのは、ふたりの血よりも翼手の源流に近い血が上回ったからなのか、それとも、アダムの血の中に眠るソロモンの血がひとつになろうと、それを求めたからなのかもしれない。
アダムはもうなにも感じなかった。
だが命が全て結晶と変わる間際に、その口から言葉が漏れた。
「……ありがとう、小夜」
それはアダムの深い深い記憶の中にのみ生きていた影の声だったのかもしれない。
赤い結晶が砕け散った。
デヴィッドがアダムの体を手甲で砕いたのだ。

奏の目の前に響が立っていた。
歌いながらふたりで対話をしているかのようだった。
「お姉ちゃん、なんでわかってくれないの。私たちは、人間と違う。ふたりだけが違うんだよ。ずっと変な目で見られ続けるんだよ」
「奏、いい？　それでも私たちの生きていく世界には他の人たちがいる。私たちの秘密を知りながら、カイは私たちに変なことをした？　してないよね？」
「……してないけど、カイは人間だよ？」
「違う。カイは、お父さんだよ。私たちを愛してくれるたくさんの人のひとりだよ」
「でも、でも——、他の人たちはきっと私たちをディーヴァのように扱うよ」

「奏は私が守ってあげる」
「え？」
「私には私を守ってくれるシュヴァリエが生まれた。血の契約で。でもね、同じ血を持つ者同士が互いに互いを守り合える関係になれるのなら、私も奏とそうなれると思うよ。だって、私は奏と同じお母さんから生まれたんだから」
「でも――」
「ナンクルナイサ」
そう言って響が奏に笑った。
「諦めるな。前に進め。明日のために今日を生きてれば、私たちにだってちゃんとした明日がやってくるよ」
「お姉ちゃん……」

奏の歌声が止んでいた。
そして、響の歌声も止んでいた。
「お姉ちゃん……」
「おかえり、奏」
そう言って響が奏の身体を抱きしめた。
奏も響の身体に腕を回し、そしてその胸で泣いた。
歌声が消えると、翼手たちが眠るようにその場に跪き、崩れ落ちる。

その輪の中に小夜とハジが立っていた。
まるで女王に跪く翼手たちの群れのようでもあった。
小夜がふらりとなった。
その体を脇からハジが支える。
「……ハジ、私、なにしてた？」
「夢を見て、歌っていただけです」
「そう」
小夜の視線が動く。
「カイがいる」
小夜の近くにカイがやってきていた。
「……お父さんに似てる」
「俺が？」
カイが笑った。そう言ってカイが小夜の頭を撫でる。
「ねぼすけ。もう少し寝てろ。朝はまだずっと先だ」
「……うん。おやすみ」
「ああ。おやすみだ」
小夜の目がすっと閉じられた。
ハジがその横顔を優しげに見つめている。

「悪かったな」
カイがハジに言った。
「……いえ」
「もう少し寝かせてやってくれ」
「はい」
「ああ、それと」
「なんでしょう？」
「たまには顔を見せに来てくれよな。約束だぜ？」
「……約束、ですか」
ハジが翼を広げた。
「ならば、守らなくてはなりませんね」
翼が風を起こした。
小夜を抱いたハジが宙へと舞い、そして夜空の闇へと消えていった。
空を見上げるカイのもとにふたつの足音が近づいてきた。
響と奏だった。
「お義父さん。ごめんなさい」
奏が言った。
「やっとお義父さんって呼んでくれたか」

大きな手が奏の頭を包み込む。
温かい手だった。
そしてそんなふたりを見つめる響の頭の上にも大きな手が載せられた。
「頑張ったな」
「……うん」
それだけで十分だった。

夜明け

「無茶ばかり」
赤い盾の母船の中にある病室の一室で愛すべき夫の包帯を変える妻の姿があった。
チャールズとジュリアのふたりだった。
「悪かったな」
「男ってなんでこう無茶ばかりするのかしらね。あなたも、アダムも――」
「すまない。それで俺はいつから動ける？」
「まだ無理よ」
「だが赤い盾の再建が――」
「ダメ。主治医の言うことを聞きなさい。その義手が安定するまで私がつきっきりで看護します」
「しかしだな――」
「ルイスに任せましょうよ。それに久しぶりの夫婦水入らずなのに？」
チャールズが黙り込んだ。
その唇をジュリアの唇がそっと覆った。

＊＊＊

「翼手の回収、終わったぞ。次はなにするんだ？」
赤い盾の司令室の中で、ルルゥがルイスに言った。
「あー、そうだな。次は――」
「ごはんか？　ごはんならいくらでもやるぞ！」
「ご飯はまだよ」
真央がルイスに代わって答える。
「翼手が沈静化して、ここの人たちの催眠支配も消えたっていうのに、なんで私たちがこんなことばかりさせられるわけ？」
「悪いな、真央。でも仕方ないだろ、チャールズがあんなんだからな。相棒としちゃほっておけないんだよ」
「あの頑固もの、どうせ今頃ジュリアといちゃいちゃして、デレデレのはずよ。どうせなら私もカイといちゃいちゃしたかったのに」
「旦那が海外飛び回ってるってのに問題発言だな」
「いーの。ＯＭＯＲＯのパート入るつもりだし」
「ああ、そうか。今日からか」
「うん。あの場所で、また始めるんだって。カイらしいっていうか……、帰る場所、用意しとくんだってさ」

＊＊＊

コザの町に開店祝いの飾られた店がオープンしようとしていた。
沖縄風居酒屋ＯＭＯＲＯ。
もともとカイたちが住んでいたあの場所でＯＭＯＲＯを再開したのだ。
そんな目出度い日、店の前に響と奏の姿があった。
「お姉ちゃん、本当に行っちゃうの？　今日から新しいお店始まるってのに」
「うん。ちゃんとお義父さんの手伝いするんだよ」
「私にできるかなぁ」
「できるよ」
「それより私、お姉ちゃんのほうが心配。だってアダム――じゃなかった、デヴィッドと一緒なんでしょう？　ふたりきりなんて――」
「しょうがないじゃない。彼は私のシュヴァリエなんだから」
「なんかノロケ聞かされてる気がしてきた。それにお姉ちゃん、私を守ってくれるって言ったじゃん」
奏が膨れる。
「だから行くんだよ。私たちがこの先、生きていくために、もっとこの広い世界を知りたいんだ」
「いつ帰ってくるの？」

「……そうだね。ぐるりと世界を回って、伯母さんが起きた頃に戻ってきたいかな。お礼言えてなかったし」
「うん。じゃあ今度はそのときに」
響が歩き出した。
その背中を奏が見つめていた。角に黒い人影が響を待っていた。デヴィッドだろう。
「なんかやけるなぁ。私もシュヴァリエ作っちゃおうかな」
「だめだ！」
店の奥からカイの声が上がった。
「お前はしばらくお義父さんのところにいるんだ」
「えー。じゃあお義父さん、私のシュヴァリエになる？」
「ばか。俺はそんなものより強い絆で結ばれてんだよ。家族っていうやつでな」
「でもお姉ちゃん行っちゃって心配じゃないの？」
「俺が帰る場所になってる限り、あいつはちゃんと帰ってくる。お前もそうなんだぞ、奏」
「うん、そうだね」
奏は微笑み、そして店の中へと入っていく。
「ねえ、ゴーヤチャンプルの作り方教えて！」

＊　＊　＊

風がそよぐ高台にある沖縄古来の墓にハジが立っていた。
その視線の先を行くのは、シュヴァリエを連れた響の姿だった。
「先輩から見て、彼はどうなの？」
その女言葉で話す声がハジの背後からかけられた。ネイサンだった。かつてのディーヴァのシュヴァリエのひとり――謎多きシュヴァリエだった。
「あなたこそ……、ずっと彼女たちを見守っているじゃないですか」
「だって、シュヴァリエだもの。女王に仕える、ね。それは時代を超えても残るものでしょう？　ＳＡＹＡの血を持つ私から見たら、あなたは息子みたいなもんなんだし、仲良くしましょうよ」
ハジは答えなかった。
「ほんと、あなたもカチコチね。でも、なんで小夜を起こしたりしたの？　ベトナムで怖い思いしたってのに？」
「恐れたのは私が弱かったから。愛した小夜を信じていなかったからです。ですから、もう――」
「怖くない？」
ハジがそっと頷く。
「じゃあ、彼も同じかしら。シュヴァリエは相手の女王を求めるけれど、その愛は女王に永遠に向けられるもの。そして守るべき女王を愛したとき、それは強さに変わる。彼はそれを手に入れたのね」
「はい」
ふたりの視線が響のシュヴァリエに注がれる。

沖縄の海に突き出た岩を見つめながら響は歩いていた。その後ろをデヴィッドがついてくる。
「ひとつ聞いていい？」
響が言った。
「なんだ？」
「その髪、染めてるの？」
「ああ。転校したら目立つだろ？　今はシュヴァリエの力で変えられるから染めてない」
「そうだったんだ」
響が太陽の日差しを受けて輝く海を見て、足を止める。
「……どこに行こうか」
「金ならある。どうやらジョエルの遺言で俺が赤い盾の全てを掌握しているからな」
「じゃあ豪遊するとか？」
「奏のようなことを言うんだな」
「だって同じ女王様だもの。世界にたったふたりだけの」
ふと岩を見つめていた響の足が止まる。
「決まった。フランスに行きたい」
「フランス？」
「本当のはじまりの場所。お母さんの生まれた場所を見てみたい。そして、この世界のどこかにいる仲間に会って話したいの。私たちはひとりじゃないって」

そんな響の傍らにかしずき、デヴィッドがうやうやしく頭を下げた。
「女王の仰せのままに」

BLOOD♯／完

あとがき

本作を手に取って頂き、ありがとうございます。作者の藤咲淳一です。
二〇一六年の元旦に「今年やりたいこと」とツイッターにイメージイラストをアップしてから一年とちょっと。そして九月一〇日に武蔵野カンプスで開催した『ＢＬＯＯＤ＋』一〇周年イベントで「書くよ」と発表し、ようやく形になりました『ＢＬＯＯＤ♯』。
お待たせしてすみません。
続編って作ってしまうとその前の物語を超えることができないとか、いい感じで終わっていたものの余韻が消されてしまいそうな気がしてしまって残念な気持ちにさせてしまったらどうしようとか、いろいろ考えててなかなか手がつかなかったというのが本当のところです。
でも一〇年が経って、いろいろと冷静に作品を見つめられるようになって、書きたいことが見えてきて。
作品を愛してくれるファンの皆様に今の僕の気持ちを伝えておきたい――というのがこの本を書かせた原動力でした。
書いてて懐かしい顔が見える度に面白かったり、デヴィッドと響だったり、アダムと奏だったりと、自分で書いてても話の展開にハラハラドキドキしてました。
あとがきといっても先に読んじゃう人もいるので中身について触れることはしませんが、カバーイラストを書いた

り、章扉のイラストを描く作業のために、箸井地図さんには先に書いた推敲前の書きたてホヤホヤの生暖かい原稿を一章一章書き上がる度に送って、メールで感想とかもらったりしてたんですが、なんか箸井さん、ふつーのファンみたいに喜んでくれたりするんでそれが励みになったりしてました。「アニメで見たい」とか返事もらうんですが、自分ひとりの力だけじゃそればかりはどうにもなりません。まずはアイジーとかアニプレさんとか動かさないといけないので……。皆さんの応援あれば努力はしてみます。

ただ今は映像化以上に、謎の広まったこの世界観を広げていくことも楽しいし、四番目のBLOODを考えるのもいいかなあとか思っています。

僕は物語を書く度に新しい世界を冒険しています。

締め切りという敵を前にして逃げ出したくなったり、アイデアがまとまらないというトラップを乗り越えられずにダメージを負ったりといろいろですが、それでも物語を想像し、紡ぐ楽しさが僕を突き動かしてます。

この本で『BLOOD+』を知った未見の皆様も、これを機会に『BLOOD+』を見て楽しんで頂けるとうれしいです。一〇年以上も前の作品なんで僕としては至らないところが多く作り直したい気分になりますがあれはあの時しかできない作品だったからこその味があります。

そしてファンの皆様、協力して頂いた多くの皆様、本当にありがとうございました。

全ては女王と、読者の皆様のために——。

藤咲淳一

BLOOD#

著者　藤咲淳一
原作　Production I.G・Aniplex
イラスト　箸井地図

発行日　2017年3月15日　初版発行

発行人　保坂嘉弘
発行所　株式会社マッグガーデン
〒102-8019 東京都千代田区五番町6-2 ホーマットホライゾンビル5F
編集 TEL：03-3515-3872　FAX：03-3262-5557
営業 TEL：03-3515-3871　FAX：03-3262-3436
印刷所　共同印刷株式会社
装幀　小椋博之、佐藤由美子

ISBN978-4-8000-0657-8 C0093



9784800006578

1920093013000

ISBN978-4-8000-0657-8
C0093 ¥1300E

定価 本体1300円 +税
マッグガーデン